

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第649集

みや の から づか  
**宮野貝塚発掘調査報告書**

警察施設災害復旧事業(大船渡警察署綾里駐在所建設)  
関連遺跡発掘調査

2016

岩手県警察本部  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 宮野貝塚発掘調査報告書

警察施設災害復旧事業（大船渡警察署綾里駐在所建設）  
関連遺跡発掘調査



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、警察施設災害復旧事業大船渡警察署綾里駐在所建設に関連して、平成26年度に発掘調査を実施した宮野貝塚の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代前期から弥生時代、平安時代に亘る遺物が多く出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県警察署本部、大船渡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年2月

公益財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 菅野洋樹

## 例　　言

1. 本報告書は、大船渡市三陸町綾里字宮野15-3 ほかに所在する宮野貝塚の調査成果を収録したものである。
2. 調査は、警察施設災害復旧事業大船渡警察署綾里駐在所建設に伴う緊急発掘調査である。岩手県警察署本部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。  
遺跡番号：MG40-2398　　遺跡略号：SRMK-20-14
4. 発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。  
面　積：375m<sup>2</sup>　期　間：平成26年4月7日～5月30日  
担当者：主任文化財専門員 星 雅之 期限付調査員 佐々木隆英
5. 室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。  
平成26年6月1日～8月31日、11月1日～平成27年3月31日 担当者：星 雅之
6. 本報告書は、第1章は岩手県警察署本部警務部会計課に依頼し、その他は星が執筆した。図版全般は佐々木が編集・作成した。
7. 石材鑑定は花崗岩研究会に依頼した。
8. 石器図化・トレースは（株）ラングに委託した。
9. 基準杭は、中井測量設計株式会社に委託している。
10. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。  
川向聖子（山田町教育委員会）、菅野紀子（一戸町御所野縄文館）、神原雄一郎（盛岡市遺跡の学び館）、菅 常久（岩手県教育委員会）、工藤やよい（大船渡市教育委員会）、小林 克（秋田県教育委員会）、齊藤慶史（青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室）、佐藤智雄（大船渡市教育委員会※函館市派遣）、鈴木めぐみ（大船渡市教育委員会）、茅野嘉雄（青森県埋蔵文化財調査センター）、千葉正彦（岩手県教育委員会）、永嶋 豊（青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室）、藤原秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課）
11. 野外調査では大船渡市の方々にご協力いただいた。
12. 本遺跡の調査成果は、ホームページや調査略報に掲載しているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
13. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の概要 .....	1
1 遺跡の位置・立地 .....	1
2 地理的環境 .....	3
3 周辺の遺跡 .....	4
4 宮野貝塚過去の調査 .....	7
5 基本層序 .....	10
III 野外調査と室内整理の方法 .....	12
1 野外調査 .....	12
2 室内整理 .....	12
IV 検出された遺構 .....	13
1 土坑 .....	13
2 柱穴状土坑 .....	15
3 獣骨・炭化物集中区 .....	15
V 出土遺物 .....	20
1 縄文時代・弥生時代・平安時代の土器 .....	20
2 土製品 .....	23
3 石器類 .....	23
(1) 剥片石器 .....	23
(2) 碠石器 .....	24
(3) 石製品 .....	25
(4) チップ・フレーク .....	26
4 動物依存体 .....	26
VI 総括 .....	52
1 遺構 .....	52
2 遺物 .....	52

VII 考察	53
1 宮野貝塚過去の調査歴	53
2 地区毎の時期の占地	54
3 過去の津波浸水域と遺跡立地について	55
報告書抄録	84

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第15図 土器（7）	33
第2図 地形分類図	3	第16図 土器（8）	34
第3図 周辺の遺跡	5	第17図 土器（9）	35
第4図 宮野貝塚過去の調査箇所	9	第18図 土製品	36
第5図 造構配置図	16	第19図 石器（1）	37
第6図 基本層序	17	第20図 石器（2）	38
第7図 土坑	18	第21図 石器（3）	39
第8図 柱穴状土坑、獸骨・炭化物集中区	19	第22図 石器（4）	40
第9図 土器（1）	27	第23図 石器（5）	41
第10図 土器（2）	28	第24図 石器（6）	42
第11図 土器（3）	29	第25図 石器（7）	43
第12図 土器（4）	30	第26図 石製品（1）	44
第13図 土器（5）	31	第27図 石製品（2）	45
第14図 土器（6）	32		

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景	59	写真図版14 土器（7）	72
写真図版2 遺跡全景	60	写真図版15 土器（8）	73
写真図版3 基本層序・トレンチ	61	写真図版16 土器（9）	74
写真図版4 包含層掘削	62	写真図版17 土製品	75
写真図版5 土坑（1）	63	写真図版18 石器（1）	76
写真図版6 土坑（2）	64	写真図版19 石器（2）	77
写真図版7 土坑（3）	65	写真図版20 石器（3）	78
写真図版8 土器（1）	66	写真図版21 石器（4）	79
写真図版9 土器（2）	67	写真図版22 石器（5）	80
写真図版10 土器（3）	68	写真図版23 石器（6）	81
写真図版11 土器（4）	69	写真図版24 石製品（1）	82
写真図版12 土器（5）	70	写真図版25 石製品（2）・獸骨	83
写真図版13 土器（6）	71		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡表	6	第3表 土坑観察表	14
第2表 宮野貝塚過去の調査歴	9	第4表 柱穴状土坑観察表	15

第5表 土器重量表	20	第10表 土器観察表（2）	47
第6表 石器器種毎点数	25	第11表 土器観察表（3）	48
第7表 チップ・フレーク重量表	26	第12表 土器観察表（4）	49
第8表 動物遺存体表	26	第13表 土製品観察表	50
第9表 土器観察表（1）	46	第14表 石器・石製品観察表	50



## I 調査に至る経過

宮野貝塚は、「大船渡警察署綾里駐在所」新築工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

大船渡警察署綾里駐在所は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波被害を受け全壊・流出したことから、綾里駐在所管内における治安維持活動に空白が生じないよう拠点施設として早急に復旧せざる必要があることから事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県警察本部から平成25年1月4日付岩会第1号「大船渡警察署綾里駐在所建設事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成25年2月6日に試掘調査を実施し、工事に着手するには宮野貝塚の発掘調査が必要になる旨を平成25年3月7日付教生第1661号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当本部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当警察本部は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

岩手県警察本部警務部会計課

## II 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置・立地

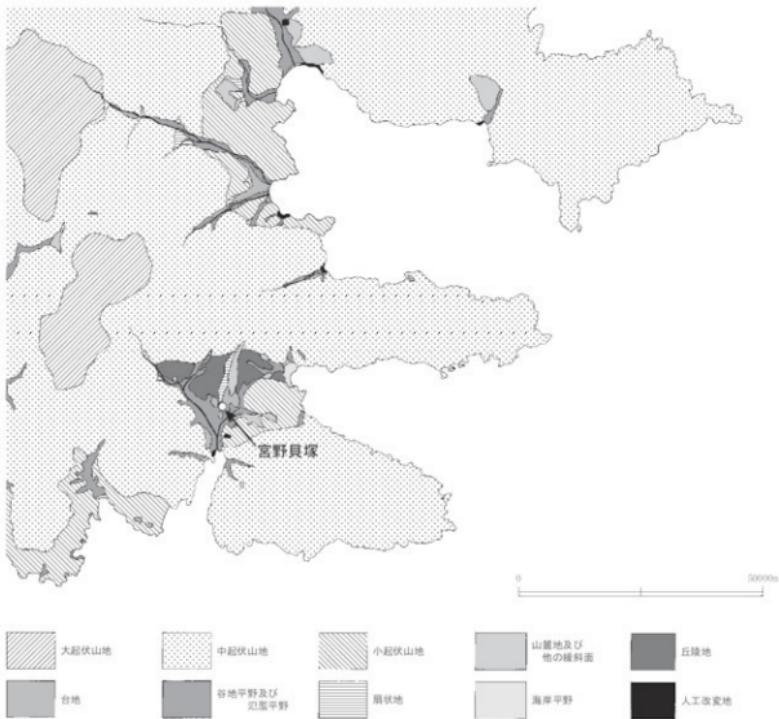
宮野貝塚のある大船渡市三陸町は、岩手県三陸沿岸南部に位置し、沖合一帯が親潮と黒潮の交流海域で世界的にも有数の良好魚場にあり、古来より漁業資源に恵まれたところである。旧三陸町は、東西約10km、南北約15km、面積は138km<sup>2</sup>の町で、昭和31年（1956年）吉浜村、越喜来村、綾里村が合併し気仙郡三陸村となり、昭和42年（1967年）に町制施工で三陸町となる。平成13年（2001年）大船渡市に編入され現在に至る。気候は、やませ風などが卓越する関係で夏は涼しいが、秋の長雨が終わつた10月頃から冬を中心として春の半ばころまで晴天が多く暖かい。当地域には、過去に幾度も津波災害が発生している。明治29年（1896年）の三陸地震津波、昭和8年（1933年）の三陸地震津波、昭和35年（1960年）のチリ地震津波などが知られている（Ⅶ考察で後述することとする）。

遺跡は大船渡市三陸町綾里字宮野に所在し、位置は北緯39度3分7秒、東經141度47分56秒にあり、国土地理院発行の地形図1/25,000「綾里」（NJ-54-14-2-24）の図幅に含まれる。縄文時代前期から平安時代にかけての集落遺跡で、古くは慶応義塾大学、東北大、岩手県教育委員会、最近では三陸町教育委員会や大船渡市教育委員会により調査が実施され、今回の調査が第20次調査となる。宮野貝塚の遺跡周知範囲は広く、南北約580m、東西約250mに亘る。遺跡の北辺付近に三陸鉄道南リアス線綾里駅があり、今回の調査区は綾里駅から県道9号へ向かう市道と県道9号の交差する角地付近で、綾里駅から南へ約200mに位置する。今回調査区の標高は18m前後で、南向き緩斜面地に立地している。

1 遺跡の位置・立地



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図

## 2 地理的環境

旧三陸町は、北上山地の南東縁にあり、東側は太平洋に面している。地形は急峻な山地地形とリアス式海岸、そして切り立った海食崖によって特徴付けられる。宮野貝塚のある大船渡市三陸町綾里地区は、北に大股山（標高613m）、綾里富士（標高479m）が連なる小・中起伏山地（立石山山地）の麓に形成される低地帯に位置する。低地帯には幾筋もの沢と合流して水量を増した綾里川が南流し、途中小規模な沖積地を形成しながら綾里湾に流れる。宮野貝塚が位置する地域は、綾里富士の山麓に発達する扇状地と立石山山地縁辺の丘陵が入り組み、沢によって細かく地形が分断される。宮野貝塚は綾里富士裾野から南に約400m延びる崖錐性扇状地末端部に位置し、西側の縁辺下には沢が流れる急崖となる。東側の縁辺は緩やかに傾斜し低地に至る。扇状地末端部は南の沖積地に張り出し、縁辺部は沢など小河川によって浸食され、狭い舌状の地形を呈している。

### 3 周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課で作成した「岩手県遺跡情報検索システム」(平成26年3月31日現在)によると、大船渡市内には190カ所の遺跡が登録されており、その内旧三陸町内には78箇所ある。

第3図及び第1表には、遺跡のある綾里地区を中心に、越喜来・赤崎地区の一部の範囲に所在する51遺跡を収録した。ここでは図幅中に所在する遺跡を取り上げるが、弥生時代や古代は調査事例に乏しいことから、縄文時代（本章では以後時代は割愛する）の遺跡を中心概要を述べることとする。

補足として、浪板Ⅱ遺跡及び新釜遺跡は、「岩手の貝塚」（岩手県教育委員会：1998）では「浪板貝塚」と「新釜貝塚」の、貝塚の名称で記載されており、遺跡名称が混乱している。ただし、ここでは「岩手県遺跡情報検索システム」に従い記述することとする（註1）。

縄文の遺跡は多く、今回作成した図幅中にも46箇所が該当する。縄文中期を中心に後期や晩期の遺跡が顕著に点在する。また、時期が複合する遺跡が多い特徴も看取される。

調査歴がある遺跡は、大洞貝塚、蛸ノ浦貝塚、宮野貝塚をはじめ、砂子浜貝塚、清水遺跡、野々前貝塚（工事立会）、櫛館（試掘調査）、船遺跡がある。

大洞貝塚は、縄文後期～弥生の貝塚として知られ（※過去には大木9式、十腰内Ⅲ・Ⅳ式、大洞B～A'式、弥生土器などが出土している）、縄文晩期の土器型式（大洞諸型式）が設定された標識遺跡である。調査歴は多く、大正14年長谷部言人他、昭和10年角田文衛他、昭和26年東登他、昭和31年江坂輝彌他、昭和33年早稲田大学、昭和35年江坂輝彌他、平成6～13年大船渡市教委などにより実施されている。平成13年（2001年）に国の史跡に指定されている。

野々前貝塚は、平成24年に個人住宅浄化槽建設に伴う立会調査が行われ、縄文後期～晩期と推定される人骨5体、埋設土器1基、集石1基、縄文前期・後期・晩期の土器が検出されている。

蛸ノ浦貝塚は、昭和9年に国史跡に指定された縄文前期～中期の大規模な貝塚遺跡である。この遺跡は、大正13年菅野義之助・同年柴田常恵・小田島祿郎、昭和32年西村正衛、昭和56年及川淳・金子浩昌・金野良一により調査が行われている。土器は、大木4・6・8a・8b・9・10式などが出土している。

上記以外で、各種文献（※主に11頁に記載した文献1～4）から出土土器の内容が把握できる遺跡を下記するが、土器型式の記載が無い場合は筆者が型式判断したもののが含まれる。誤認あれば全て筆者の責任であることを追記しておく。

中村貝塚から大木8a・8b式が、杉下遺跡より大木7a・7b・8a式、寺田遺跡より大木1～3式、鬼沢遺跡（※越喜来字鬼沢）より大木9式、藤野田貝塚より大木6・7a式、浪板Ⅱ遺跡から十腰内I式や加曾利B式、泊貝塚より大木1式、加曾利B式、大洞A式、砂子浜貝塚（※確認されている貝層は哺乳類や岩礁性貝類を主体とする）が大木2b・5～9式、新釜遺跡から大木2b・8b・9式と門前式、大平遺跡より大木10式、野々前貝塚から大木1・2・8式、宮戸Ⅱ式（※上述した平成24年の調査では縄文後期中葉や晩期を中心に、大木1式も出土している）、大洞C2・A式、大畠野遺跡から中期前葉～末葉、馬の背遺跡から大木1式（※この遺跡からは縄文早期末葉の土器も見つかっているらしい）、垂水遺跡より大木9式、道尻貝塚から大木10式、門前式、長崎貝塚より大洞C2式が出土している。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡表

番号	遺跡名	種別	時代	内容	備考
1	中村貝塚	散布地	縄文	圓文土器（中期・後期）、石砲、石劍、錫器	大木8a・8b、一部破壊。文献1・4
2	寺道跡	散布地	縄文・古代	圓文土器（中期）、石砲、須恵器、陶器器	大木1・3、文献4
3	秒子遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期・後期）、石砲、錫器、石劍	大木1・a・7b・8a、文献4
4	船造遺跡	散布地・集落跡	縄文	圓文土器（前期・中期）	H247 新規発見、H24.11~12 市政委員会調査（復興）
5	中村遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期・後期）、石砲、石刀片	H247 祖國松大
6	藤野田貝塚	散布地	縄文	圓文土器（中期）	大木6・7、文献1・3
7	浜板原遺跡	散布地	縄文	圓文土器（後期）、石砲、石蹴	十勝内1、加曾利B、一部破壊車浜板貝塚と同一遺跡か、文献1
8	茂根I遺跡	散布地	縄文	圓文土器、石斧、石斧、鉄針、石頭	
9	下山遺跡	散布地	縄文・古代		
20	風不遺跡	散布地	縄文	圓文土器片、釣針、石棒	
11	汎之沢遺跡	散布地	縄文	圓文土器（後期）	
12	高森組	城館跡	中世	主郭	
13	芦川河遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期）、石斧	文献4
14	芦川河II遺跡	散布地	縄文	圓文土器（後期）、?器	
15	泊貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（中期・後期）、錫器、紙骨片	大木1、加曾利B、大洞A、貝層あり、文献1・4
16	平田組	城館跡	中世	主郭、二の丸、土堀	
17	上前田遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期・後期）	
18	鬼沢遺跡	散布地	縄文	圓文土器（後期）、?器	大木9、文献4
19	小石浜	散布地	縄文	圓文土器（後期）	後期末~晩期初、文献4
20	紹々森貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（後期・晚期）	埋藏、文献1
21	秒子浜貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（中期・後期）、石砲、石斧、石槍、石劍、魚骨、紙骨、貝類、人骨片	大木2b・5~9、一部破壊。H11試掘（宅地造成）、文献1・3・4
22	新茶道跡	散布地	縄文	圓文土器	大木2b・8b・9、門前、一部破壊新茶並貝塚、文献1・4
23	荒友遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期）、石斧	文献4
24	寺原遺跡	散布地	縄文	石斧	
25	柳沢遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期～後期）、共生土器、石砲、石斧、ふいごの羽羽	大洞A、文献4
26	大学遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中期・後期）	大木10、文献4
27	殿原遺跡	散布地	縄文	圓文土器	
28	野形遺跡	散布地	縄文		
29	野形組（花輪組）	城館跡	中世	主郭	
30	宮野貝塚	貝塚	縄文・弥生・古代	圓文土器（前期～後期）、共生土器。後北式土器（C2式）、石砲、石斧、石槍、石劍、魚骨、紙骨、貝類、人骨	大木1・10、門前、十勝内1~4、大洞B~A、共生遺跡、土器器。昭和52年3月二神町指定文化財「史跡・御殿跡」。合併に伴い、平成13年11月 大船渡市指定文化財（史跡）、文献3
31	清水遺跡	散布地	縄文	圓文土器片	H21 新規、H24.9~10 市政委員会調査（復興）
32	岩崎遺跡	散布地	縄文	圓文土器片	H6 露尾一部客土
33	平熊	城館跡	中世	主郭、帯郭	
34	大畠明道跡	散布地	縄文	圓文土器（中期）	
35	馬の背遺跡	散布地	縄文	圓文土器、石べッタ、錫器	大木1
36	野ノ前貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（前期～後期）、石砲、石劍、錫器、石べッタ、石槍、骨角、貝類、人骨	大木1・2・8、宮野B、大洞C2~A、一部破壊。H22.6 大船渡市教委試掘。文献1・2
37	向山遺跡	散布地	縄文		
38	楓原	城館跡	中世	主郭、帯郭、二の丸、土堀	H4 試掘（墨田木部）H9 試掘（農林課）
39	高船城	城館跡	中世	主郭、帯郭	
40	黒木遺跡	散布地	縄文		
41	泊貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（中期・後期）、骨べッタ、紙骨片、魚骨	大木10、門前、文献1
42	坐木遺跡	散布地	縄文・古代	圓文土器（中期）、土鍬器片	大木9、文献4
43	後ノ入道跡	散布地	縄文	圓文土器（前・中期）	
44	大洞貝塚	貝塚	縄文・集落跡	圓文土器（後・後期）、石器、骨角器	大木9、十勝内Ⅱ・Ⅴ、大洞B~A、弥生、平成13.8.13日指定史跡
45	札林遺跡	散布地	縄文	圓文土器（晚期）、石器	
46	鬼沢遺跡	散布地	縄文	圓文土器（中・後期）	
47	精ノ泊貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（前・中期）、骨角器、貝製品	大木4・6・8a・8b・9・10、照和9年国指定史跡、文献1
48	鳥沢遺跡	貝塚	縄文	圓文土器（後期）	
49	長崎遺跡	散布地	縄文	圓文土器（前・中期）	
50	長崎貝塚	貝塚	縄文	圓文土器（晚期）	大洞C2、一部墳塚。文献1
51	外谷遺跡	散布地	縄文		

#### 4 宮野貝塚過去の調査

宮野貝塚は全国的に古くから知られた遺跡で、昭和3年東京帝国大学発刊の「日本旧石器時代遺物発見地名表 - 第5版 -」に岩手県史蹟名勝天然記念物調査会委員でもあった小田島祿氏によって報告されている。宮野貝塚の調査箇所の指標としては、従来から貝層調査箇所であるA～F地点の6箇所が知られ、これらA～F地点は三陸鉄道南リアス線綾里駅の南側一帯の小高い丘陵地の南斜面を閉むような形で点在している（この丘陵上に現存する「雲南社」の堂宇を、半円状に閉むようにA～D地点が分布し、東～南東側の緩斜面地にE・F地点が分布する）。以下には、過去の調査内容の精査を試みた第18次調査の報文（大船渡市教委：2014）を基本文献とし記述する。その際、調査箇所を示す場合は、1970年発刊の第6次調査報告書の記述を優先し「地点」ではなく「地区」で示す。それぞれの地区的位置は第4図を参照いただきたい。なお、過去の調査箇所は明確でないものもあるらしいが、これらの精査はⅦの考察で後述することとする。

**【第1次調査】** 昭和15年5月、慶應義塾大学大山柏氏・竹下次作氏・藤岡謙二郎氏・清水潤三氏等により数日間調査を実施したのが最初の調査のようである。調査地点は定かではないがA・D地区付近と云われ（※A地点貝塚脇付近との伝聞がある）、後に宮野貝塚調査團によって隣接地が調査され、4体分の人骨と嬰兒骨を納めた埋設土器2基が発見されるなど、A・D地区には濃い密度で墓域が形成されていることがうかがわれる。

**【第2次調査】** 昭和36年、盛岡市民館吉田義昭氏、盛高等学校東登氏を調査担当とする緊急発掘調査が実施され、A地区貝塚を中心にB・C・D地区貝塚が調査されている。この調査では、土器ミカン箱8箱分（A地点：大洞B～BC式主体 B地点：大木8b・9式、門前など C地点：大木5・6式 D地点：大木8a式、後期前半）、土偶（大洞B～BC式期）、土製輪（若しくは耳輪）、石器9点の他、骨角器（釣り針、鉛、骨鎌、貝輪、竪穴具、装身具など）が出土した。特記事項としては、A地区より縄文時代の埋葬人骨（横臥屈葬）1体が出土している。

**【第3次～5次調査】** 昭和44年8月、綾里駅前道路建設にかかる緊急発掘調査が岩手大学草間俊一氏・盛岡市民館吉田義昭氏によって「第3次調査」として実施される。調査地点はF地区を貫く駅前道路内で、調査時には東貝塚と呼んでいた地点である。またE地区において試掘調査を実施し、新たな貝層の確認をしている。この綾里駅建設に関連する緊急発掘調査は昭和42年3月、昭和43年8月にも実施しているようであるが詳細は不明である。

**【第6次調査】** 昭和45年3月、綾里駅前道路の東西両側が都市計画構想に基づき土地開発が行われることになる。そのため事前の緊急発掘調査が実施されることになり、慶應義塾大学江坂輝彌・岩手大学草間俊一・盛岡市民館吉田義昭の3名が調査を担当し、昭和45年3月15日から29日にかけて15日間実施された。E地区には慶應義塾大学岡本孝之氏、F地区には鈴木道之助氏が配置されている。また自然遺物担当として早稲田大学金子浩昌氏、人類学担当として新潟大学小片保・森本岩太郎氏、調査補助に日本考古学協会武田良夫氏を迎えるなど本格的な調査体制が敷かれていた。F地区では縄文前期と中期の2枚の貝層が検出された。特記事項として、イノシシの歯を穿孔した装飾品を纏った壮年の女性人骨（仰臥屈葬、頭位は北）がF地区から発見された。E地区では縄文後中期を主体とする貝層が確認された。貝類はイガイが80%以上を占め、アサリ、マガキなど34種類が出土した。また、縄文中期の堅穴住居の竪穴に貝層が形成されていたことが明らかにされるなど貝塚形成を知る上で重要な調査所見が見出された（三陸町教委：1970）。

**【第7次・8次調査】** 昭和50年に岩手県教育委員会によってF地区の発掘調査が実施される。詳細は

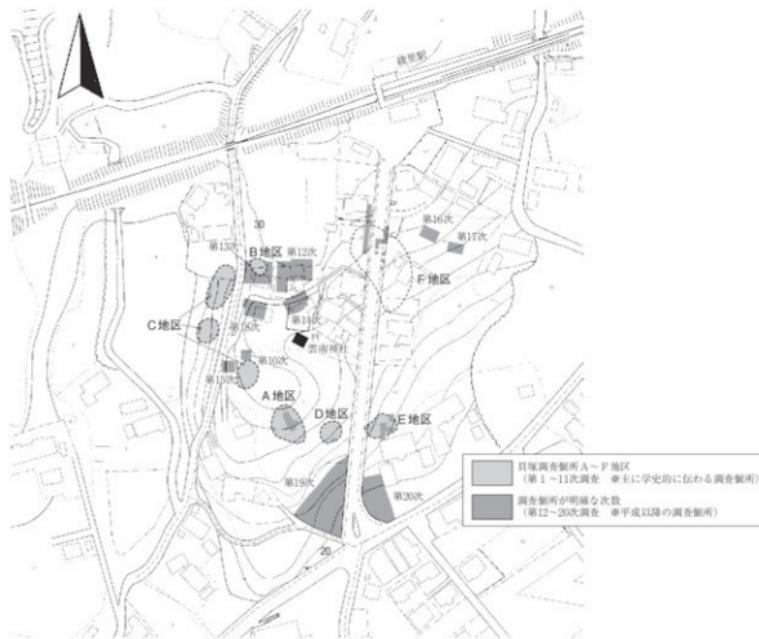
不明であるが、この調査では粉末状になった貝層が確認されていたようである。翌年の昭和51年2月にも岩手県教育委員会によってB地区の発掘調査が実施されていたようである。

【第9次～11次調査】昭和53年より北海道大学林謙作氏を代表とした宮野貝塚調査団によって、A・B・C・D地区を中心とした学術調査が、昭和55年まで3次にわたり実施される。昭和53・54年度はB地区の調査を行い、嬰児・成人男性各1体分の人骨を発見している。また「・・・東西方向に走る浅い浸食谷」と記述される地点（報文のC地点は從来のA地区に相当するようである）では、縄文晚期後葉の大洞A式から弥生前期前葉の砂沢式土器の遺物包含層を確認している。昭和55年は、「大山柏による調査が実施され・・・」とされる地点の隣接地を調査対象地（A・D地区）とし、成人男性4体、嬰児骨を納めた埋設土器2基を発見している（宮野貝塚調査団：1981）。第9次～第11次調査で出土した人骨には、右寛骨に石鎚が刺さったまま自然治癒した例も見つかっている。

【第12次～15次調査】年号が平成となり、平成8年より個人住宅建設に伴う緊急発掘調査が、三陸町教育委員会によって4年にわたり609.5m<sup>2</sup>の調査が実施された。第12次調査（平成8年調査、宮野字49番地4）は、B地区の東側に近接した位置を行う。縄文晚期の集石遺構や遺物包含層を検出している。遺物包含層は、大洞B～A式にかけての良好資料や透光器土偶・結髪土偶の顔などを出土している。第13次調査（平成9年調査、宮野字49番地3・5）は、B地区と一部重なる部分などを面的に調査されている。竪穴住居跡6棟（※縄文中期中～末葉と推定される）やアサリを主体とした貝層（混土貝層）を検出している。過去の調査で確認されていたB地区的貝層が、縄文中期後葉の竪穴住居の窪みに形成された貝層であることが明らかにされた。第14次調査（平成10年調査、宮野字47番地）は、B地区からみてやや南側（※A地区とB地区のはば中間付近）での調査が実施されている。縄文晚期末葉と推定される集石遺構や土坑5基を検出している。出土土器は大洞C2～A'式が主体的に出土している。第15次調査（平成11年調査、宮野18番地4）は、C地区ほぼそのものを調査したと捉えられる。縄文前期中葉の貝層、土坑4基（縄文前期中葉1基、縄文晚期中葉1基、不明2基）、土器集中区、魚骨範囲などが検出されている。出土土器は前期（※報告書を見る限り大木2a・2b・4・6式など）が主体である。土坑3より横臥屈葬の成人女性人骨（註2）が発見され、時期は前期中葉とされている。魚骨はマグロ属の頭部の部位や椎骨のようである。この貝層は、出土した土器から縄文前期に形成された可能性があり、現在確認されている宮野貝塚に分布する貝塚の中では、最も古い貝塚となる（大船渡市教委：2002）。

【第16次～17次調査】第16次調査は平成23年、F地区に隣接する箇所において、個人住宅建設に伴い実施された。貝層は発見されなかったものの、縄文前期の土坑82基、晩期の竪穴住居跡2棟が発見されるなど宮野貝塚における集落構造を知る上で重要な成果が得られた。第17次調査は平成24年、第16次調査区隣接地において実施された。縄文前期から晩期の包含層が検出された。包含層に形成された縄文晚期の層は、大洞C2～A式を主体とする層と、大洞B C～C 2式を主体とする層に、大別されることが明らかになった。

【第18次・19次・21次調査】第18次調査は平成24年、個人住宅建設に伴い発掘調査を実施している。調査地はB地区の南側に相当する。縄文後期中葉の竪穴住居跡をはじめ、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の遺物包含層などを検出した。第19次調査は大船渡地区消防組合三陸分署綾里分遣所建設に伴い平成25年、発掘調査を実施した。竪穴住居跡1棟、土坑298基、縄文早期末～晩期・弥生前期の包含層、平安（土師器・須恵器）などが出土した。第21次調査は、第19次調査の南西隣接地を平成26年7月より発掘調査が実施された。現在整理中であり詳細は割愛するが、古代あるいは中世と推定される掘立柱建物跡などが検出されている。



第4図 宮野貝塚過去の調査箇所

第2表 宮野貝塚過去の調査歴

調査 回数	調査機関など	調査年月日	調査地点	主な調査成果	備考
1	大山柏(慶応大学)	昭和15年5月	A・D地区	4体分の人骨など	
2	吉田義昭・東登	昭和36年10月13日～15日	A・B・C・D地区	縄文晩期前土器、骨角器、横・屈葬	報告書発刊
3	草間俊一・吉田義昭・江坂輝彌	昭和42年3月	不明		
4	草間俊一・吉田義昭	昭和43年8月	不明		
5	草間俊一・吉田義昭	昭和44年8月	不明		
6	草間俊一・吉田義昭・江坂輝彌	昭和45年3月15日～29日	E-F地区	イノシシの歯を穿孔した装飾品をまとった女性人骨など	報告書発刊
7	岩手県教育委員会文化課	昭和50年8月	F地区		
8	岩手県教育委員会文化課	昭和51年2月	B地区		
9	宮野貝塚調査会	昭和53年	A・B・C・D地区	縄文晩期末～弥生前期遺物混合層、人骨	
10	宮野貝塚調査会	昭和54年3月	B-C地区		報告書発刊
11	宮野貝塚調査会	昭和55年	A-D地区	成人男性人骨4体、嬰兒骨を納めた埋設土器2基	
12	三陸町教育委員会	平成8年6月24日～10月7日	宮野49番地4	集石遺構、縄文晩期遺物混合層	
13	三陸町教育委員会	平成9年5月6日～10月31日	宮野49番地3・5	堅穴住居跡、縄文中～後期遺物混合層	報告書発刊
14	三陸町教育委員会	平成10年6月15日～8月25日	宮野47番地	集石遺構、縄文晩期末～弥生前期遺物混合層	
15	三陸町教育委員会	平成11年6月11日～11月12日	宮野18番地4	縄文前期遺物混合層、土坑、成人女性人骨	
16	大船渡市教育委員会	平成23年8月22日～10月14日		縄文前期土坑82基、縄文晩期堅穴住居2棟	
17	大船渡市教育委員会	平成24年4月23日～6月29日		縄文前期～中期の遺物混合層	
18	大船渡市教育委員会	平成24年11月1日～12月28日	宮野49番地1・B地区	縄文後期堅穴住居、縄文晩期末～弥生前期の遺物混合層	報告書発刊
19	大船渡市教育委員会	平成25年4月15日～10月31日	D地区からやべ南に寄った緩斜面地	縄文早期～弥生前期の遺物混合層、古代土坑など	
20	(公財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター	平成26年4月7日～5月30日	E地区的南近接地	縄文前期土坑10基、縄文前期～弥生前期遺物混合層	
21	大船渡市教育委員会	平成26年7月18日～9月30日	第19次調査の南西隣接地	掘立柱建物跡、土師器、須恵器、鉄鋤、縄文土器、石器	

## 5 基本層序

概ね以下のような土層の堆積順を示す。

〔I層〕 現代盛り土 20~50cm。

〔II層〕 10YR2/3黒褐色シルト 20~40cm 径3~20mmの小礫15%・土器含む（磨滅した土器片が多い縄文中期～古代）。

〔III層〕 10YR2/2~2/1黒褐～黒色シルト 20~70cm 分層可能な地点については、III層を（適宜III層系とも呼んでいる）をIIIa層とIIIb層に細分した。

IIIa層 10YR2/2黒褐色シルト 径30~200mmの亜角礫5%、縄文中期～弥生前期の土器を包含する。

IIIb層 10YR2/1黒色シルト 本層下位に径300~800mmの巨礫15%混入、縄文前期を中心に縄文中期や縄文晩期の土器が少量混じる。

〔IV層〕 10YR3/3暗褐色シルト 5~30cm 径3~15mmの黄褐色砂岩5%混入、十和田中振火山灰を局所的に含み縄文前期前葉の土器を中心に入れる。

〔V層〕 黄褐色粘土 地山（基盤層、無遺物層） 拳大から人頭大の亜角礫を含む。

以下には遺物包含層であるII～IV層について詳述する。なお、平成25年2月6日に県教育委員会生涯学習文化課で実施した試掘トレンチ（本稿では第1・2トレンチと命名）を再掘削した埋戻し土からも相当量の遺物が出土したことから、「埋戻し土」の層名で取り上げた（※この層名で遺物観察表などへも記載）。II層は、3~15mmの小礫（小さな角礫が多い）を有意に含む黒褐色シルト層である。主に調査区東側では顯著に確認できるが、調査区北西側や南西側では薄い（※削平の可能性あり）。土器は、縄文・弥生・古代が出土している。全般に磨滅の著しいものが主体である。小礫の混入具合などから斜面上方より洪水などに起因して流入された崖錐性の堆積層と判断される。II層の堆積年代は明確には掴めないが、出土土器から時期の上限は古代（平安）以降、時期の下限は現代ゴミの混入が皆無なことから近代若しくは近世頃と推定しておきたい。

III層は黒褐～黒色シルトである。全般に遺物を多く含む。大部分の遺物はIII層として一括して取り上げたが、遺物包含層掘削の指標として設定した土層観察ベルト内及びその周囲については混入礫の違いで二分し、上位をIIIa層、下位をIIIb層として遺物を取り上げた。以下にIIIa層とIIIb層を分けで記述する。IIIa層は、IIIb層と比較して土の色調が若干明るく、径30~200mmの亜角礫を顯著に混入する。出土土器は縄文前期末葉～弥生前期までを包含し、主体は縄文中期中葉及び晩期初頭～後葉である。傾向として縄文後期は少ない。また土師器は出土していない。土層形成時期については、調査当初は大木8a式土器の一括個体（※現地性と捉えたい）が出土している状況などから縄文中期中葉頃と推定された。ただし、上述の亜角礫の混入具合と弥生前期の土器が出土していることを鑑みると、弥生時代前期以降の土石流などに起因した崖錐性堆積層と調査判断される。IIIb層は、上位のIIIa層と比較して黒味の濃い黒色シルト（黒々した色調）で、全体的に礫が多く混入する。含まれる礫の様相としては、IIIa層に顯著な亜角礫（掌サイズくらいが多い）より、全般に径が大きく角ばった礫が認められ、礫の中には人頭大くらいの巨礫も顯著に含まれる。特に中位～下位の深度ほど巨礫の含有率が高く、平面的に見ると斜面下方側に相当するD3・D4・E4グリッドほど巨礫の含有率が高い。これらのことから、IIIa層と同様に崖錐性堆積物が一部混ざるものと推定され、II層やIIIa層より大きな自然營力が作用したものと判断される。出土土器は、縄文前期後葉～末葉が多く、次いで

縄文前期前葉、縄文中期中葉や縄文晚期初頭～前葉の土器が若干量混じる。弥生土器は認められない。この土層の形成時期は、出土土器のまとまりから縄文前期後葉～末葉頃と推定されたが、小量ではあるが縄文晚期前半の土器が混ざる状況を鑑みると、縄文晚期前半頃の土石流に伴う崖錐性堆積層と判断されよう。なお、Ⅲ b 層の下位層からは縄文前期後～末葉に混じり前期前葉の大木 2 b 式土器もまとまりを持って出土している。特にⅢ b ～Ⅳ 層（両者の漸移的な土層）として取り上げたものに多い。現場作業時は把握できなかったが、Ⅲ b 層の中でも巨礫が多く認められる層よりさらに下位の土層部分については、現地性の土層（プライマリーに近い状態の土層）であった可能性もある。Ⅳ 層は暗褐色シルトで、径 3 ～ 15mm の黄褐色砂岩の混入が見られる。Ⅲ 層系と比較して、土の色調は明るく、土質にも差異が認められる。出土土器は縄文前期前葉大木 1 式や大木 2 a 式を中心とする。本層は、B 2・C 2 グリッドを中心に十和田中振テフラ（明黄褐～にぶい黄褐色の粉末状で層厚 3 ～ 10 cm、※以後 To-Cu テフラと呼ぶ）を局所的に含むが、出土土器を見る限り前期前葉より新しい時期の土器が認められない。のことから、To-Cu テフラ降下時期以前に形成・堆積された土層の可能性が高い。

## 註

註1 「岩手県遺跡情報検索システム」と「岩手の貝塚」・「岩手の洞穴」などを比較すると、同一カ所でも異なる遺跡名称となっている遺跡が幾つか認められる。遺跡の登録台帳がやや混乱をきたしていると思われる。

註2 報告書の実測図では頭位が北北西で顔面は東に向くが、分析報告では逆に記載されている。状況から、分析原稿が間違っていると考えられる。

## II の参考引用・文献

車文献 1 ～ 4 は「第 1 表周辺の遺跡」備考欄に記載した文献 1 ～ 4 に対応。

【文献 1】岩手県教育委員会：1998『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告書第102集

【文献 2】大船渡市教育委員会：2014『宮野貝塚平成24年度緊急発掘調査報告書』

【文献 3】三陸町史編集委員会：1989『三陸町史－自然・考古編』第 1 卷

【文献 4】大船渡市立博物館：1991『気仙の遺跡－大船渡市・三陸町の各遺跡の出土品－』

三陸町史編集委員会：1989『三陸町史－津波編－』第 4 卷

（財）岩手県埋蔵文化財センター：1985『岩手の遺跡』

岩手日報社：2000『いわて未来への遺産遺跡は語る－旧石器～古墳時代－』

大船渡市教育委員会：2002『宮野貝塚緊急発掘調査報告書』

大船渡市教育委員会：2012『宮野貝塚－平成24年度発掘調査現地説明会資料－』

三陸町教育委員会（江坂輝彌・草間俊一・吉田義昭）：1970『宮野貝塚遺跡調査概報』

宮野貝塚調査団（林謙作他）1981：『宮野貝塚 B・C 地区調査概要－特に埋葬人骨を中心として－』

工藤崇・佐々木寿：2007『十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年』『地学雑誌』116

山田康弘：2008『生と死の考古学－縄文時代の死生観－』東洋書店

東北大総合学術博物館・東北歴史博物館：2009『考古学からの挑戦－東北大学考古学研究の軌跡－』特別展東北大総合学術博物館のすべて XIII

### III 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野外調査

今回の調査区は、過去の調査箇所である宮野貝塚E地区に近接し、綾里駅近隣への綾里交番建設に伴い南北約26m、東西12~21mで発掘調査を実施した。グリッドは、基準点測量を委託し、世界測地系の平面直角座標系第X系を利用して調査区を網羅するように、調査区を5m単位に区画し、北~南に向かってA~F（アルファベット大文字）、西から東に向かって1~4の名称を付けた。

名称	X座標	Y座標	Z座標
基1	-104805.000	83575.000	17.048
基2	-104788.000	83575.000	19.213
補1	-104788.000	83579.000	19.035
補2	-104797.000	83573.000	17.526
補3	-104805.000	83585.000	17.086
補4	-104808.000	83585.000	16.812

調査手順としては、調査開始とともに岩手県教育委員会生涯学習文化課で試掘したトレンチ（※本報告では第1・2トレンチと命名）を再掘削し、基本層序の設定と遺構・遺物の状況を確認した。その結果、調査区ほぼ全体が繩文前期～弥生前期を中心とする遺物包含層と判断された。表土・盛り土は重機で除去した後、調査区全体を網羅するように土層観察ベルトを設定し、ベルト沿いにサブトレンチを入れ分層の目安とした。補足として、調査区の南端付近に設定した第3・4トレンチでは湧水が多く、尚且つ現代擾乱により土層が既に破壊を受けた状況にあった。この部分は、県道に近接することもあり調査の安全確保のため、重機で掘削し遺構の有無を確認した後、早急に埋戻しを行った。遺構の実測は、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。その際に使用した基準点や補点のX・Y・Zの値は第5図を参照いただきたい。現場の写真撮影については、キャノンEOS5D（デジタルカメラ）を中心に使用した。

#### 2 室内整理

遺構図版は、電子平板のデータを編集し、現場で人力により作成した断面図と合わせて電子トレースで作成した。遺物の整理について、土器類は水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②口縁部資料、③各時期のメルクマールとなる資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載番号を付した。土製品・石器・石製品は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。遺物図版は原則、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器1/3・石製品1/3若しくは1/2で掲載した。石器類で磨痕や敲打痕が観察されるものはスクリーン上で明示した。遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本とする。

## IV 検出された遺構

検出された遺構は、土坑10基、柱穴状土坑42個、獸骨・炭化物集中区1カ所である。

### 1 土 坑

#### 1号土坑（第7図、写真図版5）

【位置・検出状況】B 2 グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【重複関係】P38柱穴状土坑に裁られる。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径106×52cm、底部径96×26cm、深さ23.2cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】暗褐色粘土質シルトによる単層である。粘性がやや強く、繰りやや密な様相から基本層序IV層起源の土層と推定される。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉と調査判断される。

#### 2号土坑（第7図、写真図版5）

【位置・検出状況】B 2 グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【重複関係】P37柱穴状土坑に裁られる。【平面形・規模】平面形は卵形に近い。規模は、開口部径108×78cm、底部径92×62cm、深さは西側底面が深く、東側は浅い。6～21cmである。【壁・底面】壁は、西壁は直立気味、東壁はほとんど立たない。底面は西側が深く、東側は浅く、全体的には凹凸がある。【堆積土】Ⅲ b 層起源と推定される黒褐色シルトによる単層である。【遺構時期】出土遺物などがなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、堆積土の様相からは縄文時代前期末葉前後と調査判断される。

#### 3号土坑（第7図、写真図版5）

【位置・検出状況】B 2 グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径94×76cm、底部径72×42cm、深さ22.2cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は丸底気味を呈する。【堆積土】埋土上位1層に黒褐色シルト（※Ⅲ b 層系）、埋土下位2層に暗褐色シルト質粘土（IV層系）が堆積する。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉～末葉の時期幅で調査判断される。

#### 4号土坑（第7図、写真図版5）

【位置・検出状況】B 2 グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径74×60cm、底部径64×42cm、深さ22cmである。【壁・底面】壁は外傾した後、段気味な平坦面を持った後に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】暗褐色粘土質シルトによる単層である。IV層起源と考えられる。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉と調査判断される。

#### 5号土坑（第7図、写真図版6）

【位置・検出状況】C 3 グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径71×63cm、底部径53×40cm、深さ17.9cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】暗褐色粘土質シルトによる単層である。IV層起源と考えられる。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉と調査判断される。

## 6号土坑（第7図、写真図版6）

【位置・検出状況】C 3グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径75×56cm、底部径27×18cm、深さ48.7cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は東に向かって傾斜する（深くなる）。【堆積土】黒褐色シルトによる単層である。Ⅲ b層起源と考えられる。【遺構時期】時期不明にある。積極的には言及できないが、堆積土の様相からは縄文時代前期前葉～末葉の時期幅で調査判断される。

## 7号土坑（第7図、写真図版6）

【位置・検出状況】B 2グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径74×47cm、底部径67×43cm、深さ17.7cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】暗褐色粘土質シルトによる単層である。IV層起源と考えられる。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉と調査判断される。

## 8号土坑（第7図、写真図版6）

【位置・検出状況】D 3グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形はほぼ円形である。規模は、開口部径100×95cm、底部径90×79cm、深さ16.2cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルト質泥質土による単層である。Ⅲ b層起源である。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉～前期末葉の時期幅で調査判断される。

## 9号土坑（第7図、写真図版7）

【位置・検出状況】D 3グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径134×103cm、底部径116×88cm、深さ21.2cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルト質泥質土による単層である。Ⅲ b層起源である。【遺構時期】出土遺物がなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉～前期末葉の時期幅で調査判断される。

## 10号土坑（第7図、写真図版7）

【位置・検出状況】E 3グリッドに位置する。検出層位はIV～V層である。【平面形・規模】平面形は楕円形である。規模は、開口部径88×76cm、底部径56×40cm、深さ18cmである。【壁・底面】壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。【堆積土】黒褐色シルト質泥質土による単層である。Ⅲ b層起源である。【遺構時期】出土遺物などがなく、時期不明にある。積極的には言及できないが、検出面・堆積土の様相からは縄文時代前期前葉～前期末葉の時期幅で調査判断される。

第3表 土坑観察表

土坑名	位置	平面形	開口部径(cm)	底部径(cm)	深さ(cm)	堆積土	時期(縄文)
1号土坑	B 1グリッド	楕円形	106×52	96×26	232	IV層系	前期前葉?
2号土坑	B 2グリッド	楕円形	108×78	92×62	21.0	Ⅲ b層系	前期末葉?
3号土坑	B 2グリッド	楕円形	94×76	72×42	222	IV層系	前期前～末葉?
4号土坑	B 2グリッド	楕円形	74×60	64×42	220	IV層系	前期前葉?
5号土坑	C 3グリッド	楕円形	71×63	53×40	17.9	IV層系	前期前葉?
6号土坑	C 3グリッド	楕円形	75×56	27×18	48.7	Ⅲ b層系	前期前～末葉?
7号土坑	B 2グリッド	楕円形	74×47	67×43	17.7	IV層系	前期前葉?
8号土坑	D 3グリッド	ほぼ円形	100×95	90×79	16.2	Ⅲ b層系	前期前～末葉?
9号土坑	D 3グリッド	楕円形	134×103	116×88	21.2	Ⅲ b層系	前期前～末葉?
10号土坑	E 3グリッド	不整円形	88×76	56×40	18.0	Ⅲ b層系	前期前～末葉?

## 2 柱穴状土坑（第8図）

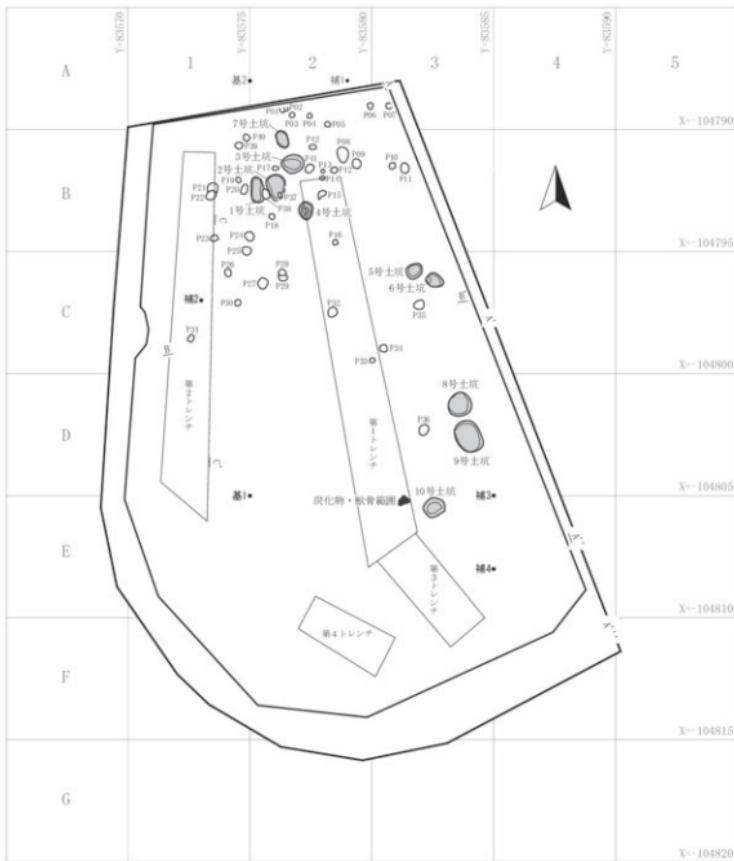
42個を検出した。検出地は、調査区北部に相当するA2・B1・B2・C1・C2グリッドから多く検出された。掘立柱建物跡の復元には至っていない。遺構プランの識別は不明瞭ではあったが、そのほとんどがⅢ b層中で認知・検出している（※Ⅲ b層を掘り込んで構築されている）。堆積土はⅢ a層を主体としⅢ b層を起源するものが多い。また、据え方土と想定される地山ブロックが混入するものもある。柱穴状土坑の時期について、P3～P6・P12より縄文土器小破片（中期～晩期を主体とする）が出土しているが、何れも激しく磨滅しており、異時期の混入と考えられる。柱穴状土坑内の堆積土にはⅡ層起源の土層は認め難い。推測の域は出ない内容となるが、縄文時代晩期～古代の時期幅で推定しておきたい。

第4表 柱穴状土坑観察表

遺構名	位置	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	位置	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P01	A2	23×20	24		P22	B1	46×36	18	
P02	A2	22×17	19		P23	B1	31×25	15	
P03	A2	22×21	37	土器33.5g	P24	B1	40×36	22	
P04	A2	21×20	40	土器48.7g	P25	B1	38×35	21	
P05	A2	25×21	45	土器31.9g	P26	C1	33×26	17	
P06	A2	27×23	38	土器28.6g	P27	C2	46×43	13	
P07	A3	25×23	17		P28	C2	31×27	11	
P08	B2	65×45	18		P29	C2	38×33	13	
P09	B2	41×35	17		P30	C1	27×24	11	
P10	B3	29×25	13		P31	C1	31×28	10	
P11	B3	43×35	16		P32	C2	42×38	31	
P12	B2	30×24	4	土器62.2g	P33	C3	23×20	8	
P13	B2	16×15	7		P34	C3	32×31	10	
P14	B2	20×17	13		P35	C3	44×38	18	
P15	B2	41×24	15		P36	D3	48×38	18	
P16	B2	24×24	10		P37	B2	23×14	11	
P17	B2	27×17	13		P38	B2	42×19	18	
P18	B2	25×24	12		P39	B1	32×28	13	
P19	B1	24×19	14		P40	B1	29×27	34	
P20	B1	41×26	16		P41	B2	39×31	16	
P21	B1	48×45	14		P42	B2	29×20	13	

## 3 獣骨・炭化物集中区（写真図版7・26）

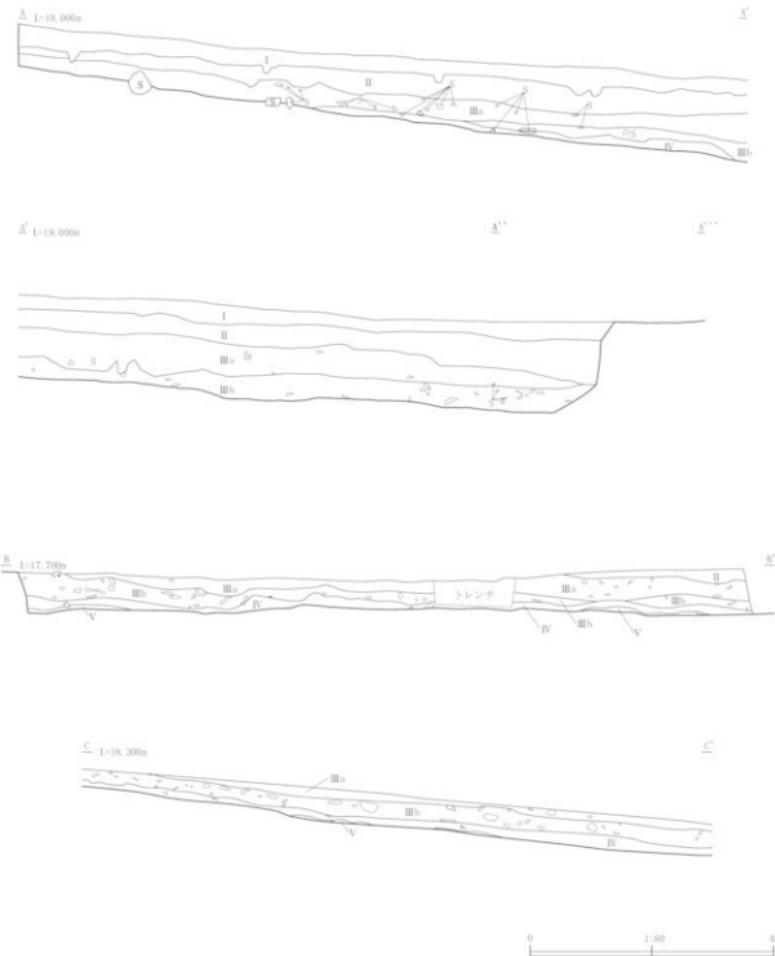
調査区南東部のE 3グリッドに位置する。Ⅲ b層の掘り下げ中に、獣骨小破片や炭化物が散乱した状況が認められた。平面的には大凡40×30cmの範囲に広がり、層厚は約20cmで認められた。平面的な広がりを写真撮影と実測した後、土を全て持ち帰りウォーターセパレーションを実施した。その結果、獣骨は28.5g、炭化物は微量出土した。獣骨は全て焼成した小破片であったが、陸生哺乳類（ニホンジカやイノシシか）の何れかの部位と思われる。接合作業を実施したが、径5cm以上に復元されたものはない。No324～329として写真掲載をした。炭化物は径5～10mm程度の小粒が認められた。時期について、E 3グリッドのⅢ b層からは前期後葉の土器が主体的に出土しているが、時期の推定材料とするには躊躇がある（※磨滅した小破片で不掲載とした。前期後葉～中期初頭頃と推定されるが強く言及できない）。層位的な状況から時期の上限は縄文前期後葉、下限は縄文晩期と想定される。また、チップ・フレークが同一地点・層位から2.1g出土している。



名称	X座標	Y座標	Z值
基1	-104805.000	83575.000	17.048
基2	-104788.000	83575.000	19.213
補1	-104788.000	83579.000	19.035
補2	-104797.000	83573.000	17.526
補3	-104805.000	83585.000	17.086
補4	-104808.000	83585.000	16.812



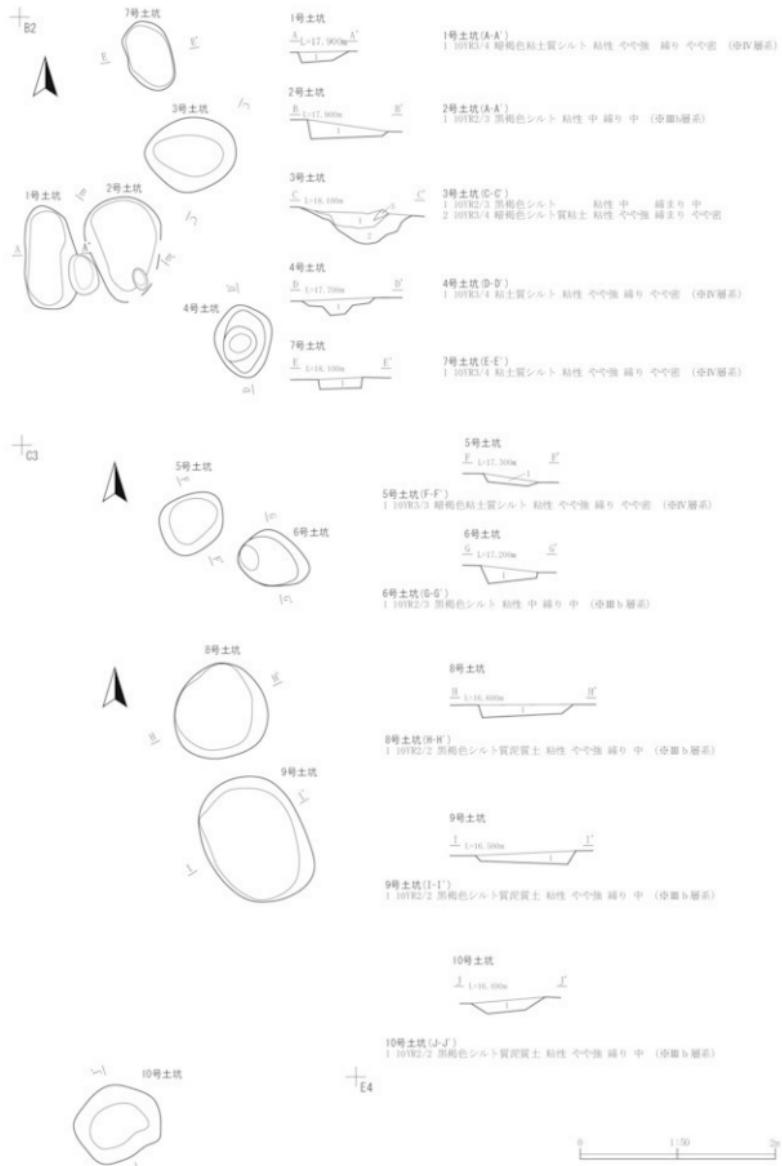
第5図 遺構配置図



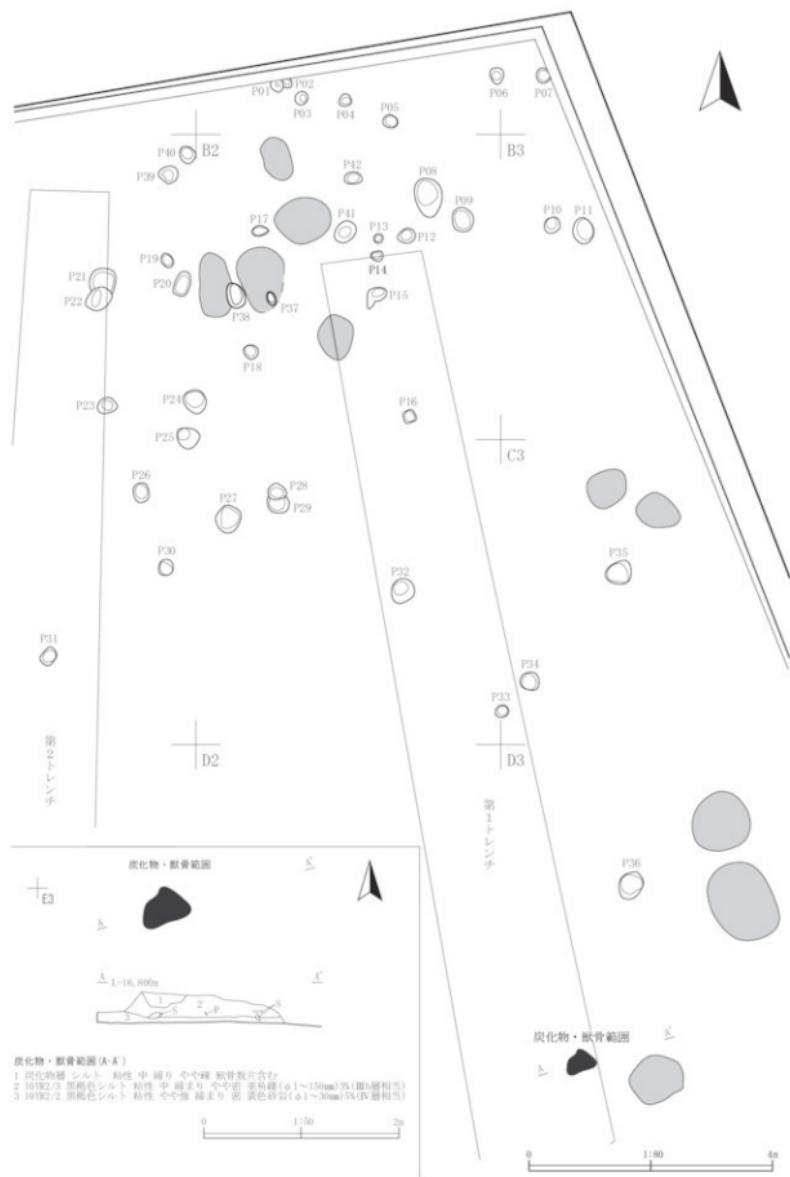
基本層序 (A-A'・B-B'・C-C')

- I層 岩代泥炭土 20~30cm  
 II層 19F2-2黒褐色シルト 20~40cm (径5~20mmの小礫15%・土器含む(崩壊した土器片や調文中期～古代))  
 III層 19F2-2黒褐色～黒色シルト 20~70cm 分層可能な地点に於いては、IIIa層とIIIb層に分層した。  
 IIIa層 19F2-2黒褐色シルト 径5~20mmの亜角礫7%、調文中期～後生湖期の土器を含む(崩壊した土器片や調文前期の土器が少量混じる)。  
 IIIb層 19F2-3黒褐色シルト 本層に於ける分層は、II層とIII層の間に於ける分層と同様である。中層や調文前期の土器が少量混じる。  
 IV層 19F3-3黒褐色シルト 5~30cm 径3~15mmの黄褐色砂岩5%混入。少子和田中島火山区を局的に含む。調文前期の遺物を中心に包含する。  
 V層 黄褐色粘土 塚山(基盤層、無遺物層) 奉大から人頭の大塗角鏡を含む。

第6図 基本層序



第7図 土坑



第8図 柱穴状土坑、獸骨・炭化物集中区

## V 出 土 遺 物

遺物は大コンテナ（42×32×30cm）で約28箱分が出土した。内訳は、土器大コンテナ18箱分、土製品21点、石器類大コンテナ8箱分、石製品小コンテナ4箱分、チップ・フレーク小コンテナ2箱分、獸骨片少量である。

ここでは、遺構内出土と遺構外出土を合せて扱うこととする。

### 1 縄文時代・弥生時代・平安時代の土器

土器類は、縄文時代前期前葉～弥生時代前期（以後本章では「時代」は省略する）まで出土しており、出土量に多寡はあるものの、ほぼ断続期が無い様相にある。主体は前期前葉、前期後～末葉、中期中葉、晩期初頭、晩期中葉である。補足として、須恵器片1点と土器師器数点が出土している。土器類の出土状況としては、調査区ほぼ全面に認められる遺物包含層から出土している。出土層位は基本層序に準じている。総重量は205.365kgである。層毎の土器出土量は、I層（現代盛り土）が2.406kg、埋戻し土42.185kg（第1トレンチ30.001kg、第2トレンチ12.184kg）、II層35.378kg、III層114.985kg（内訳はIII層67.268kg、IIIa層28.88kg、IIIb層18.837kg）、IIIb～IV層7.771kg、IV層2.228kg、柱穴状土坑埋土0.149kg、その他0.263kgである。第5表にはグリッド・層位毎の土器重量を示した。

第5表 土器重量表

	I層	II層	III層	IIIa層	IIIb層	IIIb～IV層	IV層	グリッド小計
A 1グリッド	2.148	0.336	0.172		0.052			2.708
A 2グリッド			0.996	0.006			0.777	1.779
B 1グリッド			1.130		0.922	0.070	0.005	2.127
B 2グリッド	0.126	0.137	4.236		0.697	0.069		5.265
B 3グリッド		0.746	5.185		0.032		0.156	6.119
C 1グリッド			1.612	2.174	0.976	0.914	0.936	6.612
C 2グリッド	0.132	2.903	5.075	1.371	0.204	0.739	0.029	10.453
C 3グリッド		13.860	18.575	6.038	5.254		0.064	43.791
D 1グリッド			5.798	1.378	1.735	0.748		9.659
D 2グリッド		0.379	3.720	0.379	2.961	0.984	0.096	8.519
D 3グリッド		0.807	11.236	11.441	1.503	2.699	0.072	27.758
D 4グリッド		9.828	2.353					12.181
E 1グリッド			0.568					0.568
E 2グリッド			0.279				0.043	0.322
E 3グリッド			0.537	1.893	3.786	0.384	0.050	6.650
E 4グリッド		6.382	5.796	4.200	0.715	1.164		18.257
層別小計	2.406	35.378	67.268	28.880	18.837	7.771	2.228	162.768

\*上記以外として、遺構内出土 0.149kg、第1トレンチ 30.001kg、第2トレンチ 12.184kg、その他 0.263kg

土器型式で時期区分して示す。縄文土器は『総覧縄文土器』(2008: 小林)などを基本文献とした。以下には各時期の土器の概略を記述することとし、土器個々の属性については、基本的に遺物觀察表を参照いただきたい。

【縄文前期前～中葉】前期前葉大木1・2a・2b式と推定される土器である(No.1～18・20～44)。全て破片資料で、器種は深鉢以外認知していない。出土位置・層位の傾向としては、大木1式

はC 3・D 3・E 3グリッドのIV層から、大木2a式はE 3グリッドIV層やD 1・2グリッドIII b層及びC 1・D 3グリッドIII b～IV層、大木2b式はB 2・C 1・D 3グリッドIII b～IV層として取り上げた土層から主体的に出土している。IV層出土はTo-Cuテフラより古い時期の可能性が極めて高いと考えられ、大木1式と大木2a式はTo-Cuの降下時期より古い可能性が導かれようか。大木2b式については、上記のとおりIII b～IV層とした土層から主体的に出土しているが、IV層の上位に堆積するIII b層は、上述のとおり一部崖難を被る様相にあり、異時期の遺物が混在する可能性を拭えない土層であり、従ってTo-Cuとの新旧関係は不明にある。

当該時期に特徴的な胎土中の繊維混入量としては、大木1式（No.1～4など）は全般に多く（表上では多量と表記）、大木2a式（No.9・12～18・20・21など）は小量～中量、大木2b式（No.22～40）は少量若しくは未混入にあり、土器型式を判断する上である程度の目安になると捉えられる。

諸特徴としては、大木1式は環付き末端ループ（表上では末端ループと表記した。※この属性は仙台湾などの大木2a式資料には存在する可能性はあるものの、本遺跡資料では大木2a式と捉えられる土器には認め難い）、縄文原体の重層施文、非結束羽状縄文、胎土中の繊維量の多さなど、大木2a式は不整撫糸文、結束羽状縄文（※厳密には大木2a式にも非結束羽状縄文は存在すると思われるが）を、大木2b式はS字状連鎖沈文の施文を、メルクマールとした。原体の回転方向は、ほぼ横回転に限定される。また、O段多条を用いる原体が大木1式に顕著に認められる。

No.7・10・11・41～44は土器型式への比定に苦慮する土器であるが、胎土の様相などから、前期中葉が想定され、ここに位置付けた。No.42は口縁端部に斜位の刻みを持つ特徴から、白底式の可能性を有する。また、組紐回転を施文するNo.10・44も同様に白底式の可能性もある。なお、大木3式と特定できる土器は認め難いものの、No.45・46（※この2点は大木4式に属する可能性もあるが）などに、その可能性がある。

【縄文前期後葉】前期後葉大木4～5式と推定される土器を集めた（No.45～77・120）。今回の調査では比較的多く認められるが、全て破片資料である。出土位置・層位の全体的な傾向としては、B 3・C 1・C 2グリッドIII b～IV層として取り上げた土層から主体的に出土している。器種は、深鉢以外認知していない。胎土中に繊維の混入は認められない。

大木4式と判断されるものは、地文を施文後、細い粘土紐貼付による波状、梯子状、幾何学状のモチーフが施される。その中で、No.56・60などは粘土紐の様相からやや古手の可能性もある（前時期である大木3式により近い段階か）。地文の種類は、単節斜行縄文（L R横位が多い）、無節縄文、撫糸文のほか、組紐回転と推定されるもの（No.49・55～57など）もある。

大木5式と判断したものは、粘土紐貼付文、鋸歯状の沈線文、口縁部の鋸歯状装飾帯などをメルクマールとした。なお、大木4式との分離に際しては、貼付される粘土紐の単位が短いものを基本的に大木5式と判断したが、躊躇するものもあり（※観察表には大木4～5と幅を持って表記したものなど）、型式の特定にはやや課題を残す。地文は、大木4式と比較して撫糸文の割合が高くなることが指摘できようか。また、No.62・70・71などの施文原体は判然としなかったことも補足しておきたい。

【縄文前期末葉～中期初頭】前期末葉～中期初頭大木6～7a式と推定される土器である（No.78～93・101・102～109・112・113）。出土位置・層位の全体的な傾向としては、D 3グリッドIII層を中心C 3グリッドIII b層として取り上げた土層から主体的に出土している。文様の属性がバラエティーに富み、メルクマールが掴み難い。全体的には大木6式と判断されるものが多い。No.102は、爪形の刺突文が横位多々段に連続するもので、大木6式新段階と推定した（※後期初頭の三十稻場式にも似た特徴の刺突文であるが）。

大木6式と大木7a式との分離が難しいものとして、84~86を挙げておきたい。これらは、器形の連続性や傾き具合などから球胴型深鉢の破片が含まれていると捉えられる。器種は、深鉢以外認知していない。

【縄文中期前葉～中葉】中期前葉～中葉大木7b～8b式と推定される土器である（94～101・110・111・113～132）。大木7b式と大木8b式は、出土位置にバラツキが看取される。対して、大木8a式の出土位置・層位の全体的な傾向としては、E3グリッドⅢa層など、主に調査区東側のⅢ層系で出土している。大木7b式としては、隆線沿いに原体圧痕文が沿うNo110や、隆線沿いに細かい刺突文が施文されるNo111が挙げられる。No114・115は、原体圧痕文の在り方から大木8a式と捉えれば古段階か。大木8a式は、No116～119及び121・122などが比定される。地文を施文後、粘土紐貼付による隆線、若しくは沈線により文様モチーフされる。キャリバー形を呈するNo116と118は、口縁部が縄文原体の横回転、胴部が縦回転を施文する典型例であるが、口縁部と胴部では異なる原体が用いられている。大木8b式としてはNo123～132が比定される。地文施文後に隆・沈線による渦巻文及び梢円形文などが施文される。地文は単節の縦回転を基調とし、複節も認められる。

【縄文中期後葉～末葉】大木9・10式と推定される土器である（133・135～140・142・144）。出土位置・層位の全体的な傾向としては、C3グリッドⅢ層として取り上げた土層から主体的に出土している。今回の調査で大木9式は少ない。また、大木10式は古段階が認め難く、中段階や新段階に相当するものが出土している。大木9式に比定されるNo133は、LR縦位→梢円形文若しくは逆U字状文（沈線）→磨消繩文の施文順を経る。大木10式は、磨消繩文手法のものが多く、また地文は撫糸文の採用率が高い。No139は、口縁端部に「ノ」の字状の粘土紐を貼付、付加条（RL+R）の縦回転が施され、沈線による方形基調のモチーフが描かれる。大木10式の中では新段階と推定しておきたい。No142～144は、胎土の様相と、地文に撫糸文が用いられている属性から、ここに位置付けた。

【縄文後期】後期と推定される土器を一括する（146～157）。出土位置には纏まりが看取できないが、層位はⅢ層を主体とする。出土点数は少ないが、初頭～末葉までほぼ断絶なく認められる。本県南部において、後期前葉～末葉の土器型式は確立されているとは言い難い状況と考えられる。ここでは田柄貝塚（宮城県教育委員会：1986）の分群で示しておくこととする。初頭はNo146～149・153などが相当しよう。No146～149は門前式と推定される。No153は宮戸Ib式に相当しようか。No150～152など後期前葉に相当する。No151と152は壺形土器と捉えられる破片である。後期中葉は今回の調査ではNo154の1点の出土である。文様は、沈線による半円状や梢円形の文様区画→縄文原体充填（LR）→円形気味の刺突文（沈線区画に沿う）→沈線引き直しの施文順となる。胎土は良好な焼きにあり、内面は丹念にミガキが施される。田柄貝塚Ⅲ群に相当する。No155は、後期後葉前後の土器で、横位に延びる帶繩文上に貼り瘤が付加される。田柄貝塚第V群に相当しよう。No156は小破片なため、詳細は特定できないが後期末葉田柄貝塚VI群相当（見解違いであればあるいは晩期中葉）と推定しておきたい。

【縄文晚期初頭～後葉】大洞B式～大洞A式までを一括する（158～190・194・195・202）。出土量は一定量あるものの、全般に小破片が多い。出土位置には纏まりが看取できないが、層位はⅢ層を主体とする。大洞諸形式がほぼ全型式認められるが、大洞B・BC・C2式が主体と捉えられる。今回の資料を見る限り、この時期の地文はほとんどがLR横回転で、規格性の高さが看取される。器種は、深鉢、鉢、注口土器、壺、浅鉢などがある。

【縄文晚期末葉～弥生前期】大洞A'式～弥生前期の青木畑式に相当するものである（191・192・195～200）。変形工字文の在り方などからNo191・192が縄文晚期末葉、No195～200が弥生前期と推定され

る。出土位置・層位の全体的な傾向としては、D 3・E 3 グリッドⅢ層から主体的に出土している。第18次調査II区遺物包含層において、当該期の良好が得られている状況などを鑑みると、今回調査区の北西側の標高がやや高い部分に密に分布すると考えられる。器種は鉢・浅鉢が主体で、蓋（No. 197）の可能性が示唆されるものもある。

【平安時代】磨滅した土師器小破片が数点と須恵器片1点が出土した。出土位置・層位は、土師器小片がB 2・C 2 グリッドⅡ層から、須恵器片がE 2 グリッドⅡ～Ⅲ層から出土している。その内、E 2 グリッドⅡ～Ⅲ層出土のNo.201の須恵器片を掲載した。壺の胴部片と捉えられる。時期は、詳細は特定できないが、概ね9～10世紀に属すると推定される。

## 2 土 製 品

土製品は、ミニチュア土器1点、土偶3点、円盤状土製品17点が出土した。

【ミニチュア土器】ミニチュア土器は1点出土した（No.203）。無文で時期の特定は難しいが、胎土中に纖維を混入しないなどの様相から、縄文中期若しくは後期の可能性がある。

【土偶】土偶は3点出土した（No.204～206）。時期は、土偶の形態や文様・特徴から何れも晩期である。

No.204は中実の土偶で胸部と肩～腕部が残存する。背中にも三叉文などの施文が認められる。No.205は足部で無文を呈する。No.206は顔の一部と判断される。

【円盤状土製品】17点出土した（No.207～223）。大別すると、①縁辺を打ち欠いた状態のもの（No.207～210・216・219・220・223）、②縁辺全周が磨かれるもの（No.211～213・215・218・221・222）、③縁辺の一部が磨かれるもの（No.214・217）、の3つに分かれる。法量値からの特徴として、直径4cm未満のものが13点と、半数以上を占める。時期は、地文のみ若しくは無文と時期の特定が難しい。胎土中に纖維を含むものが認められないことから、胎土と縄文原体の様相から消去法的であるが前期後葉～晩期前葉の時間幅で推定しておきたい。

## 3 石 器 類

石器類は、石器大コンテナ8箱、石製品小コンテナ4箱、チップ・フレーク9,666.6gが出土した。内訳は、剥片石器215点、砾石器279点、石製品66点である。掲載したものは、出土位置や層位に関わらず、代表的なものを選択し図化した。

### （1）剥 片 石 器

【石鐵】96点出土し23点掲載した（No.224～246）。基部形状は、平基、有茎、やや抉りの順に多い。その他に、円基、U字状の抉り、V字状の抉り、棒状が少数と、基部欠損や未成品・失敗品段階のものも一定量認められる。石材は、頁岩が圧倒的に多く、次いで赤色頁岩、珪質頁岩である。黒曜石製は1点出土した（产地不明）。

【尖頭器】8点出土し3点掲載した（No.247～249）。形状は様々で規格性が弱い。石材は頁岩と赤色頁岩がある。

【石鎧】2点出土し2点掲載した（No.253・254）。何れも頁岩製である。No.253は全体の形状が短冊に近い形状で刃部が不明瞭な作りである。あるいはミニチュアの磨製石斧未成品の可能性もある。No.254は、撥状の形態で刃部は両面に二次剥離が施される。

【石逃】7点出土し3点掲載した（No250～252）。何れも頁岩製で縦型の形状を呈するが、平面形状、規模、刃部の作りは様々で規格性が弱いと思われる。

【石錐】4点出土し2点掲載した（No255・256）。石材は全て頁岩を用いている。錐部は先細に尖り、短い。規模は類似するが、No255は明瞭な摘みが作出しておらず、No256は摘みを作り出している。

【異形石器】1点出土し掲載した（No257）。石材は頁岩である。X字状の平面形状を呈し、先端がやや尖る（石鎚の先端に類似する）。

【スクレイパー】60点出土し10点掲載した（No258～267）。何れも不定形な剥片が素材として用いられている。No258は大部分に自然面を残し、先端に敲打痕が認められる。裏面は剥落している。No260は左辺に刃部と想定される二次加工が施される。No261は左辺の片面にのみ二次剥離が施される。No264は、表面の下端横位に鈍角の刃部を持つ。

【Uフレ】27点出土し1点掲載した（No268）。石器制作時の残滓と想定される剥片（フレーク類）に使用痕と考えられる痕跡が認められるものである。

## （2）疎 石 器

【磨製石斧】17点出土し9点掲載した（No269～277）。石材は蛇紋岩製が多く、次いで頁岩製、斑岩などが見られる。No269～271・273は刃部の刃こぼれが著しい。No274・275は長さ5cm以下でミニチュア的な規模にある。No272は全体的に研磨が施されていないことから、未成品と捉えられる。

【特殊磨石】側面に幅が狭小な磨り面が認められるもので、磨石に分類したものと器種を区分して示す。3点出土し3点掲載した（No278～280）。石材は三者三様で砂岩、斑岩、花崗閃緑岩である。側面の磨面の幅は、No278が約3.5cm、No279が約1.5cm、No280が約3cmを測る。

【磨石】磨り痕が認められる自然縫を磨石としたが、磨り痕の箇所や面数にはバラエティーがある。108点出土した。その内代表的な7点を選択し掲載した（No281～287）。石材は花崗閃緑岩が主体的に認められる。No281・282は両面に磨り面を持つ。No283は形状が石鹼状で全面に磨り痕が認められ、裏面は平坦面を形成する。No284・285は、表面は自然摩耗と判断され、裏面に平坦な磨り面を形成する。No286は全面に磨り痕が認められる。No287は表面にやや粗い磨り痕が認められる。

【敲石】敲打痕のみ認められるものを敲石とし、磨り痕と敲打痕が併用して認められるものは敲磨器類として、別に区分した。敲石は2点出土し1点掲載した（No288）。No288は全体の形状が球形を呈し、ほぼ全面に細かい敲打痕が認められる。所見的内容になるが、磨製石斧の加工具の可能性を考えられようか。石材は頁岩である。

【敲磨器】磨り痕と敲打痕が併用して認められるものを磨石や敲石と器種区分して示す。80点出土し3点掲載した（No289～291）。No289は細粒閃緑岩を用いて、多面にわたり敲き磨ったような使用痕が認められる。No290は砂岩で、表面に磨り痕が広がり縁辺は打ち欠いたと想定される。No291は斑岩で、表面全面にわたり磨り痕が広がり、縁辺や裏面に敲打痕が認められる。

【凹石】5点出土し3点掲載した（No292～294）。用いられる石材は様々である。No292は、表面に浅い凹部が認められる。No293は、棒状の疎の表裏の両面に敲打による凹部が形成される。No294は、自然摩耗した疎の表面に、僅かに凹部が認められる。

【石皿】1点出土し掲載した（No295）。石材は凝灰岩で、残存部の規模は22.3×18.6cmである。表面に磨り痕の広がりが認められる。

【台石】13点出土し1点掲載した（No296）。No296は、扁平疎の一面（表面）平坦面が形成され、磨り痕が認められる。それに類似する形状のものは他に12点認められたが、平坦面が人為的な痕跡なの

か若しくは自然摩耗なのか判別できなかったものがほとんどである。

【礫器】使用痕の在り方からは、磨石、敲石、敲磨礫、何らかの未成品などへの分類も可能性はあるが、素材礫の形、規模、石質に強く依存する類と捉えられる礫器を一括して礫器とした。44点出土し8点掲載した（No.297～304）。No.297は下端横が刃部と捉えられるが銳利ではなく、切削具としては否定的な石器である。あるいは磨製石斧未成品の可能性もある。No.300は半円形の形状で一側面に粗い磨り痕が認められる。この磨り痕は制作時の可能性で判断した。仮に、使用時の磨り痕であれば、円筒土器文化に伴うとされる半円状扁平打製石器などの類似品の可能性も指摘できようか。

【板状礫】6点出土したが全て不掲載とした。概して人工品か自然礫そのものか判別できなかったものである。

### (3) 石 製 品

石製品は、ペンダント1点、石棒39点、石刀20点、石剣1点、軽石製品4点、棒状礫1点出土した（※石棒は人工物か自然礫か区分できなかったものも含む）。

【ペンダント】1点出土し掲載した（No.305）。中央付近に穿孔がある（表裏両面から穿たれている）。石材は蛇紋岩製である。

【石棒】人為の手が加わっているのか判別が難しい棒状の礫も含めて39点出土した。明らかに人為による磨り痕や加工痕を持つ8点を掲載した（No.306～313）。石材は砂岩、粘板岩などが多い。なお、石刀や石剣としたものとの区別として、断面形が円形若しくは略円形のものは石棒としたことを追記しておく。ベッキング痕が僅かに認められる（残る）No.311・312は、その形態や刻線の特徴から縄文晩期に帰属すると推定される。

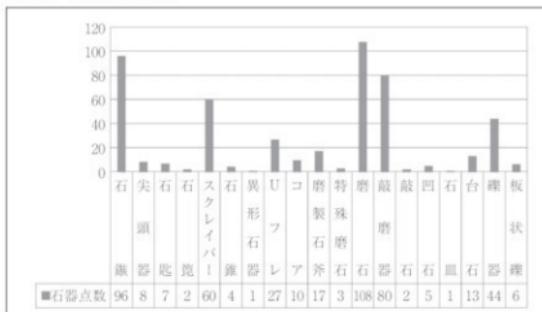
【石刀】20点出土し4点掲載した（No.314～317）。石材は頁岩が多い。No.314は左辺に抉りをもち、表裏両面に加工時と思われる敲打痕が密に認められる。No.315～317は欠損品である。平面形状や加工の様子は様々であるが、断面形の形状を優先して石刀とした。

【石剣】1点出土し掲載した（No.318）。石材は粘板岩である。断面形は石棒と同様に円形であるが、柄を持つ特徴から石剣とした。縄文時代晩期の産物と推定される。

【軽石製品】発泡の良い軽石が4点出土した。その内、擦った痕跡が認められるNo.319を掲載した。

【棒状礫】1点出土したが、人工遺物なのか、自然礫なのか、判断が難しい（前者と考えられるが）。不掲載とした。

第6表 石器器種毎点数



## (4) チップ・フレーク

チップ・フレークの出土位置・層位別の重量を下記の表に示した。全体的な出土傾向としては、土器の出土状況と同じ様相に受け取れる。C 2・C 3・D 3・D 4グリッドのⅢ層系からの出土が多い。

第7表 チップ・フレーク重量表

	I層	II層	Ⅲ層	Ⅲa層	Ⅲb層	Ⅲb～IV層	IV層	グリッド小計
A 1グリッド								
A 2グリッド			1235		0.4			1239
B 1グリッド			21		9.9		22.9	34.9
B 2グリッド	279.3		212.1		3.3			494.7
B 3グリッド	242.4		284.0				4.9	531.3
C 1グリッド			79.3	24.7	48.4	21.9	11.7	186.0
C 2グリッド	120.2		105.3	52.6	533.9		60.6	872.6
C 3グリッド	963.1		1043.9	319.0	183.5		5.5	2515.0
D 1グリッド			93.4	62.7	170.4	43.3		369.8
D 2グリッド			79.3	50.2	113.1	8.7		251.3
D 3グリッド	690.2		606.1	331.2	1.8	9.0	1.9	1640.2
D 4グリッド	558.0		100.2	84.1				742.3
E 1グリッド				4.7				47
E 2グリッド								
E 3グリッド				287.6	282.6			570.2
E 4グリッド			62.2	257.2		57.2		376.6
層別小計	2853.2		2796.1	1469.3	1347.3	140.1	107.5	8713.5

\*上記以外として、遺構内出土53g、第1トレンチ5830g、第2トレンチ3347g、その他30.1g

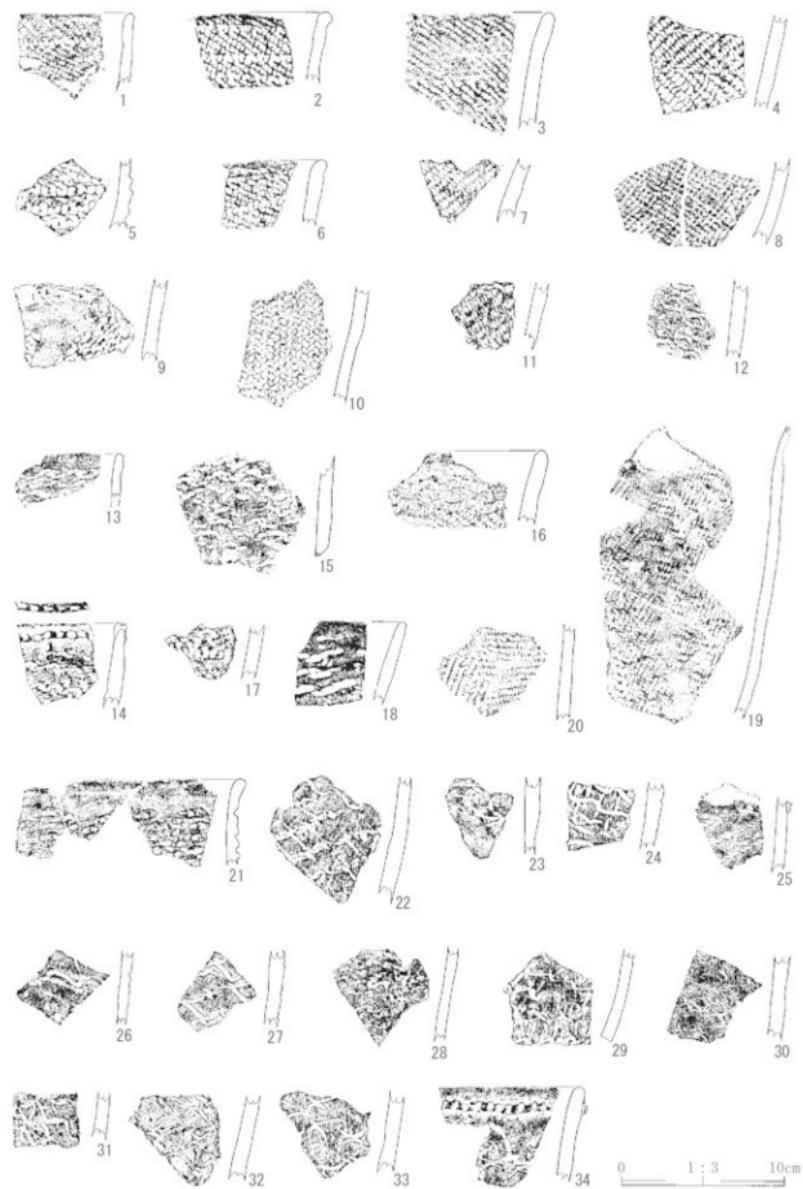
## 4 動物遺存体 (No320～329)

陸生哺乳類（ニホンジカ若しくはイノシシ）の椎骨、馬？の上顎と推定されるものが出土している。No320はシカ若しくはイノシシの椎骨と推定され、B 2グリッドⅡ層より出土した。No321～323は馬？の上顎と推定される。出土状況は、調査開始初期において調査区東部の南側のⅡ層より出土した。Ⅱ層から出土した状況を踏まえると、縄文期ではなく古代以降の可能性も考えられる（時期の特定はできない）。No324

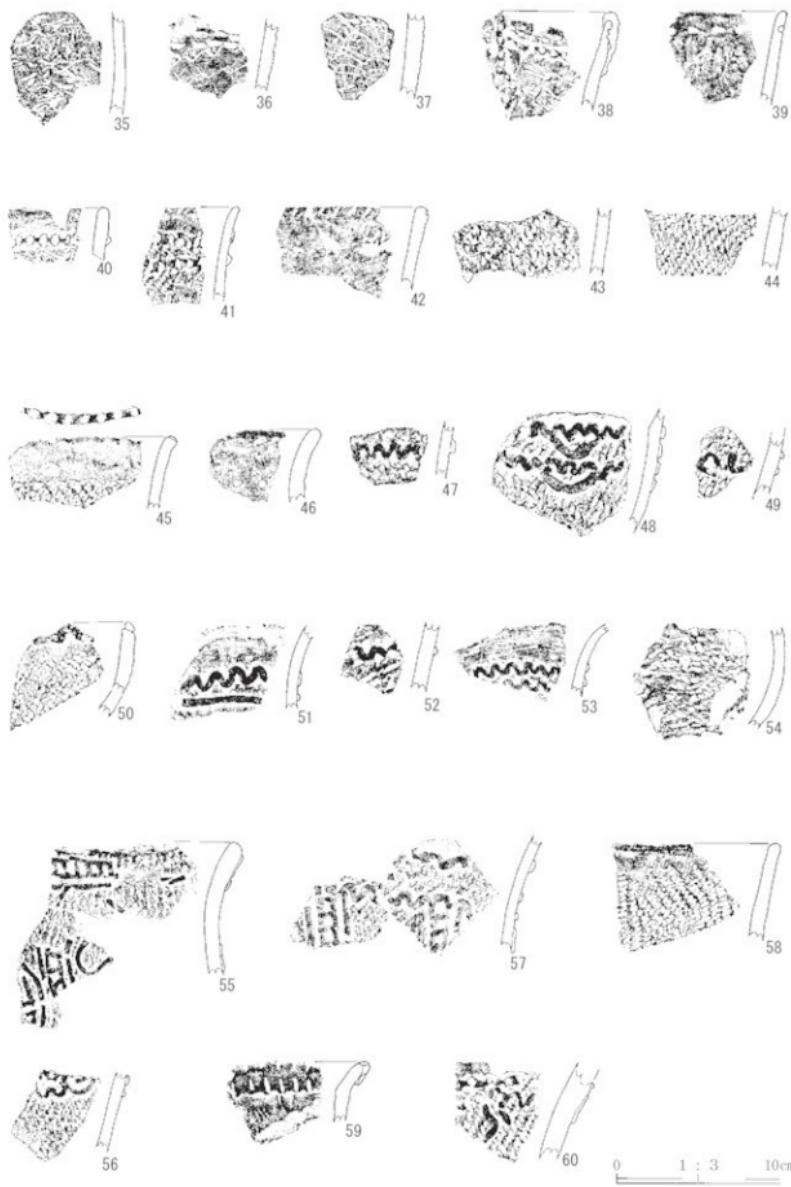
第8表 動物遺存体表

掲載No	出土地点	層位	重量(g)	種類	備考
320	B 2グリッド	Ⅲ層	12.76	イルカ？	
321	C 3グリッド	Ⅱ層	13.9	ウマ？の歯	
322	C 3グリッド	Ⅱ層	8.2	哺乳類の歯	
323	C 3グリッド	Ⅱ層	0.62	ニホンジカ	
324	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	5.61	ニホンジカ	
325	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	6.56	ニホンジカ	
326	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	3.13	ニホンジカ	
327	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	5.8	ニホンジカ	
328	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	4.32	ニホンジカ	
329	E 3グリッド	獸骨・炭化物集中地點	3.14		

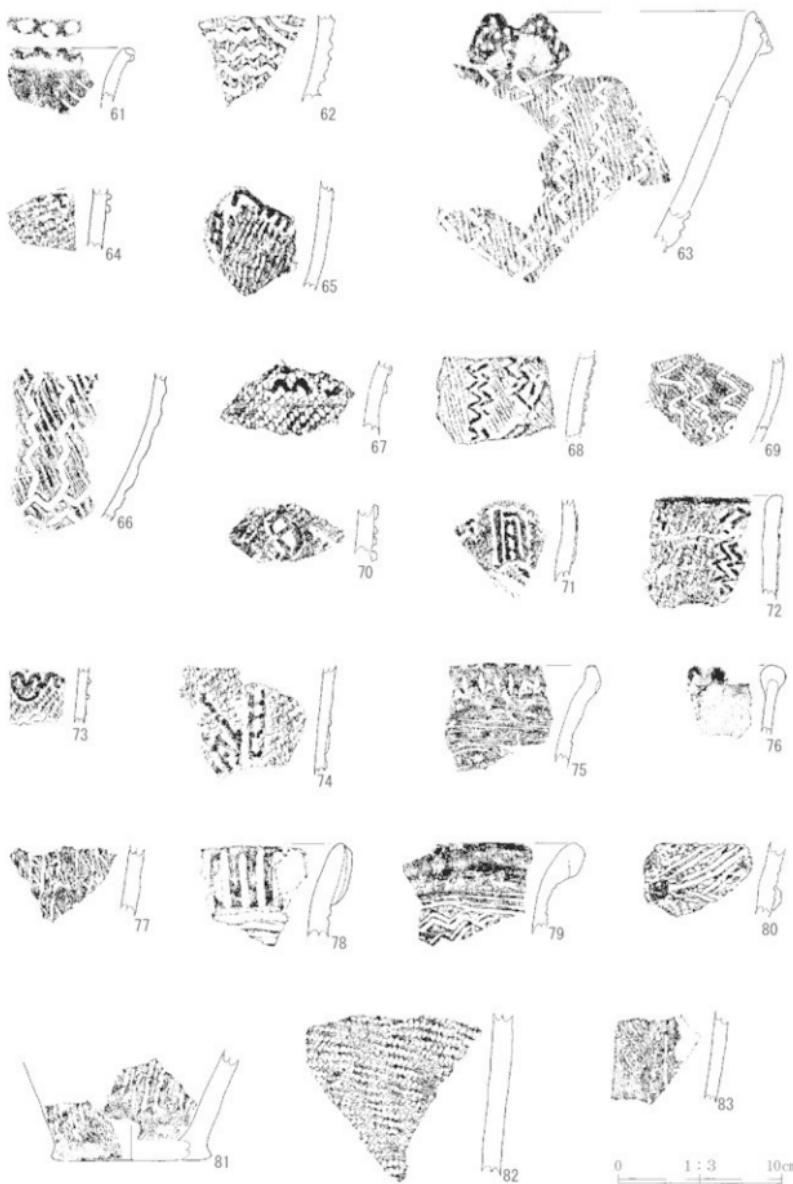
～329の獸骨小片は大形の陸生動物（ニホンジカ若しくはイノシシか）の何れかの部位と推定される。これらの獸骨小片は、獸骨・炭化物集中区で一括出土した。時期は特定できないが、縄文時代の産物と推定される。



第9図 土器(1)



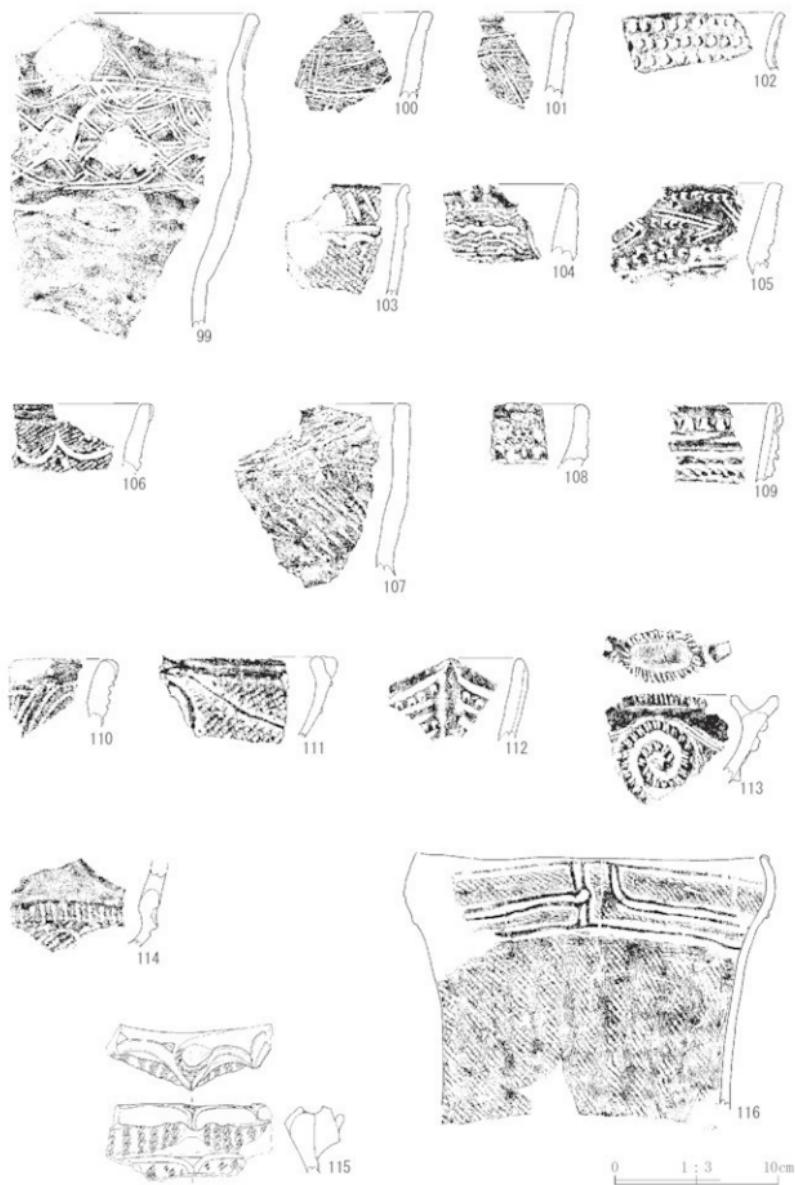
第10図 土器 (2)



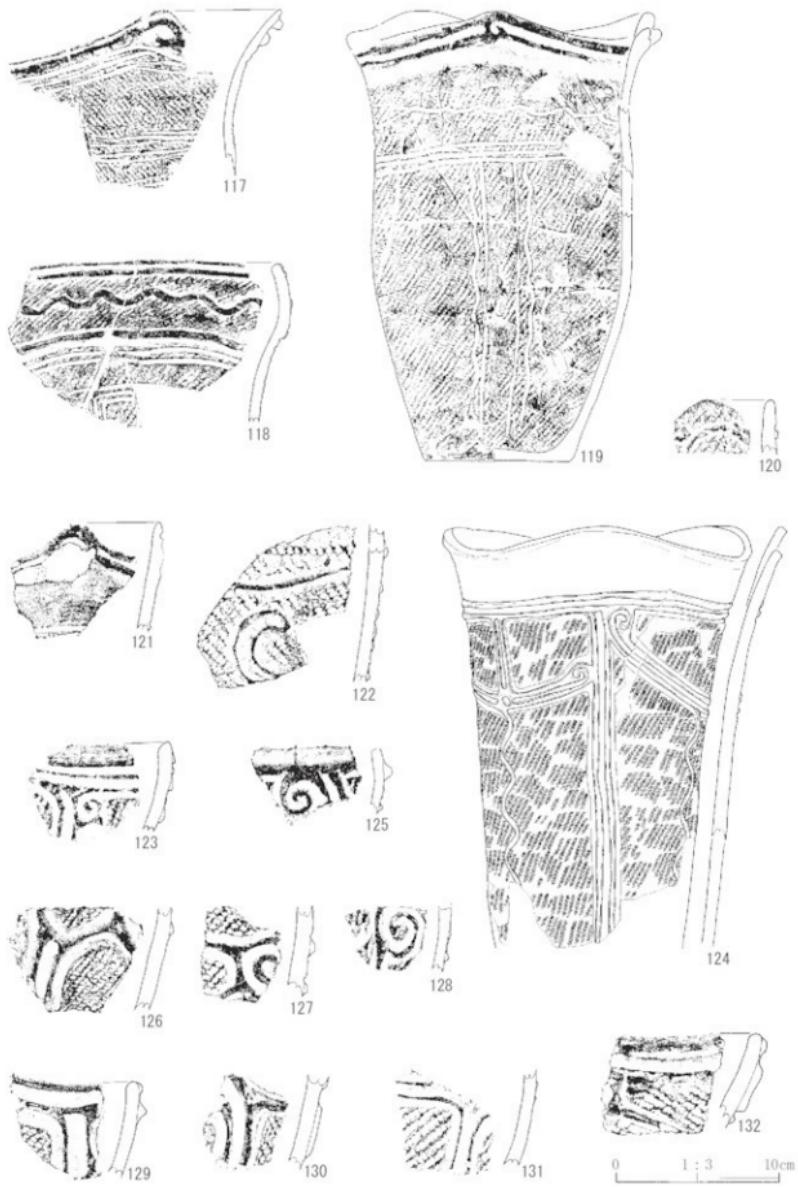
第11図 土器（3）



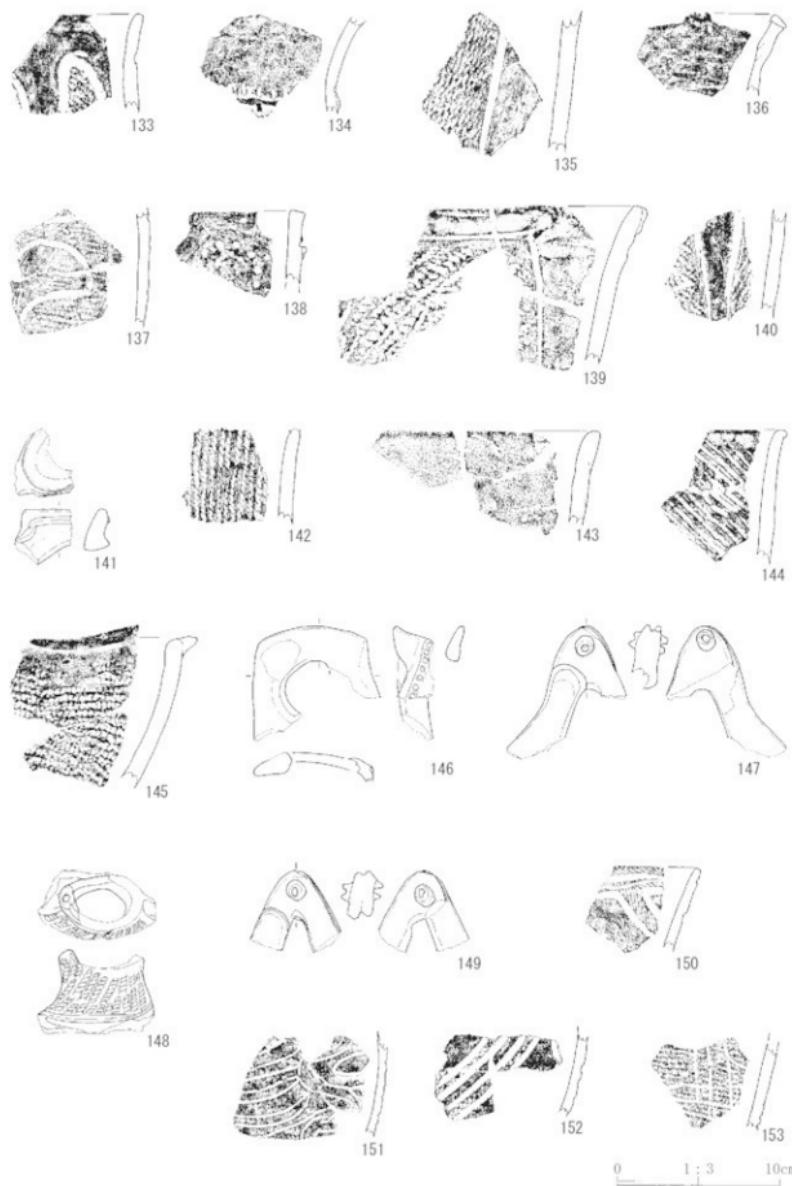
第12図 土器 (4)



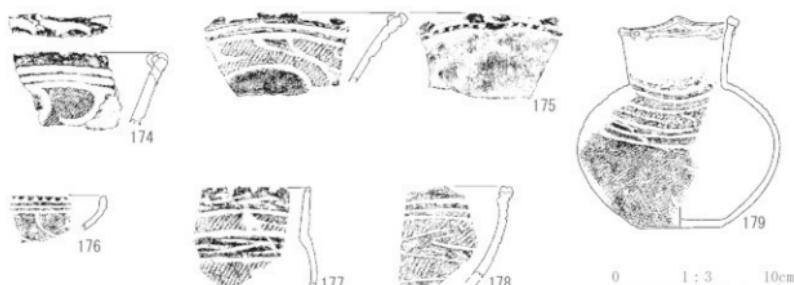
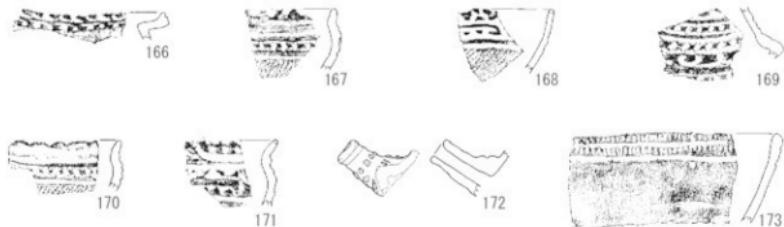
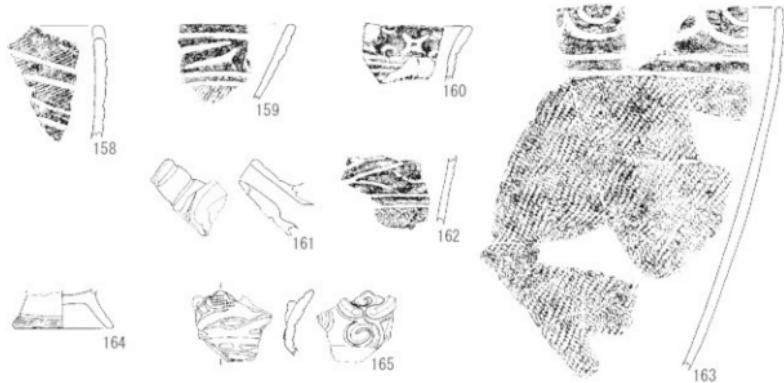
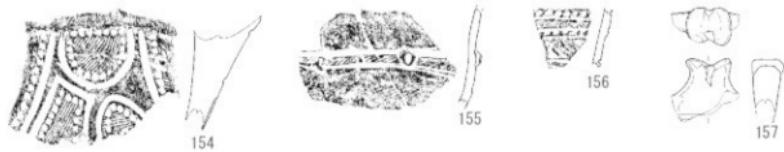
第13図 土器（5）



第14図 土器 (6)



第15図 土器（7）

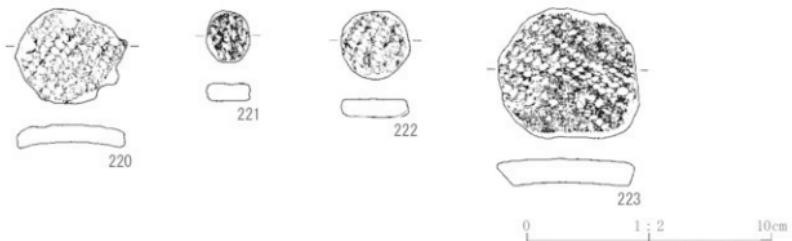
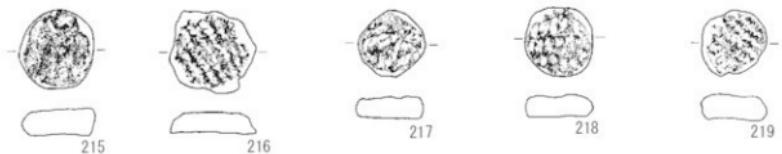
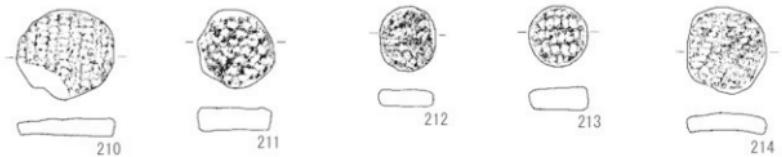
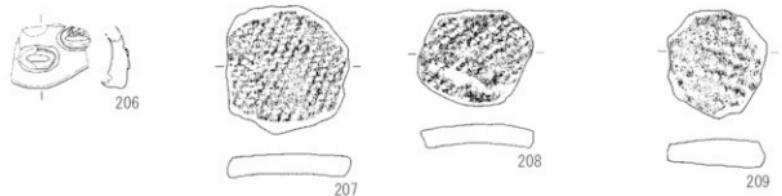


0 1 : 3 10cm

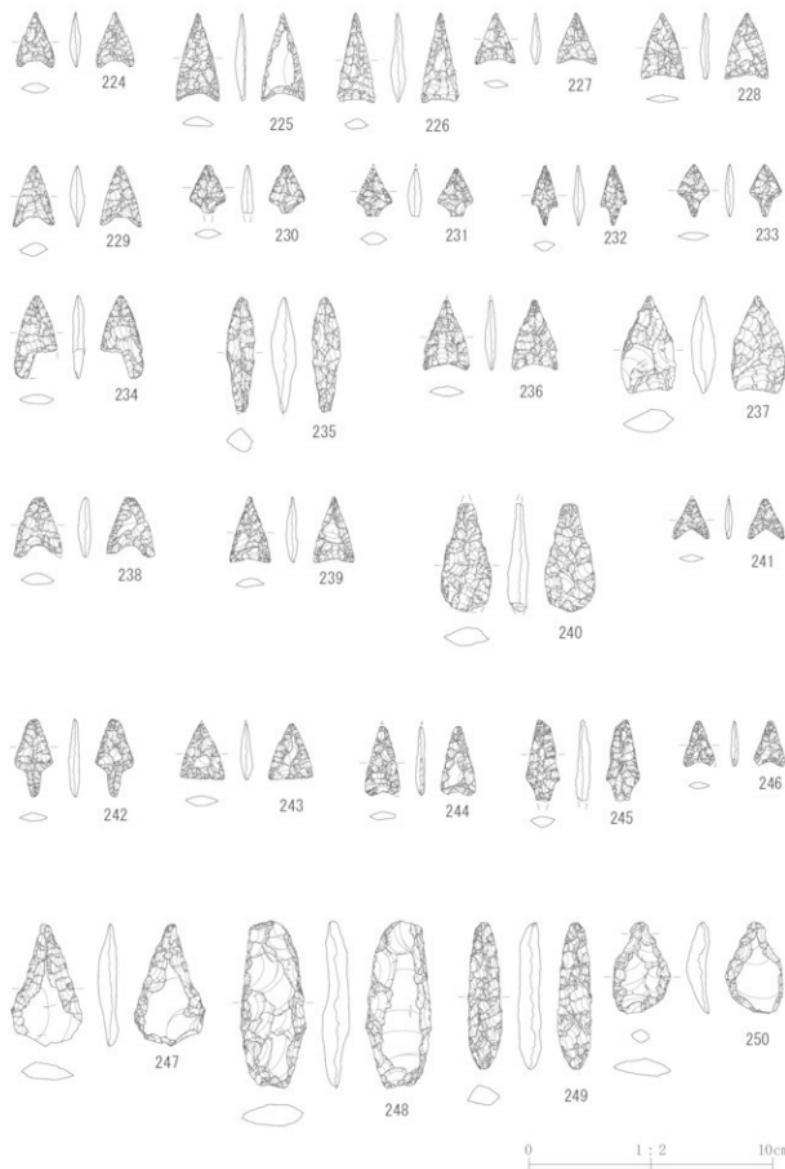
第16図 土器（8）



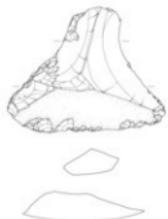
第17図 土器（9）



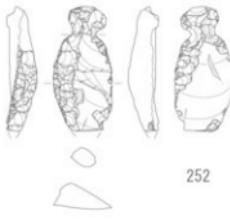
第18図 土製品



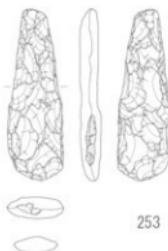
第19図 石器（1）



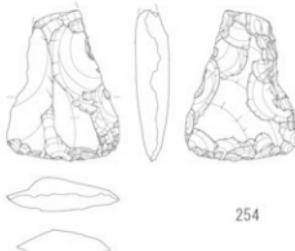
251



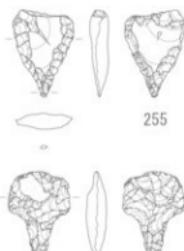
252



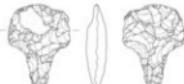
253



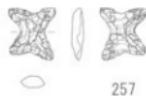
254



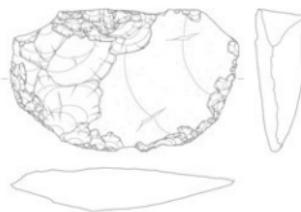
255



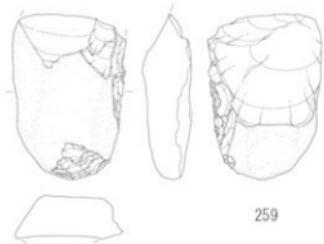
256



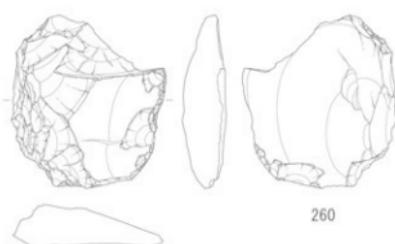
257



258



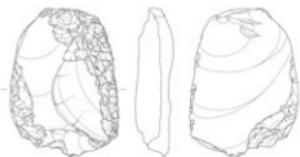
259



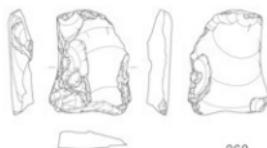
260



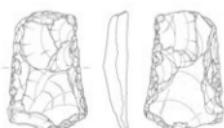
第20図 石器（2）



261



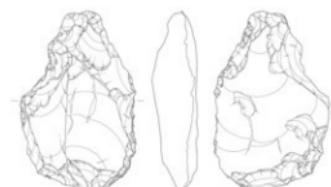
262



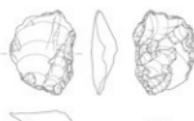
263



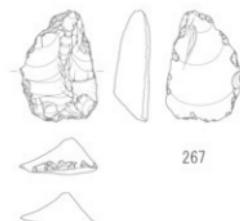
264



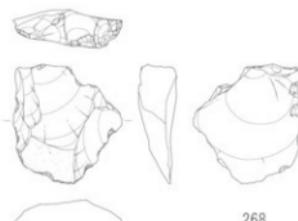
265



266



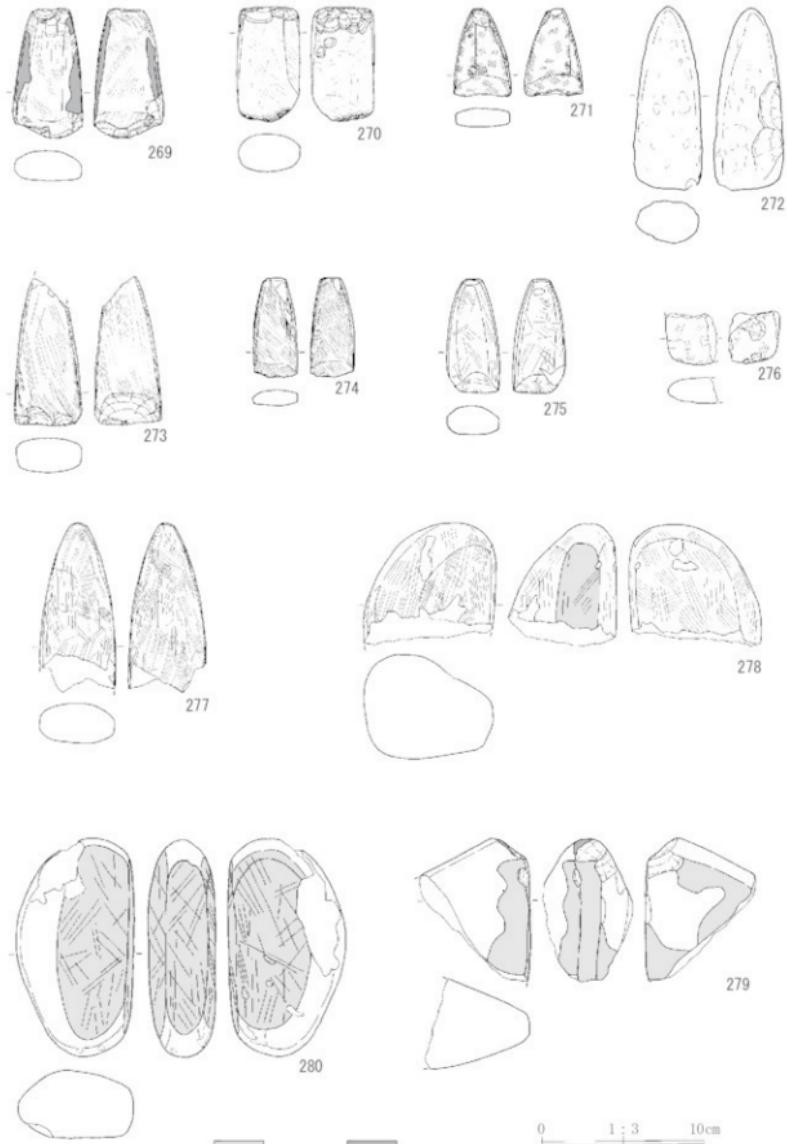
267



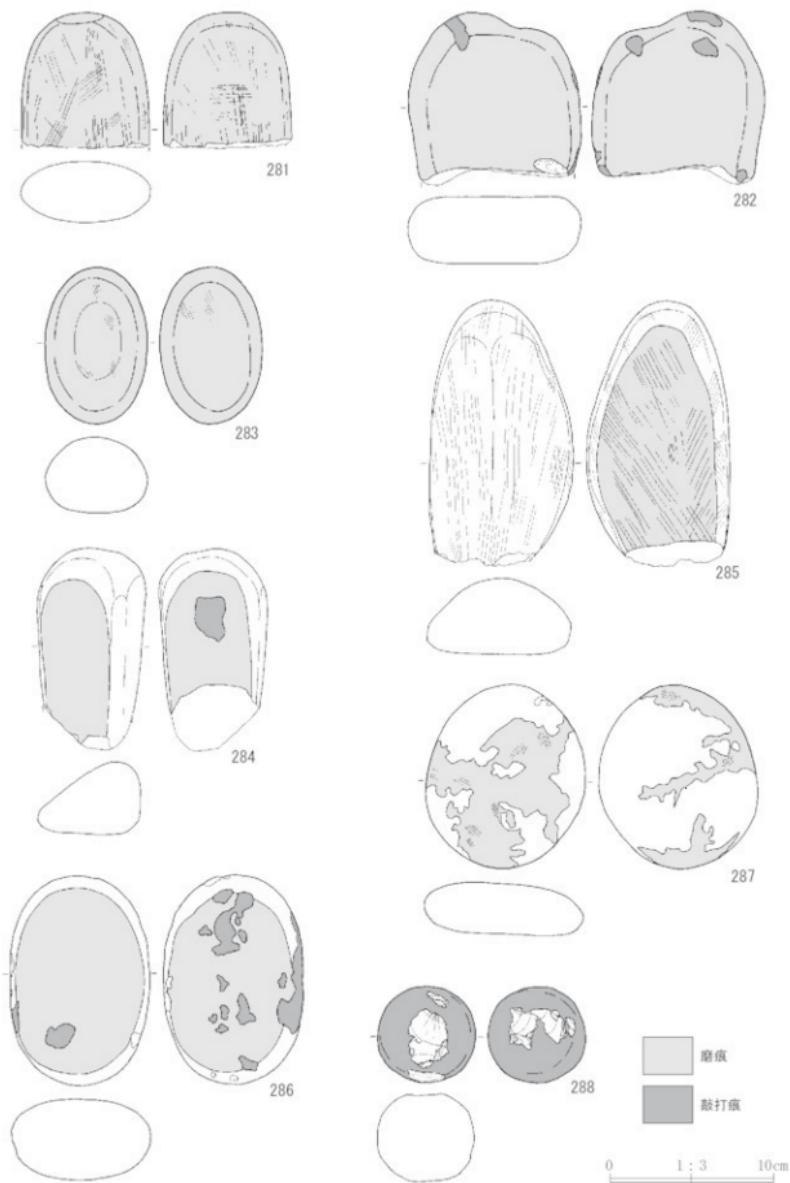
268



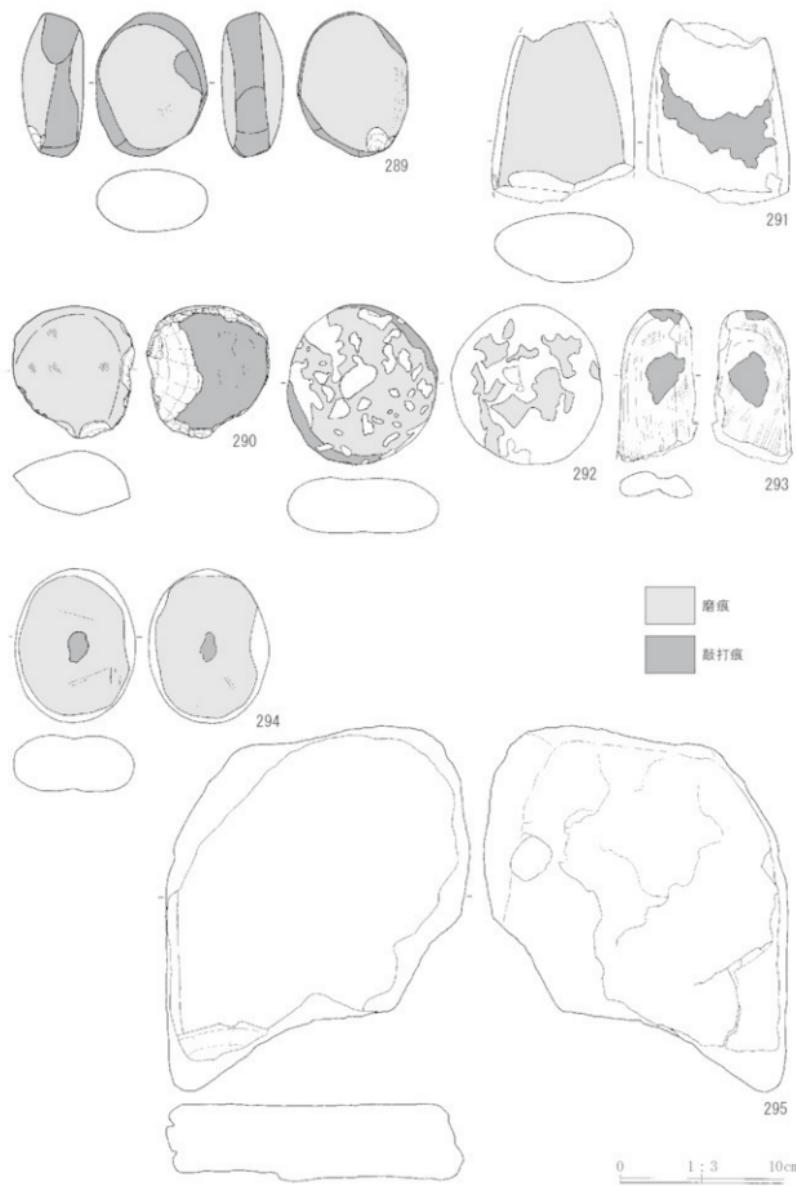
第21図 石器（3）



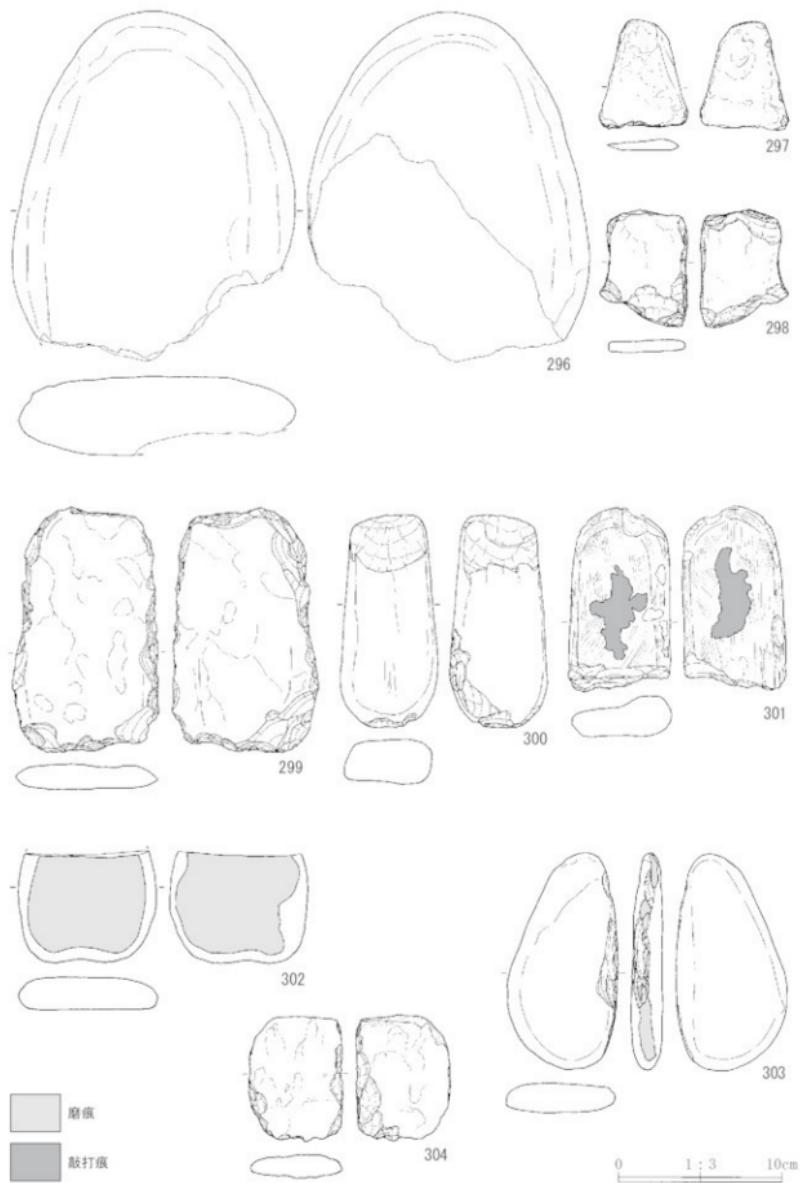
第22図 石器(4)(※標1)



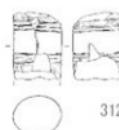
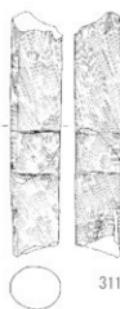
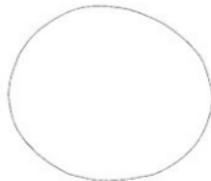
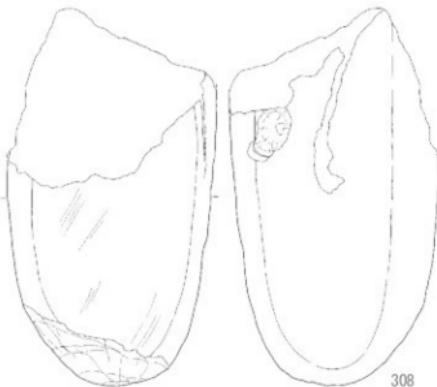
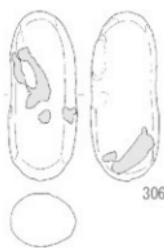
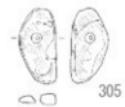
第23図 石器（5）（※標2）



第24図 石器（6）（※標3）



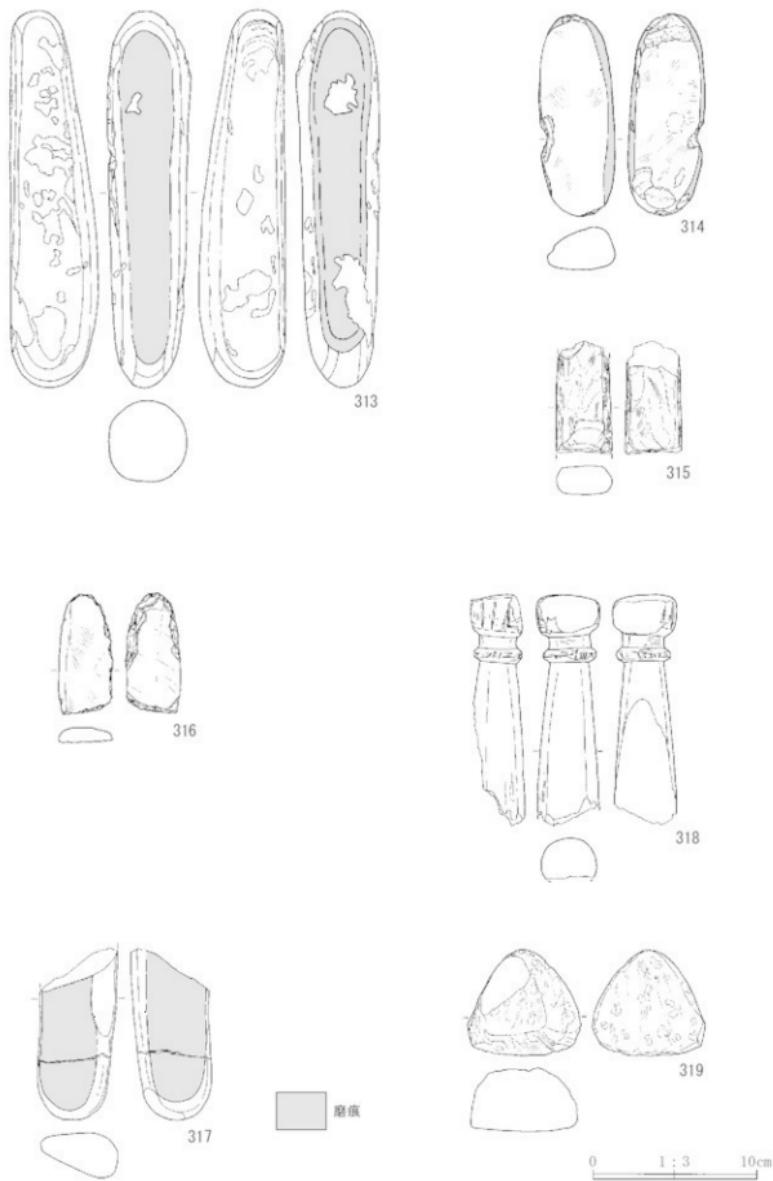
第25図 石器（7）（※標4）



磨痕

0 1 : 3 10cm

第26図 石製品 (1)



第27図 石製品（2）

第9表 土器観察表（1）

周級 地	出土地点	層位	形種	部位	口縁部・口唇部	支承・足底・その他	内面	時期	備考
1 E3グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	LR構造	低い構ナダ	大木1	継続多量	
2 C2グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、ナデ、折り返し口縁	末端ループ+RL構造	低い構ナダ	大木1	継続多量、6と同一個体	
3 D3グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	0段多角RL構造	低い構ナダ	大木1	継続多量	
4 D3グリッド	五層	深鉢	側部		0段多角RL+LR非捺出汎用横紋	低い構ナダ	大木1	継続少量	
5 B1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		末端ループ+0段多角RL構造	低い構ナダ	大木1	継続中量	
6 C3グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、ナデ、折り返し口縁	末端ループ+RL構造	低い構ナダ	大木1	継続少量、2と同一個体	
7 B2グリッド	五層	深鉢	側部		LR構造	横掛型	前開前集	継続中量	
8 C1グリッド	五層	深鉢	側部		RL+LR非捺出汎用横紋(交差施文)	横掛型	大木1	継続多量	
9 B1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		不整然な文、斜線・旋び(旋)	低いナダ	大木2a?	継続の量	
10 C1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		粗糲刮削	構ナダ	前開前～中量	継続少量	
11 B1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		LR構造	構ナダ	前開前～中量	継続少量	
12 E3グリッド	五層	深鉢	側部		不整然な文	構ナダ	大木2a	継続少量	
13 E3グリッド	五層	深鉢	口縁部		不整然な文	構ナダ	大木2a	継続の量	
14 E3グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、軽突円	複数(複数)・ナデ	構ナダ	大木2b	継続の中量	
15 D3グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部		不整然な文	構ナダ	大木2a	継続の量	
16 C1グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	不整然な文	構ナダ	大木2a	継続の量	
17 B2グリッド	五層	深鉢	側部		LR+RL捺來引状横文	構ナダ	大木2a	継続少量	
18 D3グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	不整然な文	ミガキ	大木2a	継続の量	
19 B2グリッド	五層	深鉢	側部		LR+RL捺來引状横文	ミガキ	大木2a	継続の量	
20 D1グリッド	五層	深鉢	側部		LR+RL捺來引状横文	ナデ～ケイリ	大木2a	継続少量	
21 D2グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	不整然な文	ナダ	大木2a	継続中量	
22 B2グリッド	五層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
23 B1グリッド	五層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
24 C1グリッド	五層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
25 E4グリッド	五層	深鉢	側部		貼付後縫、S字底通縫皮文		大木2b		
26 C1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
27 C1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
28 B1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
29 C2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
30 C1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b	継続少量、硬質な胎土	
31 D3グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b	継続少量	
32 D3グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b	継続少量、硬質な胎土	
33 D3グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b	継続少量、硬質な胎土	
34 B2グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、ナデ、やや角状	貼付後縫、S字底通縫皮文	ナダ	大木2b	継続少量	
35 B2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
36 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	側部		斜刺刃(刃にくぼ)、S字底通縫皮文	横ミガキ	大木2b	継続微量	
37 第2トレンチ北側	埋戻し土	深鉢	側部		S字底通縫皮文		大木2b		
38 D3グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、軽突丸	貼付後縫、S字底通縫皮文	横ナダ	大木2b	継続微量	
39 D3グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	贴剥剝、斜刺刃(刃にくぼ)、S字底通縫皮文	横ミガキ	大木2b	継続微量	
40 C1グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、浅気泡	貼付後縫、S字底通縫皮文	構ナダ	大木2b	継続微量、硬質な胎土	
41 C3グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、浅気泡	LR構造+貼付後縫(旋び)	横排型→ミガキ	前開中量?		
42 E4グリッド	五層	深鉢	口縁部	平縁、浅気泡	(口縁端部に斜位の斜刺刃(斜刺刃)、L無)構造	構ナダ	白底式?		
43 B2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		LR構造	ミガキ	前開中量?		全体の黒りが薄く、側位の部分は四角気味(斜位の素材に起因するものか?)
44 D2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		粗糲刮削	ミガキ→構ナダ	前開中量		
45 C1グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁、丸み、利歯	口縁上半無気、RL構造	構ナダ	大木3～4	口縁部は斜刺刃にミガキが施される。	
46 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁?	丸み	ミガキ	大木3～4		
47 B1グリッド	五層	深鉢	側部		(贴剥～浅気泡)・貼付後縫	ナダ	大木4	胎土中に石英岩くしはる葉が混入	
48 D1グリッド	五層	深鉢	側部		(贴剥なし)・贴剥～浅気泡(贴付後縫)	低いナダ	大木4		
49 B2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		地文(贴剥?)・贴付後縫	ナダ	大木4		
50 C1グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部	平縁(口縁、平筋気泡)、粘付斜辺付	LR構造		大木4		
51 C2グリッド	五層～七層	深鉢	口縁部?		地文(LR構造?)・浅次文(貼付後縫)・横排型	ミガキ	大木4		
52 C2グリッド	五層～七層	深鉢	側部		L(無)?→浅次文(貼付後縫)	ミガキ	大木4		
53 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	口縁部		横排型(2条の横筋平行する浅次文)	ミガキ	大木4		
54 C1グリッド	五層～七層	深鉢	側部		贴剥不明(軽気泡)、織目	構ナダ	大木4?		
55 C2グリッド	五層～七層	深鉢	口～側部	平縁、丸み	地文(贴剥不明)、織目?→棒子状文(贴付後縫)	横ミガキ	大木4～5	57と同一個体	

第10表 土器觀察表（2）

周紙 地	出土地点	變位	形種	部位	口縁部・口唇部	支脚・足基・その他	内面	時期	備考
56 D2グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部			切字不明(範疇?)	ミザキ	大木4	
57 D3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			造文(原字不明、範疇?)→梯子状文(貼付範疇)	ミザキ	大木4～5	55と同一個体
58 E4グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		0段多条RL、横位	横位	後期後葉	
59 D2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁、折り返し口縁、丸み、斜削内凹		列み列、梯子文	粗い構ナデ	大木4～5	
60 C2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部		LR+楕円→梯子状付後葉→幾何学状文(粘付範疇)		ナデ	大木4	織田の楕円底付後葉を伴つ内容からは、木大3式に近い時期か?。
61 第1トレンチ	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、斜突		口縁部面に波状文	横ナデ	大木5a	
62 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部			地文(原字不明)→波状文(沈窓)	ナデ	大木5	
63 D1グリッド	Ⅲb層	深鉢	口縁部		波状口縁、圓錐脚	熱糸文(L)→梯子状付後葉文(沈窓)	横ナデ	大木5	
64 B3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			LR+↓→梯子文	ナデ	大木4～5	
65 D3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			L:無記? → 梯子文(貼付後葉)	ナデ	大木5	
66 C2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			熱糸文(R)→圓錐脚文(沈窓)	ナデ	大木5	
67 D2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			LR+楕円→波状文(付後葉)	ナデ	大木5	
68 D3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			熱糸文(R)→幾何学文(貼付後葉)	ミザキ	大木5	
69 E3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			LR+楕円→梯子状文(沈窓)	横ナデ	大木5	
70 E4グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			楕円不規(付加系)→円形底状の梯子状文(貼付後葉)	ナデ	大木5	
71 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	側部			楕円不規→梯子状文(貼付後葉)	横ナデ	大木5	
72 D2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁、平底浅窓		LR+↓(付加系文)→波状文	横ナデ	大木5	
73 B2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			熱糸文(L)→幾何学文(貼付後葉)	ナデ	大木4～5	
74 B3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			熱糸文(L)→幾何学状文(貼付後葉)	ナデ	大木5	
75 B2グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み、斜削内凹		口縁部面に圓錐状底部曲面、梯子の沈窓文	横ナデ	大木5	
76 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、平底浅窓、突起		無文	横ナデ	大木5?	
77 B3グリッド	Ⅲb～Ⅳ層	深鉢	側部			波状状波文	ナデ	前期後葉?	
78 第2トレンチ南側	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、折り返し口縁、丸み		沈窓文	横ナデ	大木6	
79 E1グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、折り返し口縁、丸み		手執竹管による沈窓文(圓錐底、楕円底付)	ミザキ、横ナデ	大木6	
80 B1グリッド	Ⅲb層	深鉢	口縁部			熱糸文(R)→沈窓文+ゴタン状粘付文	横ナデ	大木6古	
81 C1グリッド	Ⅲa層	深鉢	側部下半～底			側：熱糸文(支脚文)→梯子状文(側底付)	粗いナデ	前頭?	
82 B3グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部			底：平底、ナデ	粗いナデ	前頭?	
83 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部			熱糸文?	ナデ	前頭?	
84 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	底～側部			洞：斜削付を持つ後葉、側：LR+LR+(付加系文)	ミザキ、横ナデ	大木6～7a	銀鏡型深鉢
85 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部			LR+RL結合状波状文+片端底(縦窓の體現文)	横ナデ	大木6新～7a	銀鏡型深鉢
86 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部			熱糸文(交差に施文)→平行直縫(辛毗竹管)	大木6～7a		
87 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		円形容の梯子状文(沈窓文)	ミザキ	大木6新	
88 E3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		手執竹管による沈窓文(沈窓文、LR複記)?	ナデ	大木7a?	銀鏡型深鉢
89 B3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、斜削		梯子底盤(底盤上に刷み)	横ナデ	前期後葉～中期初期	
90 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部	平縁、斜削		LR+↓結構底盤	ミザキ	前期末葉～中期初期	銀鏡型深鉢
91 D3グリッド	Ⅲa層	深鉢	側部下半～底			側：文(底盤)、底盤：側代板	横ナデ	前期末葉～中期初期	銀鏡型深鉢
92 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部下半～底			側：文(底盤)、底盤：側代板	横ナデ	前期末葉～中期初期	銀鏡型深鉢
93 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	側部			圓底状熱糸文			
94 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	側部			熱糸文(支脚文)合体系(1類)1→沈窓文	横ナデ。やや凸凹あり	大木7b	95、96と同一個体
95 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	口縁部	平縁、平底		沈窓文	ナデ	大木7b	94、96と同一個体
96 C3グリッド	Ⅲb層	深鉢	口縁部	沈窓文		沈窓文+ゴタン状粘付文	横ナデ	大木7b	94、95と同一個体
97 第1トレンチ	埋戻し土	深鉢	側部			楕円底盤(底盤上に通V字状の刷み)、LR+片端底盤	横ナデ	大木7b	
98 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		粗いナデ。やや凸凹あり	大木7b	船上に移動多量流入	
99 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口～側部	波状口縁、丸み		平行底盤による要形を私調とするモチーフ	粗いナデ。やや凸凹あり	大木7b	
100 E4グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		熱糸文→平行直縫、沈窓文によるモチーフ	横ナデ	大木7b	船上に移動多量流入
101 E4グリッド	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		平行底盤文	粗いナデ	大木7b	船上に移動多量流入
102 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口～側部上半	平縁、丸み		斜底の突変文	ミザキ	大木6新	
103 D3グリッド	Ⅲ層	深鉢	口～側部上半	平縁、丸み		口：LR梯級→斜底の切込縫、側：LR梯級	横ナデ	大木6	
104 第1トレンチ	埋戻し土	深鉢	口縁部	小波状口縁、丸み		踏付3脚→波状文(沈窓)	横ナデ	大木6	

第11表 土器観察表（3）

周紙 地	出土地点	層位	形態	部位	口縁部・口唇部	支脚・足基・その他	内面	時期	備考
105 第1トレント花崗岩	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、丸み	沈縫文・割文(手抜き呂)	横ナデ	大木6新	大木7aまで下がるか?	
106 第1トレント花崗岩	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、丸み	沈縫文・割文(手抜き呂)	横ナデ	大木6		
107 C1グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口縁部	渡底口縁?、丸み	沈縫文(長い延丈)、然あく(半袖筋条体第1頭)	横ナデ	大木6	駄土中に移転部署に混入	
108 D3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、平底	集合丸縁、割文文、丸み	横ナデ	大木6		
109 D3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	三角形切削文、沈縫	横ナデ	大木7a		
110 C3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、折り返し口縁、丸み	LH横縫→LH付背後(横縫の後邊に網縫を施した後→沈縫)	横ナデ	大木7b		
111 C1グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	LH横縫→LH付背後(横縫の後邊に網縫を施した後→沈縫)	横ナデ	大木7b		
112 第1トレント花崗岩	埋戻し土	深鉢	口縁部	山形状、丸み	鏡庭蛇腹(横縫)・割文文(手抜き呂)→沈縫	ナデ	大木7a		
113 C3グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口縁部	渡底口縁、突起	口縫縦縫に則り、點状隨縫による済合文(縫合上に凸凹)	ナデ	大木7b	口縫縦縫は上面側が切削形で別々が分離する。	
114 第1トレント花崗岩	埋戻し土	深鉢	口縁部	渡底口縁、突起	鏡庭蛇腹(横縫)(RL)、LH横縫→風呂状の突起体(横縫)	ナデ	大木7b		
115 E4グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、肥厚	口縫縦縫に施し斜筋付、鏡庭の突起体(横縫)(RL)、沈縫	ナデ	大木7b~8a		
116 C2グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口・側部中央	平縁、丸み	口：RL横縫→點付丸縫(鏡庭・斜縫) 側：LH横縫→LH付背後	横ナデ	大木8	一基	
117 E3グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口縁部	渡底口縁、丸み	口縫縦縫に施し發縫による済合文(横縫に横縫する)、LH横縫→沈縫文(数箇の沈縫が側面に向かって引かれること)	ミガキ	大木8a		
118 E3グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口・側部上半	平縁、丸み	口：LR横縫→點付横縫(横縫・横狀) 側：LH横縫→LH付背後	横ナデ	大木8a	全般に地文を施後に経年変化が施され、地文や沈縫は所々剥離実見にある。	
119 E4グリッド	Ⅱ a層	深鉢	ほぼ定形	渡底口縁、丸み	口縫縦縫に施し横縫縫による済合文(横縫に横縫する)、口・側部：RL横縫→平口縫、沈縫(沈縫)・底部：平縁、丸み	横ナデ	大木8a		
120 C1グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	山形状、丸み	LR横縫→點付横縫(横狀)	ミガキ	大木8		
121 C1グリッド	Ⅱ a層	深鉢	口縁部	山形状、丸み	口縫縦縫に施し點付(丸縫を伴う)	ナデ	大木8a~8b		
122 第2トレントナホ掛	埋戻し土	深鉢	口縁部	渡底口縁、丸み	鏡庭蛇腹(横縫上に斜筋付)、LH横縫→點付横縫(数箇の横縫に横縫された空間に丸みが施される)	ミガキ	大木8a~8b		
123 D1グリッド	Ⅱ a~Ⅲ b層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	RLR7度傾→陰沈縫による済合文	横ナデ	大木8b		
124 D3グリッド	Ⅱ層	深鉢	殆ど定形(底部)渡底口縫、角既成、 ミガキ	殆ど定形(底部)渡底口縫、角既成、 ミガキ	口縫縦ナデ、脇部横縫ミガキ	大木8古	一基出土		
125 C1グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部		陰沈縫による済合文	ミガキ	大木8b		
126 D2グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		RL横縫→點付横縫による地円形大	横ナデ	大木8b		
127 D3グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		RL前縫→陰沈縫による済合文・脇部内形文	ナデ	大木8b		
128 E3グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		RL前縫→陰沈縫による済合文・脇部内形文	ナデ	大木8b		
129 A2グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	渡底口縁、丸み	RL横縫→陰沈縫による済合文	ミガキ	大木8b		
130 第1トレント	埋戻し土	深鉢	側部		LRL横縫→陰沈縫による済合形文	ナデ	大木8b~9		
131 第1トレントナホ掛	埋戻し土	深鉢	側部		LRL横縫→陰沈縫	ミガキ	大木8b~9		
132 第2トレントナホ掛	埋戻し土	深鉢	口縁部	渡底口縁、丸み	RL横縫→陰沈縫による済合文	横ナデ	大木8b		
133 C3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	LH横縫→LH前縫文若しくは逆U字状文(沈縫)→陰沈縫	ナデ	大木9		
134 第1トレント	埋戻し土	深鉢	口縁部		無文、鏡庭の斜筋向、點付背縫(崩め)	横ナデ	不明		
135 B3グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		地文(芯立文)→陰沈区側→陰沈縫文	横ナデ	大木10		
136 C3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、菱形(剪裁)	無いナデ、形彫み	大木10			
137 D2グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		RL横縫→陰沈縫(アルファベット文?)→横縫文	ミガキ	大木10		
138 第1トレント	埋戻し土	深鉢	口縁部	渡底口縫、突起	円文(粘土貼付)、円形斜筋文	ナデ	大木10		
139 第1トレント	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、角既成	(L+R)横縫→點付横縫	ミガキ	大木10新?		
140 C3グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		RL横縫→L+R+丁字(横縫開口)→横系文(半袖筋条体第1頭)	ミガキ	大木10		
141 C1グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部突起?		點付横縫(縫目)	不明(中間未発見)			
142 C1グリッド	Ⅱ層	深鉢	側部		點付横縫	ミガキ	中間未		
143 C1グリッド	Ⅱ a~Ⅲ b層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	無文	横ナデ	不明		
144 D3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	無文(L)	ミガキ	中間未?		
145 E4グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	不明	LH横縫	ナデ	不明	垂器形の傾き不明	
146 C3グリッド	Ⅱ層	深鉢?	口縁部突起?		點付横縫(縫目)	ミガキ	初期相違?	駄土の傾きから中期末~後期初頭の可能性あり。	
147 D2グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部突起?	突起	表裏面にボタン状突起	門前	149と同一個体		
148 E3グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部	中空突起?	EL横縫	門前			
149 E1グリッド	Ⅱ層	深鉢	口縁部突起?	突起	表裏面にボタン状突起	門前	147と同一個体		
150 第1トレント	埋戻し土	深鉢	口縁部	平縁、平底、ミガキ	沈縫区側→EL光底→沈縫(引き直し)	ナデ、ミガキ	後期前葉		

第12表 土器觀察表（4）

編號 加	出土地点	變位	形態	部位	口縁部・口唇部	支脚・足・その他	内面	時期	備考
151	第2トレンチ南側	埋没し上	鋸?	側部		入り組み文（虎躍）	横ナデ	後期前葉	
152	B2グリッド	正層	鋸?	側部	RL→平行虎躍（4条）	ミガキ	後期前葉		
153	H3グリッド	正層	深鉢?	側部	LR→虎躍文	ミガキ	宮日1号?		
154	C3グリッド	正層	深鉢	口縁部	夷起	虎躍区隔→LR光景→円形刺突文→虎躍（引込直し）	ミガキ	田柄貝塚遺跡	
155	C3グリッド	正層	深鉢?	口縁部		LR修復→平行虎躍・貼り目（虎躍二段伏）	無いナデ。やや凸凹有り	田柄貝塚V群	器種は他の可能性もある。
156	A2グリッド	正層	鉢	口縁部		平行虎躍、側変列、RL横裂	横ナデ	田柄貝塚遺跡	
157	B2グリッド	正層	不明	口縁部	夷文			後期	
158	B2グリッド	正層	深鉢	口縁部	小波状口縁、丸み、 ミガキ	LR横裂→虎躍文	ナデ	大財 B1後期 耕木	
159	C3グリッド	正a層	深鉢?	口縁部	平縁、丸み	三文文、LR横裂	横ナデ	大財 B	
160	D1グリッド	正層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	三文文、平行虎躍	ミガキ	大財 B	硬質な胎土
161	D3グリッド	正層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	三文文、平行虎躍	ミガキ	大財 B	
162	D3グリッド	正層	深鉢	口縁部	ミガキ	口：三文文、側：LR横裂	ナデ	大財 B	
163	E3グリッド	正層	深鉢	口・側部	平縁、丸み、ミガキ	口：三文文、側：LR横裂	無い・横ナデ	大財 B	胎土に粘粒含む
164	D3グリッド	正層	台付鉢	側部		虎躍、ミガキ、LR横裂	横ナデ	大財 B2	
165	D2グリッド	正層	注口上 器	口縁部		外縁：虎躍三文文、RL斜傾 内面：貼付文	大財 B	※内面の文様は人前に見て取れるモーフ	
166	E4グリッド	正層	注口上器	口縁部		半曲伏文	ミガキ		
167	D3グリッド	正層	鉢	口・側部上	小波状口縁、刻痕	口：半曲伏文、側：LR横裂	ミガキ	大財 BC	
168	D2グリッド	正層	鉢	口・側部上	平縁、弓張型	口：半曲伏文、側：LR横裂	ミガキ	大財 BC	
169	C1グリッド	正層	注口上器	口縁部		半曲伏文	ナデ	大財 BC	
170	C1グリッド	正a層	鉢	口・側部上	小波状口縁、刻痕	口：半曲伏文、側：LR横裂	ミガキ	大財 BC	
171	C1グリッド	正層	鉢	口縁部	小波状口縁、刻痕	半曲伏文	ミガキ	大財 BC	
172	B2グリッド	正層	深鉢	口縁部		半曲伏文	ミガキ	大財 BC	
173	B2グリッド	正a層	深鉢	口縁部	夷字	平行虎躍→別口目	横ミガキ	前期前半	
174	B3グリッド	正層	浅鉢?	口縁部		LR横裂→虎躍→ミサキ	ミガキ	大財 C1	
175	A2グリッド	正層	浅鉢	口縁部	平縁、弓張型	LR横裂→虎躍→ミサキ（豊消虎文）	ミガキ	大財 C1	
176	D3グリッド	正層	鉢	口縁部	平縁	LR	ミガキ	大財 BC	
177	D1グリッド	正層	鉢	口・側部上	小波状口縁	LR横裂、三文文	ミガキ	大財 B	
178	D1グリッド	正層	鉢	口縁部	波状口縁、A変形	LR横裂→虎躍文→豊消虎文	ミガキ	大財 C2	
179	D1グリッド	正a～正b層	鉢	口・側部上	夷字	平縁、夷字（口：夷字、側：LR斜傾→虎躍、底：夷字）、虎躍	ミガキ、横ナデ	大財 C1	
180	第1トレンチ	埋没し上	深鉢?	側部		雲形文（LR横裂・豊消虎文）		大財 C2	注口部
181	C3グリッド	正層	浅鉢?	側部		雲形文（LR横裂・豊消虎文）	ミガキ	大財 C2	
182	C2グリッド	正層	浅鉢?	側部		雲形文（LR横裂・豊消虎文）	ミガキ	大財 C2	
183	C3グリッド	正a層	鉢	側部		横豎變（漫遊上に複数の貼付+虎躍） 虎躍文（LR横裂・豊消虎文）	剥落	大財 C2	
184	第1トレンチ	埋没し上	鉢	口縁部	平縁	虎躍→ミサキ	ミガキ	大財 C1～C2	
185	E3グリッド	正層	鉢	口縁部	平縁	虎躍、貼り目	ミガキ	横開口裏?	
186	C3グリッド	正a層	鉢	口・側部上	平縁、組み	横疊平行虎躍	ミガキ、横ナデ	大財 C2～A	
187	C3グリッド	正層	鉢	口・側部上	平縁、組み	平行虎躍、LR・RL者赤変豊消虎文	ミガキ、横ナデ	大財 C1	
188	第1トレンチ	埋没し上	鉢	口縁部	平縁、角底	工字文	横ナデ、横伝虎躍	大財 A	
189	B2グリッド	正層	鉢?	口・側部		工字文	横ナデ	大財 A	
190	E4グリッド	正層	鉢	口縁部	波状口縁、角底、夷起	RL斜傾	無いナデ	大財 A?	
191	第1トレンチ	埋没し上	鉢	口縁部	平縁、丸み	変形工字文	ナデ、横伝虎躍	大財 A	
192	D3グリッド	正層	深鉢	口縁部	平縁、虎躍	口縁端面に削り、横裂平行虎躍	無いナデ、横横み 横開		
193	C2グリッド	正層	鉢	口・側部	平縁、角底	口：三文文（虎躍）側：LR横裂	横ナデ	大財 B	
194	D2グリッド	正層	深鉢	側部		LR横裂	ナデ	略開	
195	E3グリッド	正層	深鉢（くは深鉢）	口縁部	平縁、角底、ミガキ	RL? 縦裂	横ナデ	不明（強生か）	
196	D3グリッド	正層	浅鉢（くは浅鉢）	口縁部	平縁、角底	変形工字文	横ナデ	首木傳?	
197	D1グリッド	正層	鉢?	鉢?		虎躍	首木傳?		
198	第2トレンチ南側	埋没し上	鉢	口縁部	平縁、丸み	平行虎躍	ナデ	強生前葉	
199	D3グリッド	正層	浅鉢（くは浅鉢）	口縁部	平縁、丸み	変形工字文	ナデ	強生前葉	
200	A2グリッド	正層	鉢	口縁部	平縁、丸み	変形工字文	ナデ	強生前葉	
201	E2グリッド	正a～正b層	底板影響	側部			ロク切	9～10世紀	
202	C1グリッド	正層	底板影響	口縁部	平縁	夷文	ナデ	強開前半?	

第13表 土器品観察表

( )内は残存値

荷範№	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考
203	ミニチュア土器	D2 グリッド	Ⅲ層	(3.2)	(4.8)	(0.6)	139	中期?	
204	土偶	第1トレシ南側	埋戻し土	(3.8)	(5.8)	(1.9)	239	大洞B	頭部+肩+腕部
205	土偶	E3 グリッド	Ⅱ～Ⅲ層	(3.1)	(2.6)	(2.2)	12.2	晩期前業	脚部
206	土偶?	C1 グリッド	Ⅱ～Ⅲ層	(2.6)	(3.3)	(0.8)	6.7	晩期中業?	顔部の一部
207	円盤状土製品	C1 グリッド	Ⅲ b～Ⅳ層	5.3	5.0	0.8	31.1		RLR
208	円盤状土製品	C1 グリッド	Ⅲ b 層	4.0	4.7	0.8	19.1		RL
209	円盤状土製品	E2 グリッド	Ⅲ b 层	4.5	4.1	1.1	22.3		RL
210	円盤状土製品	E3 グリッド	Ⅲ b 层	3.7	4.0	0.7	11.3	中期?	LR
211	円盤状土製品	D3 グリッド	Ⅲ a 层	3.2	3.1	0.9	10.5		RLR
212	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	2.6	2.3	0.7	8.1	後期?	
213	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	2.5	2.4	1.0	6.8		LR
214	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	3.5	3.2	0.7	9.5		RL
215	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	3.2	3.1	1.1	12.0		
216	円盤状土製品	D2 グリッド	Ⅲ層	3.4	3.5	0.9	11.7	中期?	LR
217	円盤状土製品	D3 グリッド	Ⅲ層	2.7	2.8	0.9	7.5		
218	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	2.8	2.8	0.9	9.6		LR
219	円盤状土製品	C2 グリッド	Ⅰ～Ⅲ層	2.6	2.7	1.0	5.8	後～?期	LR
220	円盤状土製品	第1トレシ南側	埋戻し土	3.9	4.5	0.7	15.6	前期	LR、刺突
221	円盤状土製品	C3 グリッド	Ⅲ層	2.1	1.8	0.7	3.8		LR
222	円盤状土製品	第1トレシ	埋戻し土	2.8	2.8	0.8	7.5		
223	円盤状土製品	第2トレシ北側	埋戻し土	5.4	5.8	1.0	37.6	中期	LR

第14表 石器・石製品観察表

( )内は残存値

荷範№	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地	時代	備考
224	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ～Ⅴ層	2.2	1.6	0.5	69	黄岩	北上山地	古生代	基部わざかに抉り
225	石鑿	C1 グリッド	Ⅲ b 层	3.6	1.8	0.5	190	黄岩	北上山地	古生代	基部わざかに抉り
226	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	3.6	1.5	0.6	200	黄岩	北上山地	古生代	平基
227	石鑿	D2 グリッド	Ⅲ b 层	2.0	1.7	0.4	68	黄岩	北上山地	古生代	平基
228	石鑿	E3 グリッド	Ⅲ b 层	2.7	1.8	0.4	117	黄岩	北上山地	古生代	基部わざかに抉り
229	石鑿	E2 グリッド	Ⅲ層	2.4	1.7	0.6	146	黄岩	北上山地	古生代	基部U字状抉り
230	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	2.0	1.5	0.5	99	黄岩	北上山地	古生代	有条
231	石鑿	C2 グリッド	Ⅲ層	2.0	1.5	0.6	106	浅色黄岩	北上山地	古生代	有条
232	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	2.4	1.1	0.5	67	浅色黄岩	北上山地	古生代	有条
233	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	2.1	1.3	0.3	642	黄岩	北上山地	古生代	有条
234	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ層	3.4	(1.8)	0.5	201	浅色黄岩	北上山地	古生代	赤色黄岩製、基部欠損
235	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ層	4.7	1.2	1.0	428	黄岩	北上山地	古生代	やや挫状
236	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ層	2.8	1.9	0.5	166	黄岩	北上山地	古生代	基部わざかに抉り
237	石鑿	D4 グリッド	Ⅲ層	4.0	2.1	1.0	745	黄岩	北上山地	古生代	平基
238	石鑿	D4 グリッド	Ⅲ層	2.3	2.0	0.6	188	黄岩	北上山地	古生代	基部U字状抉り
239	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ層	2.7	1.2	0.5	141	黄岩	北上山地	古生代	平基
240	石鑿	D2 グリッド	Ⅲ層	4.4	2.1	0.9	653	黄岩	北上山地	古生代	先端部欠損
241	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	1.7	2.1	0.3	643	浅色黄岩	北上山地	古生代	基部V字状えぐり
242	石鑿	C3 グリッド	Ⅲ層	3.1	2.1	0.3	134	黄岩	北上山地	古生代	有条
243	石鑿	D3 グリッド	Ⅲ層	3.4	1.9	0.5	145	黄岩	北上山地	古生代	平基
244	石鑿	D2 グリッド	I層	2.8	2.0	0.4	129	黄岩	北上山地	古生代	基部わざかに抉り
245	石鑿	D2 グリッド	I層	3.3	1.9	0.6	196	黄岩	北上山地	古生代	有条
246	石鑿	第1トレシの面部	埋戻し土	1.8	1.3	0.3	48	鷹嘴石	不明	基部わざかに抉り	
247	尖頭器	C3 グリッド	II層下段	5.0	2.9	0.9	805	浅色黄岩	北上山地	古生代	円基
248	尖頭器	C3 グリッド	II層	6.8	2.7	1.1	21.7	黄岩	北上山地	古生代	
249	尖頭器	C2 グリッド	II層	6.0	1.9	1.0	816	黄岩	北上山地	古生代	棒状
250	石鑿	C2 グリッド	II層	3.8	2.9	1.0	578	黄岩	北上山地	古生代	
251	石鑿	C1 グリッド	II層	5.1	6.4	1.5	293.5	黄岩	北上山地	古生代	
252	石鑿	D2 グリッド	II層	5.1	2.5	0.8	1213	黄岩	北上山地	古生代	先端部欠損
253	石鑿?	C3 グリッド	II層	7.0	2.3	0.9	1586	黄岩	北上山地	古生代	碧玉石等未製品の可能性あり
254	石鑿	B2 グリッド	II層	6.1	4.6	1.4	3700	黄岩	北上山地	古生代	
255	石鑿	C3 グリッド	II層	3.4	2.6	0.8	566	黄岩	北上山地	古生代	
256	石鑿	第1トレシの面部	II層	3.7	2.6	0.9	531	黄岩	北上山地	古生代	
257	尖形石器	C3 グリッド	II層	2.1	1.9	0.5	180	黄岩	北上山地	古生代	X字状(または手裏鉄)
258	スケレバード	E3 グリッド	II a 层	6.6	4.7	2.1	7843	黄岩	北上山地	古生代	

規範No.	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備考
259	スクレーパー	B1 グリッド	Ⅱ層	59	9.3	2.6	122.29	頁岩	北上山地	古生代	
260	スクレーパー	B1 グリッド	Ⅱ層	67	6.4	1.8	73.55	カルンフェルス	北上山地	古生代の頁岩が中生代白堊紀に変成	
261	スクレーパー	D1 グリッド	Ⅱ層	61	4.5	1.6	45.92	頁岩	北上山地	古生代	
262	スクレーパー	C2 グリッド	Ⅱ層	43	3.4	1.0	13.80	頁岩	北上山地	古生代	
263	スクレーパー	D3 グリッド	Ⅱ層	49	3.3	1.1	17.17	頁岩	北上山地	古生代	
264	スクレーパー	C3 グリッド	Ⅱ層	35	5.3	1.1	18.36	頁岩	北上山地	古生代	サイド
265	スクレーパー	C2 グリッド	Ⅱ層	72	4.3	1.9	56.10	頁岩	北上山地	古生代	
266	スクレーパー	D3 グリッド	Ⅱ層	34	2.7	1.1	8.16	頁岩	北上山地	古生代	
267	スクレーパー	D3 グリッド	Ⅱ層	46	3.2	1.5	18.15	頁岩	北上山地	古生代	
268	ツバフ	C2 グリッド	Ⅱ層	49	4.5	1.6	28.59	頁岩	北上山地	古生代	
269	磨製石斧	D1 グリッド	Ⅲa 層	78	4.2	1.8	103.71	頁岩	北上山地	古生代	
270	磨製石斧	C2 グリッド	Ⅲa 層	69	3.8	2.3	108.9	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
271	磨製石斧	D1 グリッド	Ⅲa 層	53	3.5	1.1	31.2	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	
272	磨製石斧	D3 グリッド	Ⅲa 層	112	4.2	2.6	156.5	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	
273	磨製石斧	C2 グリッド	Ⅲa 層	90	4.1	2.1	139.4	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	
274	磨製石斧	C1 グリッド	Ⅲa 層	41	1.9	0.6	9.2	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	月別・基部欠損
275	磨製石斧	D3 グリッド	Ⅲa 層	46	2.2	1.2	18.1	頁岩	北上山地	古生代	ミニチュア
276	磨製石斧	C2 グリッド	Ⅲa 層	31	3.1	1.6	24.3	頁岩	北上山地	古生代	ミニチュア
277	磨製石斧	D2 グリッド	Ⅰ層	103	4.7	2.4	174.8	薄板状灰岩	北上山地	中生代白堊紀	月別のみ
278	磨製石斧	D3 グリッド	Ⅲa 層	75	8.1	6.6	528.8	頁岩	北上山地	古生代	月別欠損
279	劈石車石	D4 グリッド	Ⅲa 層	(92)	(6.7)	(55)	328.7	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
280	劈石車石	D3 グリッド	Ⅲa 層	133	7.1	4.2	625.5	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
281	磨石	C3 グリッド	Ⅲa 層	(8.2)	7.9	3.8	432.1	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
282	磨石	E3 グリッド	Ⅲa 層	106	10.2	4.1	838.2	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
283	磨石	C2 グリッド	Ⅲa 層	97	6.3	4.7	436.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
284	磨石	E4 グリッド	Ⅲa 層	123	6.6	4.5	524.0	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
285	磨石	C3 グリッド	Ⅲa 層	(16.2)	8.8	4.7	104.1	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
286	磨石	C3 グリッド	Ⅲa 層	128	8.6	5.0	941.8	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
287	磨石	D3 グリッド	Ⅲa 層	113	9.8	3.3	605.5	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
288	磨石	C3 グリッド	Ⅲa 層	58	6.0	5.8	296.0	頁岩	北上山地	古生代	
289	磨石	D2 グリッド	Ⅲa 層	89	6.8	3.8	349.1	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
290	磨石	E3 グリッド	Ⅲa 層	81	7.6	3.9	229.6	頁岩	北上山地	古生代	
291	磨石	第2トレンチの衛部	衛部土	(11.2)	8.7	4.2	605.1	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
292	円石	E4 グリッド	Ⅲa ~ Ⅳ層	96	9.3	3.4	506.2	花崗岩	北上山地	中生代白堊紀	
293	円石	D4 グリッド	Ⅲa 層	(11.2)	(4.9)	1.5	109.4	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	
294	円石	D4 グリッド	Ⅲa 層	9.4	7.4	2.0	406.6	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白堊紀	
295	石墨	第2トレンチの衛部	衛部土	223	18.6	4.2	2658.7	花崗岩	北上山地	中生代白堊紀	
296	石墨	C2 グリッド	Ⅲa 層	21.2	17.3	4.7	406.6	麻尾凝灰岩	北上山地	中生代白堊紀	
297	礫部	C1 グリッド	Ⅳ層	6.6	5.4	0.7	334.1	カルンフェルス	北上山地	古生代の頁岩が中生代白堊紀に変成	削除
298	礫部	C1 グリッド	Ⅲa ~ Ⅳ層	7.2	5.4	0.8	47.8	頁岩	北上山地	古生代	
299	礫部	E4 グリッド	Ⅲa ~ Ⅳ層	150	8.9	1.6	353.0	カルンフェルス	北上山地	古生代の頁岩が中生代白堊紀に変成	
300	礫部	D4 グリッド	Ⅲa 層	129	6.0	2.7	219.8	薄板状灰岩	北上山地	中生代白堊紀	礫石削り?
301	礫部	E4 グリッド	Ⅲa 層	(11.2)	6.3	2.5	239.5	頁岩	北上山地	中生代白堊紀	
302	礫部	C3 グリッド	Ⅲa 層	(6.8)	8.5	2.0	243.1	麻尾凝灰岩	北上山地	中生代白堊紀	扁平板状
303	礫部	D2 グリッド	Ⅲa 層	15.7	6.8	1.9	282.0	麻尾凝灰岩	北上山地	中生代白堊紀	
304	礫部	D2 グリッド	Ⅰ層	7.7	5.8	1.5	871.5	頁岩	北上山地	古生代	削除
305	ペンドント	D3 グリッド	Ⅲa 層	3.1	1.7	0.5	354.0	板状岩	北上山地	古生代オルドビス紀	褐色の透青石
306	石串	C1 グリッド	Ⅲa 層	13.5	4.1	3.3	220.30	頁岩	北上山地	古生代	
307	石串	E3 グリッド	Ⅲa 層	6.6	2.1	0.8	16.70	頁岩	北上山地	古生代	欠損品
308	石串	C2 グリッド	Ⅲa 層	22.9	12.9	10.8	403.10	頁岩	北上山地	古生代白堊紀	大型・欠損品
309	石串	E3 グリッド	Ⅲa 層	21.5	4.7	4.0	742.88	薄板状灰岩	北上山地	中生代白堊紀	
310	石串	C3 グリッド	Ⅲa 層	8.5	2.8	2.4	90.28	薄板状灰岩	北上山地	中生代白堊紀	
311	石串	D1 ~ E4 グリッド	Ⅲa 層	15.0	3.1	2.8	221.10	板状岩	北上山地	古生代	
312	石串	D3 グリッド	Ⅲa 層	42	3.0	2.4	45.02	板状岩	北上山地	古生代	
313	石串	第2トレンチの衛部	衛部土	22.9	5.3	4.9	995.12	頁岩	北上山地	古生代	
314	石刀	E4 グリッド	Ⅲa 層	12.3	4.7	2.6	224.65	頁岩	北上山地	古生代	
315	石刀	C1 グリッド	Ⅲa 層	6.9	3.4	1.7	71.32	カルンフェルス	北上山地	古生代の頁岩が中生代白堊紀に変成	
316	石刀	B3 グリッド	Ⅲa 層	7.4	3.4	1.0	37.03	頁岩	北上山地	古生代	再加工?
317	石刀	C3 グリッド	Ⅲa 層	(10.4)	5.0	2.7	128.40	頁岩	北上山地	古生代	複合
318	石劍	D2 グリッド	Ⅲa 層	(15.1)	3.8	2.4	223.0	板状岩	北上山地	古生代	柄のみ
319	軽石製	B3 グリッド	Ⅲa 層	6.4	6.9	3.9	27.17	頁岩	十和田丸山?	古生代第四紀	

## VI 総括

今回の調査区は、過去の調査でE地区と呼ばれる貝層調査箇所から南に約50mに位置する。調査の結果、当初の予想より検出遺構は少なかったが、縄文時代の遺構と、縄文時代前期前葉～晩期末葉・弥生時代前期・古代（平安時代）までの遺物を確認した（※以後「時代」は省略する）。

### 1 遺構

遺構は、土坑10基、柱穴状土坑42個、獸骨・炭化物集中区1箇所を検出した。土坑は、全般に遺存状態が悪く、平面形や深度、その性格などについて、多くを言及できる状況にはない。時期は、検出面や堆積土の様相から縄文期に属するが、土器などの遺物が出土していないことから、厳密には時期の特定が不明確にある。堆積土の様相から、縄文前期前葉～末葉と推定し調査判断とした。柱穴状土坑は、柱穴配置の検討が十分ではなく、掘立柱建物跡の復元には至っていない。これらの時期について、42個中5個の埋土から縄文土器の出土があったものの、異時期の混在と捉えられる。縄文晩期～古代までの時期幅で推定されるが、不明確にある。獸骨・炭化物集中区とは、獸骨片と炭化物の集積が認められた小空間に命名した。獸骨片はニホンジカの肩甲骨の一部と推定される。時期は特定できないが、縄文前期～晩期と推定される。

### 2 遺物

遺物は、土器類大コンテナ18箱、土製品21点、石器類大コンテナ8箱、石製品小コンテナ4箱、チップ・フレーク小コンテナ2箱、動物遺存体（獸骨小片）少量が出土した。縄文土器は、大木1～2b・4～10式、白座式？、門前式、宮戸1b式、田柄貝塚Ⅲ・V・VI群、大洞B～A式などが出土した。弥生土器は前期（青木畳式若しくは砂沢式相当）が、土師器・須恵器は9～10世紀と推定される。土製品はミニチュア土器1点、土偶3点（※何れも縄文晩期）、円盤状土製品17点が出土した。石器類は、石鎌96点、尖頭器8点、石匙7点、石竈2点、スクレイパー60点、石錐4点、異形石器1点、Uフレ27点、コア10点、磨製石斧17点、特殊磨石3点、磨石108点、敲磨器80点、敲石2点、凹石5点、石皿1点、台石13点、礫器44点、板状礫6点である。石製品は、ベンダント1点、石棒39点、石刀20点、石剣1点、軽石製品4点、棒状礫1点である。遺物の出土層位は、崖錐性の二次堆積層出土が多く、層位的資料とは言い難い。以下には遺物包含層の概要をまとめてみる。

今回の調査区では、貝層は未検出（註1）であったが、ほぼ全城に亘り4枚の遺物包含層が認められた。上位からII層、IIIa層、IIIb層、IV層の4枚である。II層は古代～近代までの崖錐性堆積層、IIIa層は弥生前期以降の崖錐性堆積層、IIIb層は縄文晚期頃の崖錐性堆積層と捉えられる。ただし、IIIa層からは大木8a式土器の一括出土があり、またIIIb層の下位（IIIb～IV層として遺物を取り上げた土層などで、分層可能であったと捉えられる）は大木2b式や大木4～6式などを主体としそれより新期の土器の混入がほとんどない。この出土状況を見る限り、III層系全てが移動性の土層（流入した土層）ではなく、一部遺物包含層形成時の堆積層が残存していたと考えられる。IV層は、その出土土器が大木1式や大木2a式には限定できる状況（※本層からの大木2b式は少量）から、To-Cuテフラの降下期を反映する縄文前期前葉～中葉頃の文化層と捉えられる。弥生・古代は、今回の

調査では磨滅した土器小破片（弥生土器は13号のビニール袋で1袋弱、土師器は数点）と須恵器片1点の出土に留まる。出土位置・層位については、弥生土器はⅡ層やⅢ層、古代はⅡ層及びⅡ～Ⅲ層と幅を設けて取り上げた土層で、上述の通り崖縦性堆積層から出土している。なお、今回調査区とは道路を挟み近接地である第19次調査では、平安時代の遺構・遺物が比較的密に検出されている（特に粘土探掘坑と思われる土坑が多いようである）。

## VII 考 察

### 1 宮野貝塚過去の調査歴の整理

宮野貝塚は、縄文～弥生・古代に亘る複合遺跡で、その範囲は南北約580m、東西約250mに広がる。過去の調査では、縄文土器や弥生土器、後北C2式、骨角器、縄文人骨などが出土し、学史的にも貴重な成果や情報を発信してきた遺跡である。また、貝層地点の立地やその帰属時期などの総括的な見地から、縄文海退（海進）などの影響に関わり、古い時期は北寄りの高位な地点に、新しい時期になるにしたがって南寄りの低位な地点に形成される現象にあることが指摘された、言わばモデル的な遺跡の一つでもある。過去の貝層調査箇所は、三陸鉄道南リアス線綾里駅の南側一帯の小高い丘陵地及び丘陵緩斜面地にあり、貝層は南斜面を圍むような形で6箇所に点在している（第4図参照）。それぞれの貝層はA～F地区と呼ばれ、調査箇所の指標としてこの遺跡を語る際には重要視されてきた。しかし、指標であるアルファベットが同じでも実際の調査箇所が異なる調査報告もあり、若干の混乱をきたしていることを地元の教育委員会から指摘されていた。この状況は平成以降に発行された第12次～15次調査報告書（大船渡市教委：2002）と第18次調査報告書（大船渡市教委：2014）の報文を見比べると明らかで、「地点」と「地区」を同列に扱うとアルファベットに食い違いが多々認められる。具体的には第1次調査の調査箇所の記載が、第12～15次調査報告書ではA・B地点とあるが、第18次調査報告書ではA・D地区と記載されている。同様に、第9次調査箇所はB・C地点に対してA・B・C・D地区、第11次調査はB・C地点に対してA・D地区と云った具合である。過去の調査箇所の混乱を放置することは、遺跡内の空間占地の分析などで誤った結果を導きかねない。以下には、この遺跡の将来的活用を鑑みて、現状で得られた情報から精査・整理を試みたい。

筆者の知見の範囲で精査すると、昭和37年（1962年）に発刊された『発掘調査概報宮野貝塚』（※第2次調査報告書）には、A～D地点の記述と併記して「A地点貝塚」、「Aトレーナー」、「A地点トレーナー」、「B地点貝塚」などと表記されている（三陸村教育委員会：1962）ことから、A～D地点の名称はこの調査の際に名付けられたことが分かる。その後、昭和45年（1970年）発刊の『宮野貝塚遺跡調査概報』（第6次調査※江坂輝彌氏調査）において、E地区とF地区的記述が登場する。この調査の際に、従来のA～D地区（地点）にE・F地区の2つの貝層箇所が追加されたと捉えられよう（※「地区」と「地点」の呼び方に違いはあるが、この時の調査まではアルファベットが同じであればほぼ同一の貝層調査箇所を示すと捉えられる）。調査箇所（特に「地区」の名前）の混在を招いてしまったのは、その後実施された昭和53～55年調査（第9～11次調査）と思われる。報文には、「60m×60mの大メッシュを設定し、北から順にA、B、C・・・とすることにした」（宮野貝塚調査団：1981）と記載があるが、調査区の位置図が未確認にある（未提示？）。つまり、従来のB地点若しくはそれよりやや北側をA地区とし、従来のB地点～B地点よりやや南側付近までをB地区に、従来のA地点付近をC地区（※従来のD地点も含まれると思われる）と呼ぶ調査が実施されたと推定され

る。上述のことから、調査箇所に混乱が生じたと捉えられる。ただ、1978年に調査を実施した際のB地区の記述を見る限り、「B地区中央を走る農道を境として・・・」(宮野貝塚調査団：1981)の記述にある農道は從来のB地区（地点）のわずかに南側付近を指すことから、ほぼ從来のB地区（地点）と捉えて良いと考える。何れ、調査を担当した林謙作氏が故人となり、現在では確認がほぼ不可能と云える（この第9～11次調査は、右寛骨に石鎌が刺さったまま自然治癒した人骨の発見などで知られている）。

見解を述べるなら、貝層調査箇所の位置がほぼ明確（統一的に把握できる）と捉えられる第2・6次調査から導かれたA～F地区（「地点」と云う名称でもかまわないと思われる）で統一して示すことが、将来的にこの遺跡が調査・検証された際に、資料の混乱を最低限度に回避する最善の手段と考えられる。上記してきた調査箇所の精査内容は、第18次調査を担当した神原雄一郎氏よりご教示いただいた内容をもとに、筆者の見解を加える形で記述した。誤記・誤認や見当違いの内容があれば、全て筆者の責任である。今後もこの遺跡の特性や消長を多角的に分析・研究することで、多くの有意情報が提供されることを願う次第である。

## 2 地区毎の時期の占地

ここでは、前節で整理を試みた宮野貝塚の6箇所の貝層地区周辺（第4図参照）を単位として、過去の調査から出土した土器の主体性から中心時期の推定を提示してみたい。なお、各時期の居住域や墓域などの、本格的な検討は、今後の調査成果の蓄積を待って行われることが望ましいと考える。

【A地区】 A地区は、標高が26m前後で北～南に下る斜面地である。第2次調査成果からは縄文晚期初頭～前葉大洞B～BC式期が主体で、併せて墓域が密な地区と推定される。平成以降は調査が実施されていない。

【B地区】 B地区は貝層調査箇所の中で最も高位に位置し、標高は30m前後を測る。このB地区付近では、平成以降だけでも第12・13・14・18次調査が実施されており、他の地区に比べて調査された範囲が広く必然的に情報量も多い。縄文中期・後期・晚期及び弥生前期が複合して認められる。狭義的に見ていくと、從来のB地区ほぼそのものを調査したと捉えられる第13次調査区では、縄文中期・後期が主体である。また、台地のほぼ平坦気味の部分を調査した第12次調査では、縄文晚期（大洞B～A式期）が主体と推定される。第14次・第18次調査区は縄文晚期を中心とする。特記事項として、第18次調査Ⅱ区と命名される調査箇所では、縄文晚期後葉～弥生前期にかけての微妙な時期差が層位的観点からも見いだせる可能性が指摘されており、当該期土器編年を検討する良好資料と捉えられる。小結としてB地区は、A地区に近い南側ほど縄文晚期が密と推定される。

【C地区】 C地区は飛び地状に3地点に分かれ。第15次調査において、C地区の中でも南側に相当する部分の調査が実施されている。標高は25～28mで、西側はやや急傾斜な斜面の縁部～斜面部に相当する。縄文前期・中期を主体に晚期中葉が認められる。特記事項としては、縄文前期中葉の貝層や、当該期の土坑から横臥屈葬人骨が出土している。C地区付近は、確認されている宮野貝塚の貝層では最も古い時期に相当する。

【D・E地区】 D・E地区は、筆者の情報収集能力からは多くを言及できないが、近接地を調査した第19次・20次調査の内容から、縄文前期・中期や古代が主体である可能性があり、加えて第19次調査では縄文早期の土器も出土している（註2）。標高は、D地区が23～24m、E地区が約21mである。今回実施した第20次調査区は、E地区の南に近接する部分に相当し、標高は18m前後と宮野貝塚の中

では低い部分の情報提供を担うが、当初の予想に反して検出遺構が少なかった。

【F地区】F地区は第6・16・17次調査において、県道から綾里駅に向かう道路部分や、F地区より東側に相当する部分の調査が実施されている。標高は24~28mで、北から南へ下る緩斜面地にあり、居住域には適した地形にある。第6次調査で縄文中期と推定されるイノシシの歯を穿孔した装飾品を纏った壮年の女性人骨が発見されたのがF地区である。F地区付近は、縄文前期・中期・晩期が密であることが想定される。

### 3 過去の津波浸水域と遺跡立地について

ここでは、今回の調査の原因となった平成23年（2011年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震津波の被災に関連して、当地域の過去に襲来した古津波について振り返り、遺跡立地との関係について若干の考察を行う。

【本地域の過去の津波痕跡】当地域に甚大な被害をもたらした過去の津波災害は、明治29年（1896年）6月発生の三陸地震津波（※最近の分析では津波の高さが綾里で38.2mと推定されている）、昭和8年（1933年）3月発生の三陸地震津波、昭和35年（1960年）5月発生のチリ地震津波などが知られている。『三陸町史第4巻津波編』（三陸町史編集委員会：1989）を参照すると、三陸沿岸では貞觀地震津波（869年）以降、チリ地震津波までの間に18回の津波が発生している。また、ボーリング調査による土壤サンプルの柱状採取と、C14年代測定法を組み合わせた原口強氏の古津波堆積層の研究によれば、大槌湾の調査では過去6000年間の海底シルト層中から22枚の津波堆積層が確認されている。さらに、宮古市～気仙沼市の間には、貞觀地震津波以前の過去6000年間に7回の超巨大津波痕跡が確認されている（原口ほか：2006）。それら7回の超巨大津波痕跡の実年代は、①1900~2000calBP、②2400~2500calBP、③3100calBP、④3650~3800calBP、⑤4200~4300calBP、⑥4900~5000calBP、⑦5350~5450calBPの測定値が提示されている（原口：2006 相原2012、註3）。

【宮野貝塚と古津波堆積層について】遺跡立地と古津波の関係について若干の考察を試みたいが、今回の東日本大震災の津波浸水域と遺跡の分布（立地）関係について鈴木めぐみ氏の論考を参照すると、上述の古津波の影響が、気仙地方の縄文後期における山間部の遺跡増加の一つの要因ではないかと予察される（鈴木：2012）。また、相原淳一氏の論考によれば、上述した原口氏の超巨大津波痕跡（古津波堆積層）の年代測定データと土器型式を比較・検討した結果、①の年代は弥生中期頃（樹形開式以降）、②の年代は縄文晩期末葉（大洞A式）～弥生前期頃（山王IV上層式）、③の年代は晩期初頭頃、④の年代は後期中葉頃、⑤の年代は中期後葉頃（大木9式？）、⑥の年代は前期末頃（大木6式）、⑦の年代は前期中葉頃（大木2b式頃？※津波堆積層の直上にTo-Cuテフラ）の年代が導かれれる。古津波など自然災害の影響が、沿岸地域の河口低地のみならず、流域や山間部を越えて当時の社会を変える一つの原因と仮定すると、本地域についても直接的な影響や何らかの変化が想定される。宮野貝塚では、津波災害に関係する堆積層は未確認にあるが、津波の発生期と遺跡の消長に関わり、遺跡の断絶期（欠落期）などの接点が一致するものかどうか、今後の検討分野の一つと考えられる。参考までに、宮野貝塚において、上記した古津波堆積層の年代と出土土器の関係を模索してみると、土器が少ない時期（ほぼ欠落気味）の一つに大木3式が挙げられ、⑦の古津波堆積層との関係が考えられる（過去の宮野貝塚の調査を振り返っても大木2b式は一定量の出土があるのに対して大木3式は非常に少ない）。ただし、他の古津波堆積層の時期と合致する時期の土器は、減少傾向を示しているとは捉えられない。直接的な影響が小さかったのか、若しくは別な視点で古津波による影響を見い

だせないものか、今後の検討課題は多い。『岩手の貝塚』（岩手県教育委員会：2000）の一文に、宮野貝塚では後期末葉の貝層に砂泥底性のアサリが顕著であるのに対し、前期後半では岩礁性のイガイ主体の貝層中からはアサリが未検出であることを根拠に、後期末の海岸線の後退、強いては出土する貝類の組成から、当時の立地環境や気候変動が推定されている。巨大津波に遭遇した今日的な観点としては、海岸線の変化は気候変動のみならず、古津波の影響も検討の余地があると考える。

**【津波浸水域と遺跡立地】**東日本大震災津波で津波浸水を受けた遺跡が大船渡市内には14ヵ所あるが、第3図に示した遺跡の中では波板Ⅱ遺跡（標高約20～15m）、中村貝塚（約20～10m）、泊貝塚（約20～10m）、馬の背遺跡（約20～10m）、岩崎遺跡（約10m）、大洞貝塚（約25～10m）が該当する。この地区の海岸線は海拔20～30m級の標高が多く、リアス式海岸特有の地形が続くため、津波浸水域に入らない遺跡が大半であるが、上記した浸水を受けた遺跡は河口付近などの低地にあり、標高約15m未満を含む地形に占地している。今回の宮野貝塚第20次調査区は、上述した通り遺跡の中では標高の低い部分（標高18m前後）に相当するが、昭和8年の三陸地震津波や平成23年の東日本大震災津波の津波浸水域から、わずかではあるが外側に位置する（※今回の調査区から西へ約200mの所までが津波浸水域のようである）。宮野貝塚は、寸前のところで過去の津波浸水を回避している場所・地形にあることが指摘されよう（※つまり、この遺跡付近まで避難できれば、人命は救える可能性が高いと云える）。

最後に、津波浸水域に関わらず自然灾害に対して、遺跡立地に関係する情報を検討・提供できる埋蔵文化財調査が、沿岸部の今後の減災・防災の一助になることを願う次第である。

## 註

註1 今回の調査区から駅に向かう道路沿いの畠地（E地区とF地区の中間付近に相当する）などには貝粉が顕著に認められる。

註2 今回の第20次調査は宮野貝塚で最も標高の低い部分であるが、縄文前期の包含層が検出されている。また、近接する第19次調査で縄文早期の土器が出土していることも注目に値しようか。これらの内容から、標高の低い調査箇所においても縄文早期や前期などの古い時期が認められる可能性は否定できないと思われる。従って、この遺跡の調査事例が増えた今日的には、海退だけでなく古津波を加味しての再検討も必要と考えられる。

註3 鈴木氏・相原氏とともに、大阪市立大学準教授原口強氏の津波堆積物の年代研究データを基としている。鈴木氏の引用したデータでは6回、相原氏の引用したデータでは7回の古津波堆積層が認められるらしい。

## IV・V・VIの参考引用・文献

三陸村役場・三陸村教育委員会：1962「宮野貝塚発掘調査概報」

鈴木めぐみ：2012「気仙地方における縄文遺跡の分布傾向と特徴について」『岩手考古学』第23号 p27～51

相原淳一：2012「縄文・弥生時代における超巨大地震津波と社会・文化変動に関する予察－東日本大震災津波の地平から－」『東北歴史博物館研究紀要』13 p 1～20

原口 強ほか：2006「東北地方三陸海岸、大槌湾の津波堆積」『月刊地球』28～8 海洋出版

原口 強・呉井健一：2007「講演要旨」「岩手県大船渡市幕石浜の津波堆積物」「歴史地震」22

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター：2006「動物考古学の手引き」

大船渡市教育委員会：2014「宮野貝塚平成24年度緊急発掘調査報告書」

宮城県教育委員会：1986「田柄貝塚I－遺構・土器編－」宮城県文化財調査報告書第111集

小林達雄監修：2008「総覧縄文土器」

写 真 図 版





遺跡遠景（西上空から）



遺跡遠景（南上空から）

写真図版 1 遺跡遠景



遺跡全景1（上が南東）



遺跡全景2（上が東）

写真図版2 遺跡全景



調査開始当初（北から）



基本層序 1（南から）



第1・2トレンチ（北から）



第3・4トレンチ（西から）



調査区堆土層断面（西から）

写真図版 3 基本層序・トレンチ



包含層掘削（北から）



包含層掘削（南から）



北西部包含層掘削（東から）



中央部包含層掘削（南から）



南西部包含層掘削（西から）



十和田中庭火山



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2

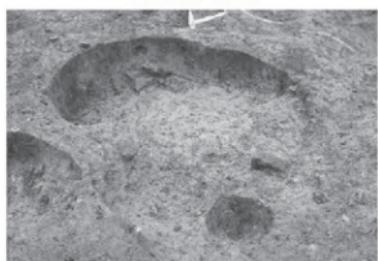
#### 写真図版 4 包含層掘削



1号土坑平面（南から）



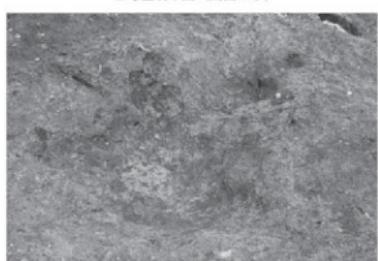
1号土坑断面（南から）



2号土坑平面（南西から）



2号土坑断面（南西から）



3号土坑平面（西から）



3号土坑断面（西から）

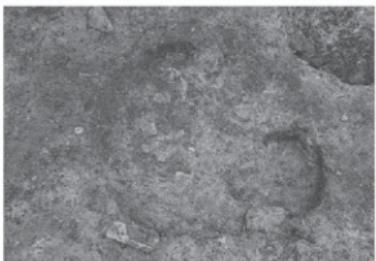


4号土坑平面（西から）

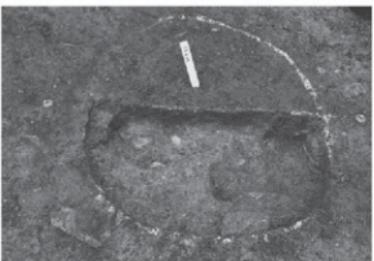


4号土坑断面（西から）

写真図版 5 土坑 (1)



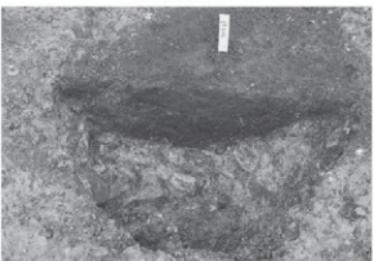
5号土坑平面（西から）



5号土坑断面（西から）



6号土坑平面（西から）



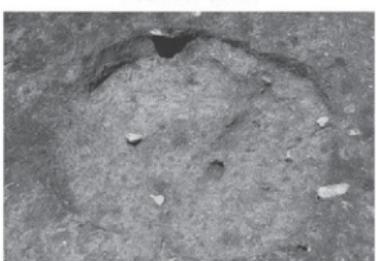
6号土坑断面（西から）



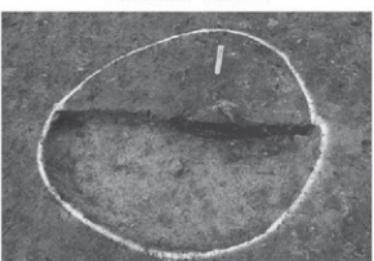
7号土坑平面（南から）



7号土坑精査中（北西から）

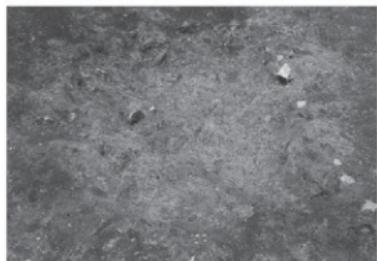


8号土坑平面（南から）

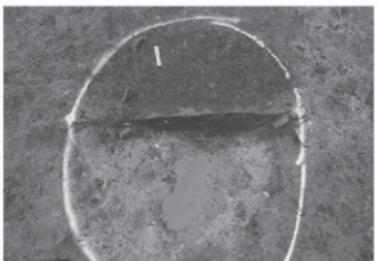


8号土坑断面（南から）

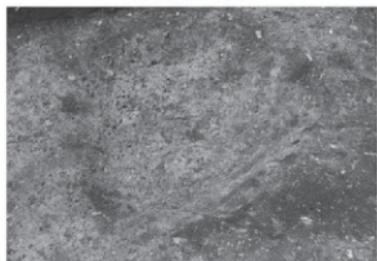
写真図版 6 土坑（2）



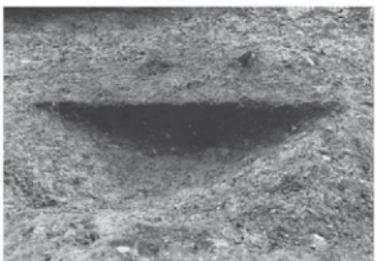
9号土坑平面（南から）



9号土坑断面（南から）



10号土坑平面（東から）



10号土坑断面（東から）



獣骨・炭化物集中区（北から）



獣骨・炭化物集中区（南から）

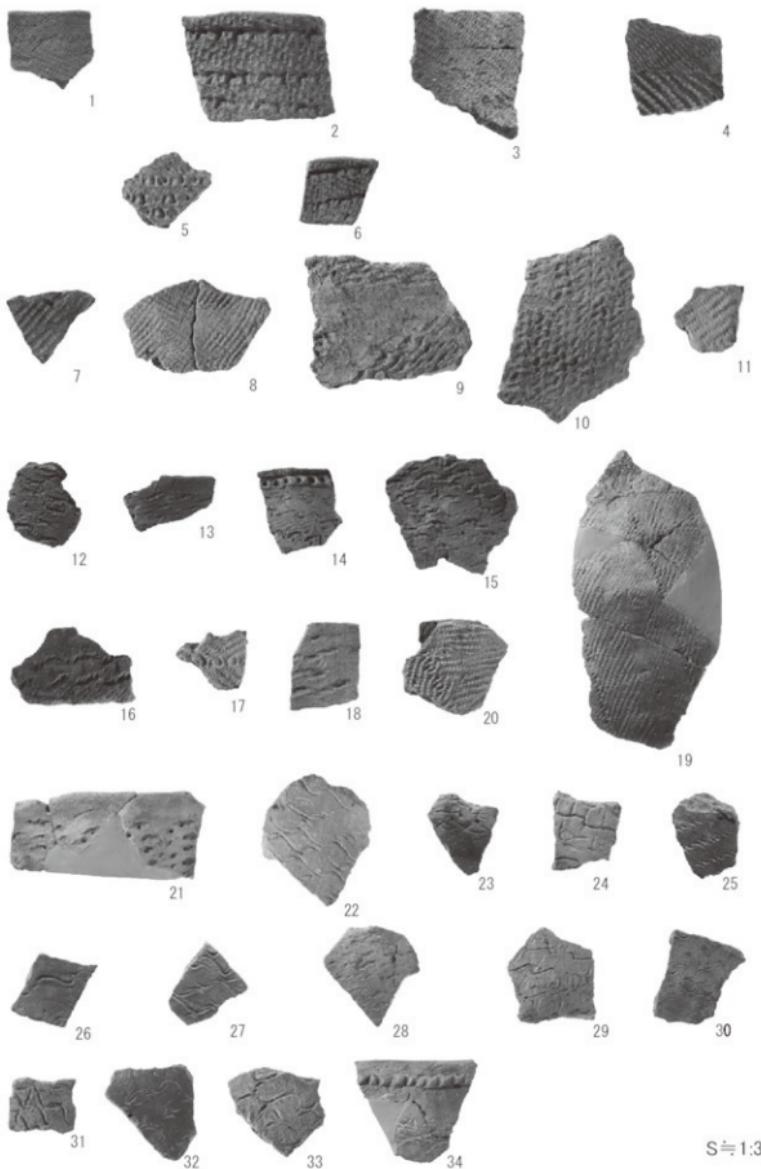


調査終了間際（北西から）

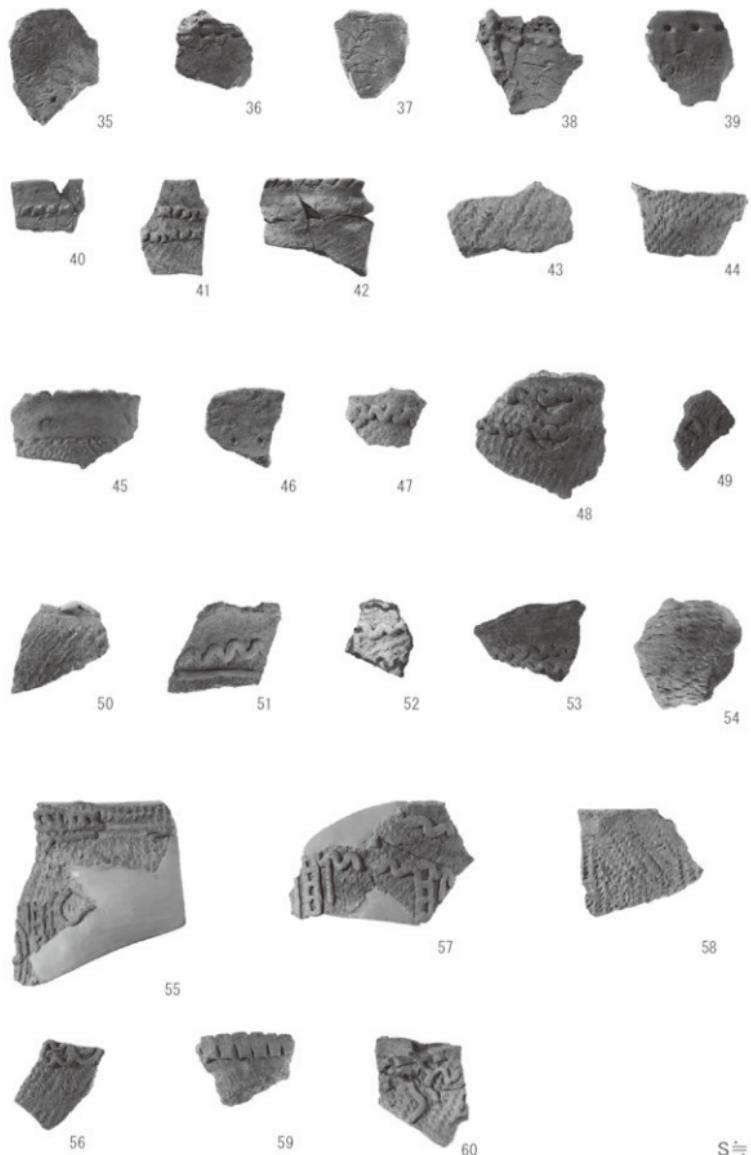


調査終了間際（南から）

### 写真図版7 土坑（3）

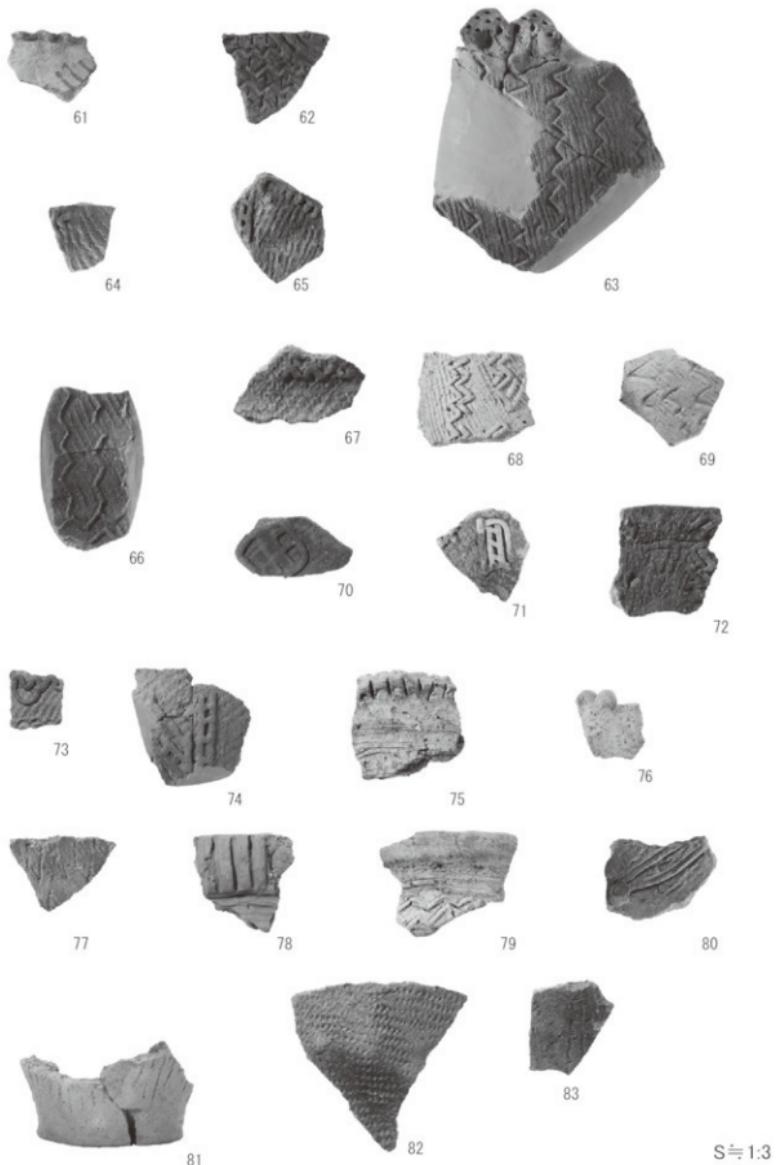


写真図版 8 土器 (1)



S=1:3

写真図版9 土器(2)



写真図版10 土器 (3)



84



85



86



87



88



89



90



92



93



94



95



91



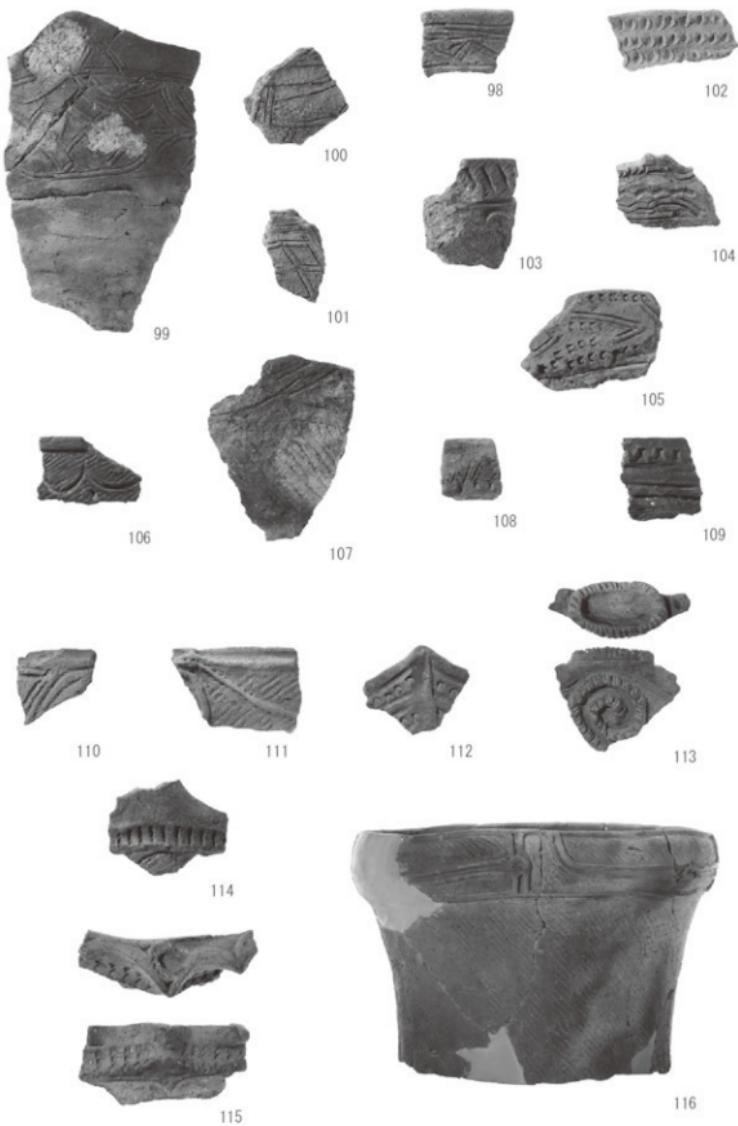
96



97

S=1:3

写真図版11 土器 (4)



S=1:3

写真図版12 土器（5）



117



119



118



120



121



122



123



125



124



126



127



128



129



130



131



132

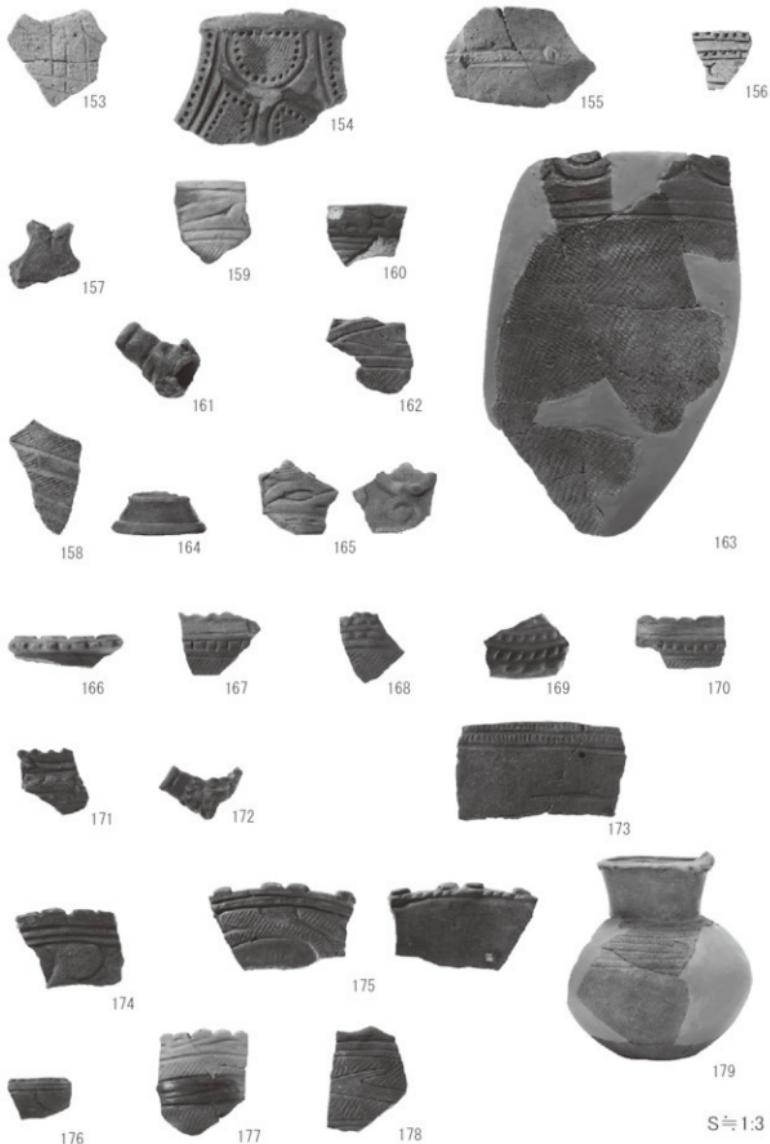
S=1:3

写真図版13 土器（6）

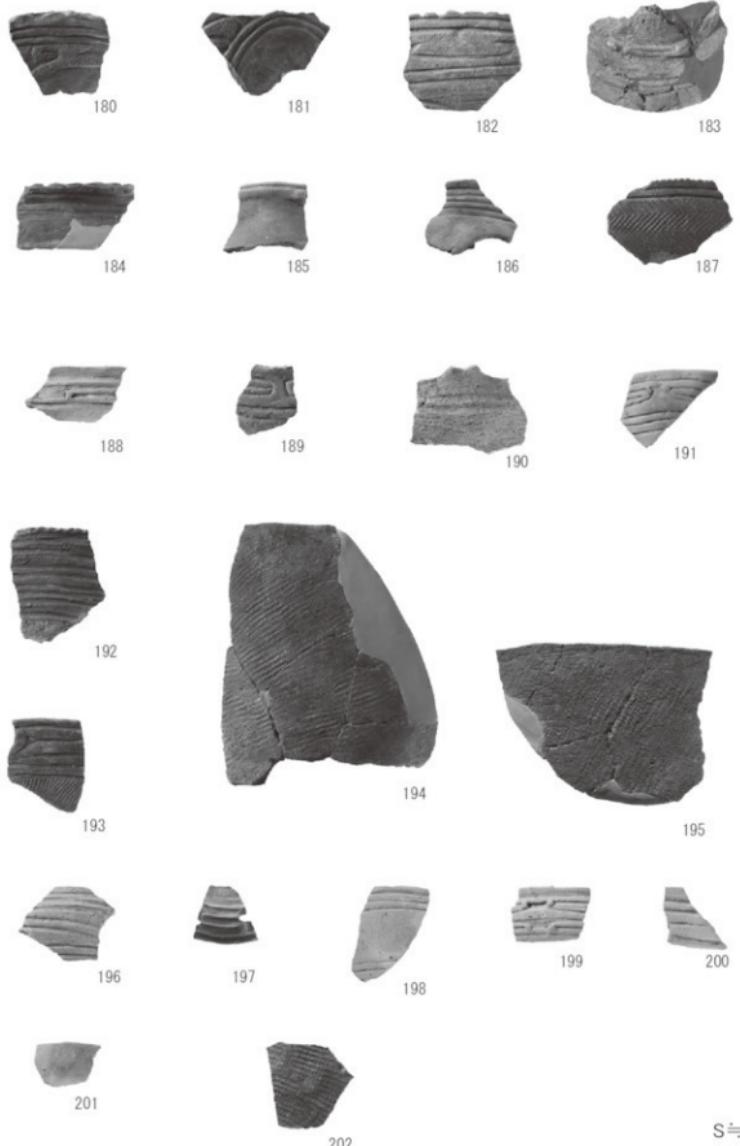


S=1:3

写真図版14 土器（7）



写真図版15 土器（8）



S=1:3

写真図版16 土器（9）



203



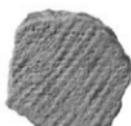
土偶 1 204



土偶 2 205



206



207



208



209



210



211



212



213



214



215



216



217



218



219



220



221



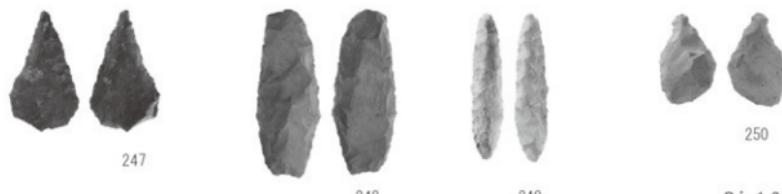
222



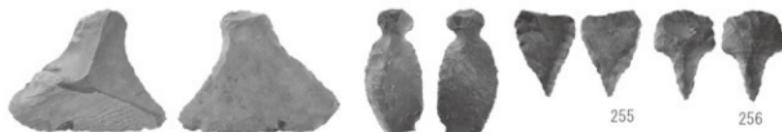
223

 $S \doteq 1:2$ 

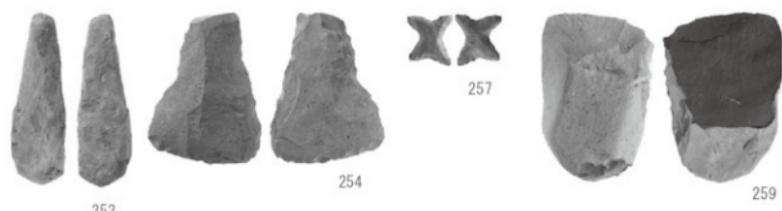
写真図版17 土製品



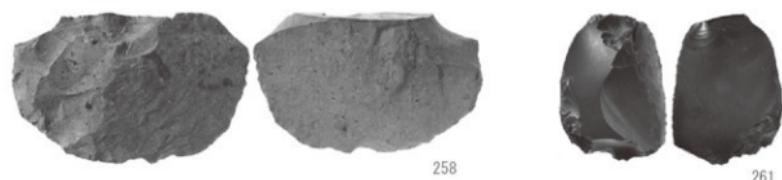
写真図版18 石器 (1)



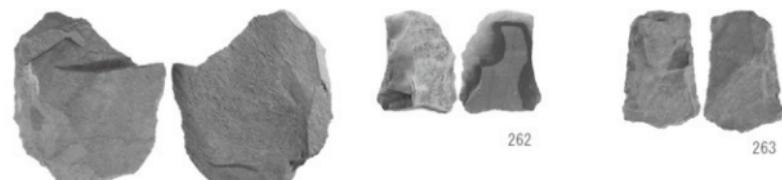
251 252 255 256



253 254 257 259



258 261 262



262 263 264



264 265 266

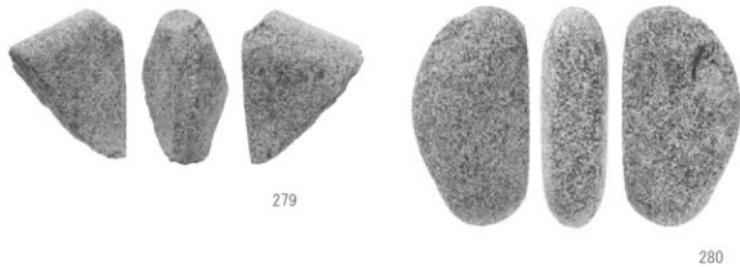
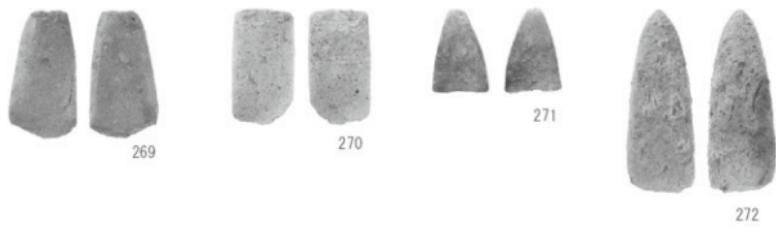
265

267

268

S $\doteq$ 1/2

写真図版19 石器 (2)

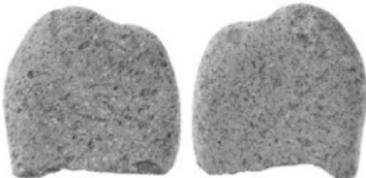


S ≈ 1:3

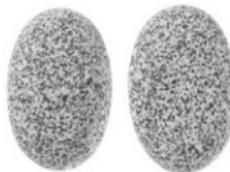
写真図版20 石器 (3)



281



282



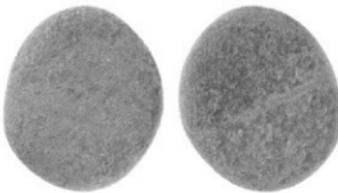
283



285



284



287



286



288

 $S \div 1:3$ 

写真図版21 石器 (4)



289



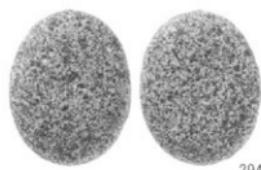
291



290



292



294



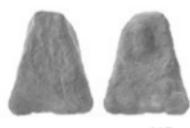
295

S = 1:3

写真図版22 石器 (5)



296



297



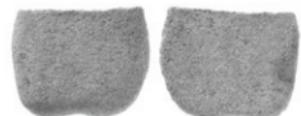
299



300



301



302



304



303

S=1:3

写真図版23 石器（6）



305



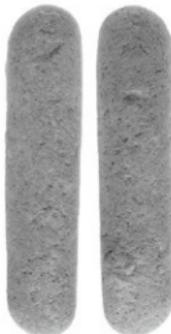
306



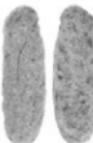
308



307



309



310



312



311



314



315



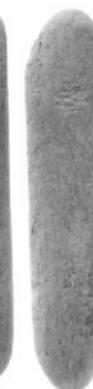
316



317

 $S \approx 1:3$ 

写真図版24 石製品（1）



313



318



319

313、318、319 は S=1:3



320



321



322



323



324



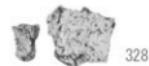
325



326



327



328



329

S=1:2

写真図版25 石製品(2)・獸骨

## 報告書抄録

ふりがな	みやのかいづかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	宮野貝塚発掘調査報告書							
副書名	警察施設灾害復旧事業（大船渡警察署綾里駐在所建設）関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第649集							
編集者名	星 雅之・佐々木隆英							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下巣岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2016年2月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮野貝塚	岩手県大船渡市三陸町綾里字宮野 15-3ほか	03203	MG40-2398	39度 3分 7秒	141度 47分 56秒	2014.04.07 ~ 2014.05.30	375m <sup>2</sup>	警察施設灾害復旧事業大船渡警察署綾里駐在所建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項		
宮野貝塚	集落跡	縄文	土坑 柱穴状土坑 獸骨・炭化物集中区 所	10基 42個 古代土器 土製品 石器類大コンテナ 箱、石製品小4箱、獸骨少量	縄文・弥生土器大18 箱 5点 21点 8 箱、石製品小4箱、獸骨少量	縄文時代前期~弥生時代前期を中心とする遺物包含層の検出。		
要約	今回の調査は、宮野貝塚の第20次調査で、過去に人骨などが出土したE地区と近接する。調査の結果、土坑や柱穴状土坑、縄文時代前期前葉から弥生時代前期に亘る遺物包含層を確認した。4枚目の遺物包含層であるIV層中には縄文時代前期中頃の降下と捉えられる十和田中揮火山灰の混入が認められる。							

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第649集

## 宮野貝塚発掘調査報告書

警察施設灾害復旧事業（大船渡警察署綾里駐在所建設）関連遺跡発掘調査

印 刷 平成28年2月10日

発 行 平成28年2月25日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県警察本部

〒020-8540 岩手県盛岡市内丸8番10号

電話 (019) 653-0110

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印 刷 小松総合印刷株式会社

〒020-0827 岩手県盛岡市鈴屋町15番4号

電話 (019) 624-1374